

飛騨の怪談

岡本綺堂

青空文庫

(一)

綺堂君、足下。そつか。

聰明なる読者諸君の中にも、この物語に対して「余り嘘らしい」という批評を下す人があるかも知れぬ。否、いな足下自身も或は其あるいそのい一人であるかも知れぬ。が、果して嘘らしいか真実らしいかは、終末まで読んで見れば自然に判る。おしまい

嘘らしいような不思議の話でも、漸々に理屈を詮じ詰めて行くと、それ相当の根拠よりどころのあることを発見するものだ。

勿論、僕は足下に対して、単にこの材料の調書しらべがきを提供す

るに過ぎない。之を小説風に潤色して、更に読者の前に提供する
のは、即ち足下の役目である。宜しく頼む。

大正元年十一月

XY生

*

*

*

*

*

*

こんな手紙と原稿とを突然に投げ付けられては、私も少しく
めんくら面食わざるを得ない。宜しく頼むと云われても、これは余ほど
の難物である。例えば、蟹だか蛸だか鮫鰈だか正体の判らぬ魚
を眼前へ突き付けて、「さあ、之を旨く食わして呉れ」と云われ
ては、大抵の料理番も聊か逡巡ぐであらう。況んや素人の小生に

於てをや。この包丁塩梅あんばい甚だ心許ない。

随したがつて實際は真実ほんとうらしい話も、私の廻らぬ筆に因よつて、却かえつ

て嘘らしく聞えるかも知れぬが、それは最初はじめから御詫おわびを申して置
いて、扱さていよいよ本文ほんもんに取かかる。これは今から十七八年以前

の昔話と御承知あれ。

北国ほつくごくをめぐる旅人が、小百合火さゆりびの夜燃ゆる神通川じんつうがわを後に、

二人輓ににんびきの人車くるまに揺られつつ富山の町を出て、竹藪しもおおくほの多い村里に

白粉臭おしろいい女のさまよう上大久保かみおおくほを過ぎると、下大久保しもおおくほ、笹津ささつの

寂しい村々の柴焚たけむりく烟が車の上に流れて来る。所謂いわゆる越中えちゅうだい

平らの平野はここに尽きて、岩を噛む神通川の激流を右に視みなが

ら、爪先上りに嶮けわしい山路やまじを辿つて行くと、眉を圧する飛驒ひだの山

々は、宛がら行手を遮るさえぎるように峭りそそ立つて、氣の弱い旅人を脅かすように見えるであらう。

けれども、地図によれば此処ここらは未だ越中の領分で、足腰の疼いたみに泣く旅人も無し、山霧に酔う女もあるまいが、更に進んで雲を凌ぐしの庵いおり峠とうげを越え、川を抱いたる片掛村かたかけむらを過ぎて、越中飛驒の国境くにざかいという加賀澤かがそに着くと、天地の形が愈いよいよよ變つて来て、「これが飛驒へ入る第一の関門だな。」と、何人なんびとにも一種の恐怖と警戒とを与えるであらう。乱山らんざん重疊ちようじよう、草鞋わらじの穿はけぬ人の通るべき道ではない。

この加賀澤から更に二十里ほどの奥であると云えば、其その地勢などは委くわしく説明する必要もあるまい。そこに戸数八十戸ばかり

の小さい駅しゆくがある。山間の平地に開かれた町で、学校もあれば寺院もあり、且かつは近年その其附近に銀山が拓かれるとか云うので、土地は漸次しだいに繁昌むかに向い、小料理屋のようなものも二三軒出来て、口くちべに臙脂ちべにの厚い女が斯こんな唄を謡う様になつた。

行くにや辛いがお山は飛驒ゆよ

黄金こがね白しろ金花かかねが咲く

「小旦那こだんな……小旦那……昨夜ゆうべも亦また、彌作やさくの内で鶏を盗やられたと云いますよ。」

「鶏を……。誰に盗やられたろう。又、銀山の鉋夫の悪戯いたずらかな。」

と、若い主人は少しく眉を^{ひそ}顰めて、雇^{やといにん}人の七兵衛^{じじい}老爺^{みかえ}を顧つた。

「何、何、鉾夫じゃアねえ。」と、七兵衛は頭^{かしら}を掉^ふつて、「それ、例の……。」

「例の……。」

「^{わろ}ですよ。」

「むむ、山^{やまわろ}か。ははははは。ここらでは未^{まだ}そんなことを云つてゐるのか。」

若い主人は一笑に附し去ろうとしたが、七兵衛は固く信じて動かぬらしい。

「小旦那は幾ら東京で学問したって、そりやア駄目です。現

在、
が出て来るんだから仕方がねえ。論より証拠だ。」

(二)

若主人の名は市郎いちろう、この駅しゆくでは第一の旧家と呼ばれる角川つのかわ家の一人息子である。斯こういう山村に生れても、家が富裕であるお底かげに、十年以前から東京に遊学して、医術を専門に研究し、開業試験にも首尾好く合格して、今年の春から郷里に帰った。年は二十七歳で、色の浅黒い活発の青年わかものである。

ここは山村で昔から良い医師が無い。市郎の父は之これを憂いて、倅せがれには充分に医術を修業させ、将来は郷里で医師を開業させる心こころ

ころぐみ

組であつた。市郎も固より其覚悟であつたので、歸郷の後、

半年ばかりは富山の某病院あるの助手に雇われ、此頃このころ再び歸郷して

愈いよいよよ開業の準備に取懸とりかかつている中に、飛驒の山里は早くも冬を

催して、霜に悩める木葉このはは雨のように飛んだ。

十月の末ではあるが、朝の霜は白い。其その白きを履ふんで散歩す

る市郎ところの許へ、彼の七兵衛老爺おやじが駈けて来て、大きな眼と口とを

頻しきりに働かせながら、山やまわろの一件を注進したのである。

対手あいてが余り熱心であるので、市郎も無下むげに跳ね付ける訳にも行

かぬ。

「然そうかねえ。」と、軽く笑つて、「僕等も小兒こどもの時には其そんな

話を聞いたことがあるが、真実ほんとうに が出るのか。」

「確^{たしか}に出ますよ。幾^{いく}らも見^みた者^{もの}があるんだから争^{まが}われねえ。」

「そこで、昨夜^{ゆうべ}も彌作^{やま}の許^{ところ}で鶏^やを盗^{ぬす}られたんだね。」

「何でも夜半^{よなか}のことだと聞^ききましたが、裏^{うら}の鶏舎^{とや}で羽搏^{はばたき}の音^{おと}が

烈^{はげ}しく聞^きえたので、彌作^{やま}が窃^{そつ}と出^でて見^みると、暗^{くら}い中に例^{れい}の が立^た

つてい^る。彌作^{やま}も魂^{たまげ}消^けて息^{いき}を殺^{ころ}していると、 鶏舎^{とや}の中^{なか}から一

羽^{つか}を握^{つか}み出^でして、ぎゅうと頸^{くび}を捻^{ねじ}つて、引^ひ抱^{つか}えて何処^{どこ}へか行^いつ

て了^{しま}つたと云^いいますよ。」

「ふむ。」と、市郎^{いちろう}は首^{ひね}を拈^ねつて、「で、其^その という奴才^どん

なものだね。」

七兵衛^{しちべい}は慌^{あわ}てて遮^{さへぎ}つて、更^{さら}に前後^{ぜんご}を見廻^{みまわ}して、若^わい主人^{しゅじん}を叱^{しか}る

ように、

「奴なんぞと云うじゃアねえ。何処に立聞たちぎきをしていて、何んなど崇たをするか知れねえ。幾らお前様めえさまが理屈を云ったって、に逢あったが最後、何んな人間だつて敵かなうものじゃねえから……。」

「じゃア、奴というのは先まず取消にして、兎とにかく其そのとかいう者に一度逢つて見たいもんだね。」

「馬鹿云わつしやい。」

若い主人は又叱しられた。

ここで鳥渡ちよつと其そのなるものを説明して置く必要が有る此この

土地に限らず、奥州にも九州にも昔から山男又は山の名が伝え

られている。勿論もちろん、繁華の地には無いことであるが、山間の僻

地では稀そのに其姿を見ることがある。要するに猿とも人とも区別の

付かぬ一種奇怪の動物で、中には人間の詞を少しは解する者もあるとかいう。山　　ゐろは恐く和郎おそろわろという意味であろう。で、大いのを山男といい、小さいのを山　　と云うらしいが能くは判らぬ。まだ其他そのほかに山姥やまうばといい、山女郎やまじよろうと云う者もある。これは恐く彼等の女性であろう。

兎とに角かくに彼等是一種の魔物として、附近の里人から恐れられている。山深く迷い入った獵夫かりゆうどが、暗い岩蔭うそぶに嘯うそぶいて立つ奇怪の　　襦みれば、銃を肩にして早々に逃げ帰る。万これ一これ之これに一発の弾を与えたならば、熱病其他そのたの怖るべき祟たたりを蒙こうむつて、一家は根絶ねだやしになると信じられている。彼等は勿論深山の奥に棲んで、滅多に姿を見せることは無いが、時としては里に現われて食物を獵あさる。

其^{その}場合には矢^{やは}張り一般の盜賊^{ぬすびと}の如くに、成^{なる}べく白昼^{ひる}を避けて夜陰に忍び込み、鶏や米や魚や手当り次第に攫^{さら}つて行く。其^その素捷^{すばや}いことは所謂^{いわゆるましら}猿の如くで、容易^{その}に其影を捕捉することは能^{でき}ぬ。又たとい其姿^{その}を認めた者があつても、臆病な里人は決して之^{これ}を追おうとは試みない。若^もし迂濶^{うかつ}に妨害を加えたらば、彼等は何^{なんど}時^き如何^{いか}なる復讐^{ふしう}をするかも知れぬので、何事も殆どが為すま^まに任して置く。

に對する奇怪の伝説や歴史は、ま^{このほか}鹿^{しか}他にも沢山あるが、概括して云えば先^まずこんなものである。

市郎も此この土地に生れたので、小児こどもの時から山やまの話を聞いていた。「そんなに悪いたずら戯ずをすると、山 毎やつて了しまいますよ。」と、亡母なきははから嚇おどされたことも有った。が、多年東京の空氣に混まじっている中うちに、そんなお伽話のような奇怪な伝説は、彼の頭腦あたまから悉すつかり皆忘れられていたのを、今や再び七兵衛老爺おやじから叱るが如ごとくに諭さとされて、彼は夢のような少年当時の記憶を呼び起おこすと同時に、彼の山 なるもの就ついて尠すくなからぬ好奇心を生じた。

「とは何だろう矢やはり猿ひびか狒ひび々の一種か知ら。」と、市郎は頻しきりに考えた。

七兵衛が去った後の裏庭は閑静しずかであつた。旭日あさひの紅い樹の枝に

折々小禽ことりの啼く声が聞えた。差したる風かぜも無いに、落葉は相変らずがさがさと舞つて飛んだ。

「市郎、大分寒くなつたな。」と、父の安行やすゆきが背後うしろから声をかけた。安行は今年六十歳の筈であるが、年齢としよりも遥はるかに若く見られた。

父がここへ来たのは丁度ちやうど幸いである。市郎は彼かの就つて父の意見を訊ただすべく待ち構えていた。が、父の話は其そんな問題で無かつた。

「時に忠ちゆういち」さんさんから何か消息たよりがあつたか。」

「何でも来月初旬には帰郷するということでしたが……。」
「そうか。それは好都合だ。」と、父は満足えみの笑を洩らした。

「ですが、私の為に態々わざわざ帰郷させるのも気の毒ですから、此方こつちは別に急ぐ訳でもないから、冬季休業まで延期しろと云つて与やりました。」

「そう云つて与やつたか。」と、安行は少しく不平らしい口吻くちぶりで、

「当人が帰ると云うなら、帰つて来いと云つて与やれば可いいのに：

。成なるほど、今の所でお前の婚礼を急ぐにも及ばないが、決つた

事は早く行やつて了しまうに限る。吉岡の阿母おつかさんも急いで居るんだか

らな。」

「でも、一ひとつき月や二ふたつき月を争うこともありますまい。」

「むむ。阿母おつかさんはまア何どうでも可いいとしても、冬子ふゆこさんが嘸さぞ

待っているだろう。」

市郎は少しく顔を染めた。

「まあ、可い。」と、父は首肯うなずいて、「そんなら其その様に吉岡の

阿母おつかさんの方へも云つて置こうよ。倅せがれは何どうも冬子さんを嫌つて

いるようですから、婚礼は当分延のびしますと……。はははははは。」

安行は我子むかに対つても、何時いつも平気で冗談を云うのだ。市郎も

笑つて聞いていたが、やがて例の一件を思い出した。

「阿父おとつさん。あなたに伺つたら判るでしょうが、昨夜彌作ゆうべの家で

鶏とを奪とられたそうですね。」

「むむ。七兵衛がそんなことを云つたよ。」

「私も七兵衛から聞いたんですが、山　　奪とつたとか云うことで

す。一体、　　なんて云うものが實際居るんですかね。」

「さあ、居るとも云い、居ないとも云うが、俺にも確然しつかりとは判らないね。」

「けれども、彌作は確たしかに視たと云いますが……。どうも不思議ですよ。」

「不思議だね。」とばかりで、父は此この話はなしを余り好まぬらしい。

「ねえ、阿父おとつさん。外国でも遠い田舎へ行くと、種々いろいろ不思議な

話があるそうで……。約つまり一種の迷信ですね。ここの山　なんて

云うものも矢やはり其その一つでしょう。わたくしは之これを十分に研究

したいと思うんですが……。忠一君も曾かつてそんな話を為したことが

有りましたよ。」

「　を研究したい。」と、安行穠やや真面目になつて、我子の顔

を凝^{じつ}と視^みた。

「そうです。恐^{おそ}く猿^{さる}か何かでしような。」

「猿^{さる}でも猩^{しょうじよう}々^{じよう}でも、そんなものには構^かわずに置^おくが可^いい。先

年駐在所の巡査が、を追^おつて山の奥へ入^いつたら其^{その}留守に駐在所

から火事^はが始^はつて、到^{とう}頭^{とう}全^{まる}焼^{やけ}になつて了^{しま}つたことが有^ある。加^し

之^かも駐在所が一軒^{やけ}焼^{やけ}で、近所には何の事も無^なかつた。其^その巡査も

後に病氣になつたそうだよ。」

物の道理を相当に心得ている筈の父安行すらも、矢^やはり
るる^{いちにん}一人であるらしい。市郎は肚^{はら}の中で可^{おか}笑^{かし}く思^{おも}つた。
を恐

わろ

に對する市郎の好奇心は愈いよいよ募つて來たので、彼は何とかして父を釣り出そうと試みた。

「あなたも　　が怖いんですか。」

「怖いとも思わないが、好んで其そんなものに関かかりあ係う必要も無いじゃアないか。」

と、安行は情すげなく答えた。

「祖父おじいさんは　　を見たそうですね。」

「誰から聞いた。」

「死んだ阿母おつかさんから聞いたことがあります。」

「祖父おじいさんは　　に殺されたのだ。」と、父は思わためいき歎息を吐い

た。

市郎は驚いて飛び上った。

「え、祖父おじいさんは　に……何どうして殺されたんです。」

「そんな話は止よそうよ。」

一旦は斯こう云ったが、到底とても黙って承知しそうなでもない我子の熱心な顔を見て、安行は又思い直したらしい。

「では、話して聞かせるから、まあ此方こっちへ来い。」と、父は先に立って、日当りの好いい小屋の前に進んだ。

午前十時、初冬の日いよいは愈いよ暖かく麗うらかになつて、白しろい霜の消えて行く地面からは、遠おちこち近に軽い煙を噴いていた。南みなみむき向の小

屋の前には、二三枚の蕤むしろが拵むしげて乾してあつた。父子はここに腰

を卸^{おろ}して、見るとも無しに瞰^{みあ}上げると、青い大空^{やこえぎ}を遮る飛驒^{あばら}の山々も、昨日今日は落葉に瘦せて尖^{さな}つて、宛^{おおい}ら巨大なる動物が肋^{あばら}骨^{ぼね}を露^{あら}わした様^{よう}にも見えた。其骨^{その}の尖角^{とがり}の間から洩^{やが}るる大空が、気味の悪いほどに澄切^{すみき}つているのは、驪^{やが}て真黒な雪雲を運び出す先触^{さきづれ}と知られた。人馬の交通^{さこえぎ}を遮るべき嚴寒の時節^{ようや}も漸く迫^よるのである。

「今^{ちようど}から丁度五十年前の事だから、俺も真実^{ほんとう}の話は能くも知らない。後^{ひと}に他から聞いたのだが……。」と、安行は我子^{みかえ}を顧^みつて、「矢^やはり今時分のことだ。お前の祖父^{おじい}さんが隣村まで用達^{ようたし}に出かけて、日が暮れてから歸つて来た。其晩^{その}は好^いい月夜で二三町先まで能く見える。祖父^{おじい}さんは少し酔つていたので、何か小唄

を謳^{うた}いながらぶらぶら来ると、路^{みち}傍^{ばた}の樹の蔭から可怪^{おかし}な者がちよこちよこ出て来た。猿のような、小兒^{こども}のような者で、矢^やはり真^ま直^{ただ}に立つて歩いて行く。はて、不思議だと思いながら、拔^ぬ足^{きあし}をして窃^{そつ}と尾^つけて行くと、不意に赤兒の泣声が聞えた。熟視^{よくみ}すると、其奴^{そいつ}が赤兒を抱えていたのだ。」

市郎は息を詰めて聴いていた。

「そこで、祖父^{おじい}さんも考えた。これは例の山越の赤兒^{ひと}を攫^{さら}て行くに相違ない。対手^{あいて}が対手^{あいて}だから大抵の事は見逃して置くが、人間を攫^{さら}って行くのを唯打捨^{ただうつちや}つて置く訳には行かぬ。其^{その}当時の事^{こと}だから、祖父^{おじい}さんも腰に刀を佩^さしていたので、突然^{いきなり}にひらりと引拔^{ひきぬ}いて、背後^{うしろ}から「待てッ」と声をかけた。対手^{あいて}は振返^{ふりかえ}って

屹きつと此方こつちを視みたが、生憎あいにくに月うしろを背後うしろにしているので其顔そのは能く判らなかつた。」

「顔は判りませんでしたか。」と、市郎は失望の息を吐ついた。

「顔は判らなかつたが、暫時しばらくは此方こつちを睨にらんで居たらしかつた。が、何分こつちにも此方こつちは長い刃物ふりかざを振翳ふるかざしていたので、対手あいても流石さすがに気怯きおくれがしたと見えて、抱えていた赤児そこを其処ほうへ投だり出して、直まつしぐら驀ま地に逃にげて了しまつた。」

「何地どつちの方へ……。」

「あの山の方へ……。」と、安行は北を指さして、「勿論もちろん、飛ぶように足が疾はやいとのだから、到底追とい付もく訳には行かない。そこで、祖父おじいさんは其その赤児あかりを拾あつて歸かへつて、燈火よぐみの下で熟視よくみると、

生れてから十月位にもなろうかと思われる男の児で、色の白い可愛い児であつた。いづれ近所の人の児であらうと、明る^{あく}朝方^{ほう}々^{ぼう}へ問い合^あわして見たが、この駅^{しゆく}では小児^{こども}を奪^とられた者は一人も無い。隣村にも無い。約^{つま}り何処^{どこ}から持つて来たの^{しま}だか判らずに了^{しま}つた。」

「其^その小児^{こども}は何^どうしました。」

「まあ、漸^{だんだん}々に話^わす。其^その小児^{こども}の事よりも、先^まず祖父^{おじい}さんの方^{かた}を話さなければなら^なない。祖父^{おじい}さんは強^{あいて}い人であつたから、別に何とも意^とにも介^{あいて}めず^とにいた処^{あいて}が、対^{あいて}手の方^{かた}では執念^{しつねん}深く怨^{うら}んでいて、三日の後に残酷^{さくこく}な復讐^{ふくしやう}を為^したよ。」

安行^{あんぎやう}の声は少^{すく}しく顫^{ふる}えて聞^{きこ}えた。

(五)

「復讐……。山^{やまわろ}が……。一体どんなことを為^しました。」と、

市郎も思わず摺^{すり}寄ると、安行は今更のように嘆息した。

「それから三日目の晩に、祖父^{おじい}さんは用があつて又隣村まで行つ

たが、夜が更けても歸つて来ないので、家^{うち}中^{ぢゅう}の者も心配して、

松^{たいまつ}明^つを点けて迎いに出た。其^{その}晩は真^ま闇^{くら}で、寒い山風が吹き下^{おろ}

していた。で、先夜山^{こども}かぬ児^{とり}を奪^{かえ}返したという場所へ来る

と、祖父^{おじい}さんは血だらけになつて死んでいた。さあ大騒ぎになつ

て、よくよく死骸^{あらた}を検めると、人か獣か知らないが何でも鋭い牙

のある奴が、背後うしろから飛び付いて喉笛を食い破ったらしい。祖父さんも幾らかは防いだと見えて、手や足にも引つ搔かれた爪の痕が沢山あった。勿論もちろん、死人しにんに口無しで、誰に何どうされたのか判らないが、祖父さんは他ひとから恨うらみを受けるような記憶おぼえも無し、又普通の追剥おいはぎならば斯こんな残酷な殺し方をする筈がない。突然いきなりに人の喉笛に噛み付くなど云うことは、普通の人間には容易できに能る芸で無い。それ等の事情から考えると、同じ場所といい、残酷な殺し方と云い、どうしても例の山　が先夜の復讐に來たとしか思われないのだ。いや、確たしかにそれに相違ないということに決着して、死骸は寺に葬った。すると、まだまだ驚くことが有る。」

斯こう云つて父は一息吐ついた。市郎も余りに奇怪なる物語に氣を

吞まれて、何とも詞を挿む勇氣が無かった。

「それから初七日しよなぬかの日に、親類一同かたが式の如く寺参りに行くと、

祖父おじいさんの墓は散々に掘り返されて、まだ生々しい死骸が椿の樹

の高い枝に懸けてあつた。勿論もちろん、誰の仕業か知れないが、これ

も大抵は判っている。其以来その、土地の者は愈いよよ山を恐れるよう

になつて、今日こんにちまで誰も指をさす者が無いのだ。まあ、そんな

訳だから何も好んで山なんぞ関か係かりあうことは無い、打捨うちちやつ

て置く方が可いいよ。」

「成なるほど不思議ですな。」と、市郎も何だか夢のように感じた。

天狗や山男や、そんなものは未開時代の昔むかし語がたりと一図いちずに信じて

いた彼の耳には、此話このが余りに新し過ぎて、殆ど虚実の判断に迷

つた。が、彼は一概に之を馬鹿馬鹿しいと蔑して了うほどの生物識でもなかった。市郎は飽までも科学的に此の怪物の秘密を
あば
訐こうと決心したのである。

「それで、明治以後にも相変らず其んな怪談が屢々ありましたか。」

「さあ。」と、父も考えて、「今も云うような訳で、此方では誰も手出しを為さないから、對手の方でも別に悪い事は為さないらしい。時々里へ出て来て鶏や野菜などを掻つ攫つて行くけれども、まあ其位のことは打捨て置くのさ。」

「警察でも構わないんですか。」

「昔は女や小児を攫つたと云うことだが、今は滅多にそんな噂を

聞かない。で、人でも殺せば格別だが、小泥坊こどろぼうをする位のこと

では、警察でもまあ大目に見逃して置くらしい。先刻さつきも云った通

り、巡査が一度追掛おっかけたことも有ったが、到頭とうとう捉つかまなかつた。

何しろ、猿と同じように樹にも登る、山坂を平氣かで駈かける、到底とても人

間の足では追いつかないよ。併しかし近所に銀山も拓けて、漸々だんだんこ

こらも賑にぎやかになるから、も山奥へ隠しまれてつて、余り出なくな

るかも知れない。」

「そうですねえ。ここらも昔に比べると余よほど開けて来ましたか

ら……。」

「土地の繁昌は結構だが、銀山の鉱夫などが大勢入込いりこんで来たの

で、怪しげな料理屋などが追々おいおい殖えて来るのは些ちつと困る。」と、

安行は苦笑いした。

「今に山　も料理屋^{あが}坐^{あが}つて、甚^{じん}九^くでも踊るようになるかも知れません。ははははは。」

^{おやこ}父子は笑いながら内へ入った。

今日は些^{ちつ}とも風のない温かい日であつた。午^{ひる}餐^{めし}の済んだ後、

市郎は縁側に立つて、庭の南天の紅い実を眺めていると、父の安行が又入つて来た。

「好^いい天気だな。何^どうだ。運動ながら吉岡の家^{うち}へ一^{いっ}所^{しょ}に行かないか。吉岡の阿母^{おつか}さんに逢つて、お前の婚^{よめ}礼^れを延^のす^ばことを一^{こと}応^わ断^わつて置^おこうと思^{おも}うから……。」

「はあ、お伴^{とも}しましょう。」

市郎は散歩が好すきであつた。加之しかも未来の妻たるべき冬子の家を訪問するのであるから、悪い心こころもち地しは為ななかつた。早速に帽子を被かつて家を出た。

近来賑にぎやかになつたと云つても、矢やはり山間の古い駅しゆくである。町の家々は昼も眠ねつてゐるように見えた。

富山の友人から貰もらつたトムと云う大きな西洋犬せいよういぬが、主人おやこ父子の後を遅のそ々と躡ついて行つた。

(六)

長くもない町を行ゆき尽つくして、やがて駅しゆく尽頭はずれの角かどに來ると、冬

を怨む枯柳が殆ど枝ばかりで垂れている傍に、千客万来と記した

角行燈かくあんどうを懸けて、暖簾のれんに柳屋と染め抜いた小料理屋があつた。

雪国の習で、板葺いたぶきの軒は低く、奥の方は昼も薄暗い。

安行父子が今やここの門かどを通ると、丁度ちやうど出合頭であいがしらに内から笑

いながら出て来た女があつた。年は二十二三でもあろう、髪は銀い

杏返ちやうがえしの小粋な風ふうであつた。

市郎の顔を見るや、彼女かれは俄にわかに衣紋えもんを繕つくろつて、「あら、若旦那

……。」と、叮嚀ていねいに挨拶した。市郎も黙つて目礼した。

「よいお天気になりました。」と、女は笑えみを含んで再び詞ことばをかけ

た。

「好いい天気になりましたなあ。」と、市郎も鸚鵡返おうむがえしに挨拶し

て、早々にここを行き過ぎた。女は枯柳の下に立つて、暫時は其の後姿を見送っていた。

「お前はあの女を知っているのか。」

五六間^{けん}行き過ぎてから、安行は低^{こごえ}声で訊いた。

「いえ、知つてると云う程でも無いんですが、この夏、吉岡の忠一君が帰省した時に、一^{いつしよ}所^{うち}にあの家へ飲みに行つたことが有るんです。何、唯^たつた一度ですよ。」

「そうか。併^{しか}し狭い土地だから、お前が角川の息子だと云うことは、先方^{むこう}でも知つてゐるだろう。あんな許^{ところ}へ余^{あんなま}り出^{ではいい}入するなよ。

世間の口が煩^{うる}さい。」

「そうですとも……。あんな家^{うち}へは決して二度と足^{あし}踏^{ふみ}は為^しませ

んよ。」と、市郎は潔いさぎよく答えた。が、何を思い出したか、嬌にやに然や笑いながら、「それでも忠一君は彼の女あに思惑でも有ったと見えて、頻しきりに戯からつて騒いでいましたよ。」

「若い者には困るな。」と、安行も共に笑いながら、「あれは酌し婦やくふだろう。何という名だ。」

「たしかお葉ようと云いました。」

「お葉か。忠一が今度帰ったら冷評ひやかして与ろうよ。」

「詰つまらない。お止よしなさいよ。あれでも表面は真面目なんですから……。」

「それだから戯からつて与やるんだ。」

斯こういう暢気のんきな親父が、何故山やまわろなんぞを恐れるのだろうと、

市郎は不思議に思いながら、不図顧ると、自分達の後を追つて来たトムの姿が見えない。

はて、何処へ行つたかと思廻すと、犬は彼の柳屋の前に止つて、お葉から何か食物を貰っているらしい。

「トム、トム……。」と、二三度呼んだが、犬は食物に氣を奪られて、主人の声を聞付けぬらしい。市郎は舌打しながら引返して来た。

「トム、トム……。」と、少しく声を暴くして呼ぶと、犬は初めて心付いたらしく、食物を捨てて駈け出そうとしたが、早くも背後からお葉に抱かれて了つた。

「この犬は良い犬ですね。」

「無闇に吠えて困るんです。」

「でも、温良おとなしいわ。妾あたし、此犬このが大好だいすきよ。」

「トム、トム……。」と、市郎は又呼んだ。犬は尾を掉ふつて行こうとしたが、お葉は相変らず緊しつかり乎抱かかっていた。

「トム、トム……。」

市郎は重ねて呼びながら、犬の頸くびに手をかけると、お葉は傍そばへ寄よつて来て、低声こゝろえで少うらみしく怨恨うらみを含んだように、

「あなた、あの時限ときぎり被入いらしつて下さらないのね。」

市郎は黙っていた。

「後生もですから、あなた最もう一度来て下さいな。え、お厭いやですか。え、どうしても厭いや……。来て下さらないの。」

「厭という事も無いんだが……。」と、市郎は返事に困って、思わず父の方を顧みかえると、安行は小半町こはんちようばかり先の木蔭こかげに立つて、此方こつちを凝じつと見詰めているので、市郎は何とも無しに赤面した。

「兎とにかく又来ますよ。」

ことば

詞短かに云い捨てて、無理に犬を牽ひき出すと、お葉は漸く手を放したが、今度は市郎の腕に手をかけて、

「あなた、必然きつとですか。可よござんすか。欺だますと山　を頼んで、意

趣返しを為させますよ。」

お前ならば山女郎やまじようの方が可よかろうと云おうとしたが、戯からつていと長くなる。市郎は黙うなずつて首肯うなずいて、早々に立去たちさつた。

(七)

「おや、角川のおじさん被入^{いらつ}しやい。市郎さんも……。さあ、どうぞ……。」

吉岡の母お政^{まさ}は、喜んで安行父子^{おやこ}を迎えた。吉岡も隣村では由緒ある旧家で、主人は一昨年世を去ったが、お政との間に二人の子供があつた。総領は忠一と云つて、帝国大学の文科に学んでいる。^{いもと}妹の冬子も兄と共に上京して、某女学校^{ある}に通つていたが、昨年無事に卒業して今は郷里の実家に帰つてゐる。地方には能くあ^よる習^{ならい}、角川の市郎と冬子とは所謂^{いわゆる}許嫁^{いいなづけ}の間柄で、市郎が医師を開業すると同時に、めでたく祝言^{しゅうげん}という内相談^{ないそうだん}になつ

ている。勿論、もちろん二人の間に異存は無かった。

斯ういふ関係であるから、昔から両家は殆ど親類同様に親しく交際していた。殊に主人が死んだ後は、のち吉岡の家では何かに付けて角川一家を力と頼んでいた。

安行父子が座敷へ通ると、今年二十歳の冬子も笑顔を作つて出て来た。おやこ

「東京の倅の方から一昨日手紙が参りまして、冬子の婚礼に就て来月初旬には必然歸つて来ると云うことでした。」と、お政が先ず口を切つた。せがれ
きつと

「いや、其事ですが……。」「と、安行は市郎を顧つて、みかえ「倅の云うには、それが為に忠一さんを態々呼び戻すにも及ぶまい。わざわざ

どうで歳暮^{くれ}には帰郷するのだから、其時^{その}まで延^{のば}しても差支^{さしつかえ}はあるまいと……。」「

「それも然^そうですが……。」「と、お政は娘の顔^みを視^みた。市郎は何の氣も注^つかずに、「実は私から忠一君の方へ、然^そう云^やつて与^やつたんです……。」「

「まあ。」「と、お政は更に市郎の顔^みを視^みた。

「私も今朝初めて聞いたのだが、延期しては何か御都合が悪いかな。」「

安行^{とい}の間^とに對して、母子^{おやこ}は即坐に何とも答^{こた}えなかつた。お政は霎^{しばらく}時考^{かんが}えて、

「いいえ、別に都合の悪いと云うこともありませんが……。善は

急げとか云いますから、一日も早く御婚礼を済まして、妾も安心したいと思うのですが……。是非来月で無ければ成らないと云う訳もありますから、約り貴下や市郎さんの思召次第で……。妾の方は何方でも宜しいのです。唯、妾の方では……。こんなことを申しては何ですけれども、市郎さんも未だお若いのですから、何かの間違ひのない中に些とも早く……と斯う思つて居りますので……。ほほほほほ。」

お政は冗談のように笑つて云つたが、其詞の底には何かの意味があるらしくも聞えた。冬子も恨めしそうな眼をして、市郎の顔を視ていた。斯うなると、何だか聞捨にもならぬような意もするので、安行も稍や真面目になつた。

「御承知の通り、^{せがれ}倅もまだ書生上り^{あが}で小兒^{こども}も同然だから、私も平^ふ生^{だん}から厳しく監督しています、冬子さんとの婚礼は昨日今日に^{はじま}初った話でも無し、たとい^{ひとつき}一月や^{ふたつき}二月延びたからと云つて、決して間違^{おこ}いの起るなどと云うことは……。」

「それは然^そうですとも……。」「と、お政は遮^{さえぎ}つて、「ですから、妾^{わたくし}の方でも決して心配は為^しませんが……。それでもお若い方と云うものはね。」「と、又笑つた。

市郎も何だか黙つてはいられぬ羽目になつた。

「じゃア、おばさん、私が何か不都合な事でも為^していると被^{おつ}仰^{しゃ}るんですか。」

「別に不都合ということは無いのですけれど、他^{ひと}の噂を聞くと、

市郎さんは此頃柳屋とか云う家にお馴染が出来たそうで……。
皆なが然う云つていますよ。」

「へえー。」と、市郎は眼を丸くした。柳屋と聞いて、安行の眼も少しく晃つた。

「嘘です、そりやア實際嘘ですよ。」と、市郎は口早に、「そんなことは決してありませんよ。今も親父に話したのですけれども、此の夏、忠一君が帰省した時に、唯つた一度行ったことが有るだけで、其後は柳屋の閨も跨いだ事は無いんです。」

「そうですかねえ。」と、お政はまだ笑っていた。其の疑惑は融けぬらしい。

(八)

「市郎、お前は真実ほんとうに柳屋へ出入ではいりするのか。」と、今度は安行が問うた。

「いいえ、嘘です、嘘ですよ。何かの間違いでしよう。」と、市郎は慌てて弁解した。

「でも、忠一も其時そのに云っていましたよ。市郎君は色男だ、柳屋の女が大層チャホヤしていたと……。ねえ、然そうでしょう。」

如才じよさいないお政は絶えず笑顔を見せているが、対手あいては甚だ迷惑に感じた。と云つて、ここで何時いつまで争つても究竟つまりは水掛論みずかけろんである。市郎も終末しまいには黙つて了しまつた。

安行も考えた。何方どちらの云うことが真実ほんとうか知らぬが、先刻さつぎ市郎
 の話では、忠一が女と巫山ふざけ戯たと云う。今又この話では、市郎
 が女と情交わけがあるらしいと云う。何方どっちにしても、対手あいては客商売の
 女である。要するに二人の客に対して、等分に世辞せじ愛あい嬌ぎようを振ふ
 蒔りいたと云うに過ぎまい。随したがつて其時そのだけの遊興あそびならば兎とここの
 論は無いが、若もし市郎が其後そのごも柳屋へ通っている様ようならば、少し
 く警戒を加えねばならぬ。彼かのお葉という女は、どんな素性来歴
 の者か知らぬが、豪家ごうかの息子を丸め込んで、揚句あげくの果はてに手切れと
 か足切れとか居直るのは、彼等社会に珍ためししからぬ例である。殊ことに
 此方こつちは婚礼を眼の前に控えているから、それを附目つけめに何かの面倒
 を持ち込まれては、吉岡家に対しても氣の毒、自分達も世間に対

して余計な恥を晒さらすようにもなる。何どうか其そんなことの無い様ようにしたいものだと、心こころ竊ひそかに無事を祈いのった。

が、誰たれの考かん慮がえも同じことで、ここで何時いつまで争いった所で水掛

論に過ぎない。これだけに釘を刺して置けば既もう可いいと思おもったの

であろう、お政は相変へらず嬌然にこにこ笑わらいながら、更に話を他ほかに反そらした。

「好い塩梅あんばいにお天気が続つきますね。併しかし来月になつたら、急にお

寒ふくなりましよう。来年のお正月も又雪でしようかねえ。」

旧曆に依よる此この土地では、正月は恰あたかも大雪の最中さなかである。年々の

事とは云いながら、三尺、四尺、五尺、六尺と漸次しだいに振積ふりつんで、

町や村にあるほどの人々を、暗い家の中に一切封じ込めて了しまう雪

の威力を想像すると、何と無く一種の恐怖おそれを懷いだかぬ訳には行ゆかぬ。

四人は今更のように庭を眺め、空を仰いで、日毎に襲い来る冬の寒氣を染々と感じた。

この時、表では犬の啼く声が頻に聞えた。トムは何物を視たか知らぬが、狂うが如くに吠え哮るのであった。

「何をあんなに吠えるのだろう。」と、手持無沙汰の市郎は、之を機に起上つて門へ出た。

この家は小さい陣屋のような構造で、門の前には細い流を引き繞らし、一間ばかりの細い板橋が架してある。家の周囲は竹藪に包まれて、其の藪垣の間から栗の大木が七八本聳えていた。トムは橋の中央に走り出でて、凄じい唸声を揚げていたのである。

「トム、トム……。」と、市郎は先ず声をかけながら不図視ると、
トムの五六歩前には一人の怪しい女が立っていた。

女は六十前後でもあろう。灰色の髪を芒の^{すすき}ように乱して、肩の下まで長く垂れていた。彼女が^{かれ}若かりし春の面影は、^{おそら}恐く花のようにも美しかったであろうと想像されるが、冬の老樹の^{おいき}枯れ朽ちたる今の姿は、唯^{ただものすご}凄愴いものに見られた。身には^{しまめ}縞目も判らぬような^{ぼろ}檻褸の上に、獣の^{なまかわ}生皮を^{まと}纏っていた。其の^そ風体^{ふうてい}が既に奇怪であるのに、更に人を脅かすのは其^{その}窪んだ眼の光で、凡^{およ}そ此^{この}世界にありと有らゆる物は、総て我^{わがかたき}敵である^{なり}と云わぬばかりに睨み詰めているらしい。

^{きちがい}狂人か、^{ただ}乞食か、但しは彼の^か山^{やまわろ}の^{けんぞく}眷族か、殆ど正体の

判らぬ此の老女を一目見るや、市郎も流石に悸然とした。トムが怪んで吠えるのも無理は無い。

併し彼女は別に何をするでもなく、門前の往来に飄然と立っているだけの事であるから、市郎も改まって咎める訳には行かぬ。唯暫時は黙って睨んでみると、老女は何と感じたか、黄歯を露出して嫣然笑いながら、村境の丘の方へ……。姿は煙の消ゆるが如くに失せて了った。

市郎は夢のように其の行方を見送っていると、トムの声を聞き付けて、この家の下男も内から出て来た。其話によると、彼の怪しの老女は北の山奥に棲むお杉という親子連の乞食であると言う。乞食とあれば是非もないが、何だか唯者では無いように

市郎は感じた。

「あれは山　　の女房だとも云いますよ。」と、下男は更低こごこえ声で囁ささやいた。

(九)

「トムは何を吠えていたのだ。」

市郎が旧もとの座敷へ戻つて来ると、安行は煙草を喫のみながら徐しずかに訊いた。

「いや、表に変な女が立っていましたね。後で聞けばお杉とか云う乞食だそうで……。」

「ああ、お杉ですか。」と、お政母子は眉を顰めて首肯いた。

「何です、彼女は……。頗る変な奴ですね。狂人でしようか。」

「さあ、幾らか気も変になっていくか知れないが、所謂狂人

と云うのでも無いようだ。」と、安行は考えて、「彼女も俺の家

に満更縁が無いでも無いのだ。お前も知っているだろう。」

「いえ、些とも知りませんね。一体、彼女は何です。」と、市郎

は父の顔を覗いた。

「今朝お前に話した通り、祖父さんが五十年ほど昔に、山に

攫われた小児を助けたことが有る。」

「けれども、それは男の児でしょう。」

「まあ、黙って聞くが可い。それには又種々の可怪な話が絡ん

でいるのだ。」

山　と怪しの老女、この関連いよいよ愈よいよ市郎の好奇心を湧かした。

お政も冬子も珍しそうに耳そばたを欷そてた。

茶を一杯、それから安行はこんなことを語り出した。

市郎の祖父、即ち安行の父は山　の復讐なげの為に無残の死を遂げ

た。しか併そのし其手に救われた赤児は、角川家の情なさけに因よつて無事に生長

した。もと固より何者の子とも判らぬので、仮に重じゅうぞう蔵と名を付け

て、児飼こがいの雇やといにん人のようにして養つて置いた。角川の家は代々

の郷土で、傍かたわらに材木伐出きりだしの業を営んでいたので、家の雇人等

も木挽こびきの職人と一所に山奥へ入ることが屢しばしば々ある。重蔵も十二

三歳の時から山へ入った。

何でも彼が十五六歳の秋であつた。小児こどもの癖に氣の暴あらい重蔵は、木挽の職人と何か喧嘩をした結果、同じく氣の早い職人は「どうでも勝手にしろ。」と、山小屋に重蔵一人を置おき去りにして歸つてしまつた。而も其処そこには伐倒きりたおされた杉や山毛櫨ぶなの材木が五六本残つていたので、飽あまでも強情な重蔵は、自分一人で之これを麓ふもとまで担とぎ出そうとしたが、長く大きい材木は少年の肩に余つて、到底とて嶮けしい山坂を降くだる訳には行かぬ。兎とこうする中うちに日は暮れかかる。彼も流石さすがに途方に暮れている処へ、恐く例の山　であらう。人か猿か判らぬ一個の怪しい者がふらりと出て來た。

並大抵の者ならば、驚いて慌てて逃げ出すべきであるが、重蔵は頗すこぶる大胆であつた。咄嗟とつさの間あいだに思案を定さだめて、腰に提ひげたる割わ

籠りごから食くい残のこりの握飯とりだを把出とりだして、「これを与やるから手伝てつて担かいで呉くれ。」と手真似てまねで示すと、
 木を担かぎ出した。斯かくして彼は先棒さきぼうとなり、
 幾本の重い材木を無事に麓まで担かぎ下おろしたのである。

これが一種の縁となつたとしても云うのであろう、其後そのごも　は折

々に山小屋へ姿を見せた。但ただし他人のいる時は決して近寄らず、

重蔵一人の時を窺わつて忍んで来る。其都度そのつどに重蔵は自分の握飯わかつを分わかつて、　に仕事を手伝てわせていた。が、或時あるときこれを見付けた者

が有あつて、重蔵は山　を友ともとしているといふ噂うわさち拡ひろがった。

角川家でも大おおに心配しんぱいして、其その以来彼を山小屋へ遣やらぬ事とした。

それから又二三年過ぎた。其そのあいだ間かん別べつに變つた事も無かつたが、

一旦山　と親しんだという風説が、甚^こ此^この青年に禍^{わざわい}して、彼は附近の人々から爪^{つま}弾^{はじ}きされた。若い者の寄^{より}合^{あい}にも重蔵一人は殆^{おほ}ど除^{のけもの}外^{ほか}となつて了^{しま}つた。随^{したが}つて彼の性質も愈^{いよいよ}僻^{ひが}んで来て、仕事を怠^{はて}ける、喧嘩をする、酒を飲む、甲^{それ}から乙^{それ}へと墮落して、果^はは第二の親とも云うべき角川一家の人々からも見放^{ほう}される様^{よう}になつた。

が、其^{そのあいだ}間^{かん}に於て独り重蔵に同情した女があつた。即ち彼^かのお杉である。お杉は此^この駅^{しゆく}尽^{はす}頭^づの蕎麦屋の娘で、飛騨小町と謳^{うた}われる程の美人であつたが、何^どういう訳か不思議に縁遠いので、三十に近いまで独身で過^{すご}した。

(十)

お杉が評判の美人であるにも拘らず、盛を過ぎるまで縁遠いについても、山里には有勝の種々の想像説が伝えられた。其中でも、彼女は蛇の申子で、背中に三つの鱗が有るということが、一般の人々に最も多く信ぜられていた。

お杉は重蔵に比べると、殆ど十歳ばかりの姉であつたが、何時か此二人が狎馴染んで、一旦は山の奥へ身を隠した。お杉の家でも驚いて、その森や彼処の谷合を獵り尽した末に、一里ばかりの山奥にある虎ヶ窟という岩穴に、二人の隠れ潜んでいるのを発見して、男は主人方に引渡され、女は実家へ連れて戻られ

たが、其その翌あくる夜に二人は又もや飛び出した。今度は他国へ遠く奔はしつたらしい。遂そのに其行方を探り得なかつた。

それから十年ほど経うちつ中に、お杉の家は死絶しにたえて了しまつた。二人の名も大方忘れられて了しまつた。然しかるに某日あるひのこと、樵夫きこりが山稼きぎに出かけると、彼かの虎ヶ窟の中から白い煙の細く颯あがるのを見た。

不思議に思つて近寄つて窺ううと、岩穴の奥には怪しい女が棲すんでいた。十年前ぜんに比べると、顔かお容かたちは著いちじるしく窶やつれ果てたが、紛まう方なき彼かのお杉で、加しか之も一人の赤児を抱かかいていた。驚おどいて其その仔細さいしを訊たしたが、彼女かれは何にも答えなかつた。赤児は恐らく重蔵たねの胤たねであろうと思われるが、男おとこの生しょう死しは一切不明であつた。

それから二十余年の間、彼女かれは此この窟いわやを宿として、余念もなく

赤児を育てていた。赤児も今は立派な大人になって、其名を重太郎と呼ぶそうである。で、此の母子は何に因つて衣食しているか判らぬが、折々に麓の駅に現われて物を乞うのを見れば、先ず一種の乞食であろう。勿論、これまでも警官から度々立退を命ぜられたが、今日逐われても明日は又戻つて来るという風で、殆ど手の着け様がない。駐在所でも終末には持余して、彼等が悪事を働かない限は、其ままに捨てて置くらしい。

虎ヶ窟は其昔、若き恋に酔えるお杉と重蔵との隠れ家であつた。彼女は今や白髪しらがうばの嫗となつても、思い出多き此窟このを離れ得ぬのであろう。

で、単に是だけの事ならば仔細も無いが、このお杉すぎばばあ婆に就つ

て又もや一種の怪しい風説おこが起つた。と云うのは、この母子おやこが折々に里へ出て物を乞う時、快く之これに与うれば可よし矣、若し情すげなく拒んで追ひ払うと、彼等は黙つて笑つて温順おとなしく立去たちさるが、其家そのはその夜必ず山やまに襲やまわられて、鶏とりか稗ひえかを奪あられる。或は偶然あるいかも知れぬが、其間そのあいだに何かの關係が有るらしくも思われるので、人々は自ずと此このお杉を忌み且恐かつるようになった。で、お杉は山を手先遣つかうとも伝えられた。お杉は山の女房であるとも伝えられた。固もとより確たしかな証拠がある訳でもないが、こんなような意味からして、老おいたるお杉は一種の魔女の如くにも見られていた。或時には又こんな事もあつた。お杉が門かどに立つて米を乞うた時に、或人が一合いちごうばかりの米を与えて、冗談半分に斯こう云つた。

「お前も知っている通り、飛驒の国は米が少いのだから、之これを十倍にして返して呉くれるか。」お杉は黙うなずつて首肯うなずいて去った。すると、其晩そのうちの中に一升しょうほどの白米が、其家そのの前に蒔まき散らされてあつた。

又、或家に夜も昼も泣く赤児があつて、お杉が門かどに立つた時にも、其児そのは火の付くように泣いていた。彼女かれは黙そのつて其額そのを撫でると、赤児は其その以来ちつ些ちつとも泣かなくなつた。

善か、悪か、狂きやうか、兎とにも角かくにも彼女かれは普通の人間でない、一種不思議の魔力を有もっている女の様ようにも見えた。

お杉に就つて安行の知っているのは、先まず此位このの程度であつたが、迷信の多い人々の説を聞いたら、まだ此上このにも種々しゆじゆ不可思議の実

例があるらしい。

こんな話に時の移るのを忘れている中に、庭に囀さえずる小禽ことりの声も止んで、冬の日影は余よほど薄くなった。

「もうお暇いとま為ためようか。」

安行と市郎は暇いとま乞こいして、吉岡の家を出た。

(十一)

飛驒ことばといふ詞は襷ひだを意味して、一国うちの中に山多く、さながら衣きぬに襷多きが如くに見ゆる所から、昔の人が此この国の名を斯かく呼んだのである。随したがつて飛驒と云えば直ただちに山を聯れん想そうするまでに、一国

到る処に山を見ざるは無い。この物語の中心となつてゐる町も村も、殆ど三方は劍の如き山々に囲れてゐた。

お杉が棲んでゐる虎ヶ窟というのは、角川家のある町と吉岡家の居村とを境する低い丘から、約一里の山奥にあつた。一里といへば人里から左のみ遠からぬ処であるにも拘らず、ここは殆ど通路の無いほどに岩石嶮しく峭り立つてゐるのと、昔から此辺は魔所と唱えられてゐるのとで、
獺 夫も樵夫も滅多に通

わなかつた。苔蒸す窟は無論天然のものであつたが、幾分か人工を加えて其入口を切拓いたらしくも見える。奥は真暗で其深さは判らぬ。背後は屏風のような絶壁で、右の方には大なる谷が繞つてゐた。

窟の入口には薄黒い獣の生皮なまかわを敷いて、Xエックスという字のように組まれた枯木と生木なまきとが、紅い炎焰ほのおや白い烟けむりを噴はいていた。其火そのに對むかつて子つくねん然あぐらと胡坐あぐらを搔かいているのは、二十歳はたちばかりの極めて小作りの男であつた。

何処どこやらで滝の音が聞えて、石いわ燕つばめが窟の前を掠めて飛んだ。

男は燃未了もえさしの薪たきぎを把とつて、鳥を目がけて磔はたと打つと、実に眼にもとま

止らぬ早業で、一羽の石燕は打うつに随したがつて其手下そのてもとに落ちた。男

は拾うより早くも其羽そのはねを筆むしり取つて、燃え颯あがる火に肉を炙あぶつた。

やがて落葉を踏む音して、お杉婆しばあは諷ひようぜん然ぜんと歸つて來た。男

は黙もくつて鳥を咬かじつていた。二人共に暫時しばしは何の詞ことばをも交さなかつ

たが、お杉の方しずかから徐しずかに口を切つた。

「重太郎。何か他に喫^たべる物は無いか。」

男は彼女^{かれ}の倅^{せがれ}の重太郎であつた。其^{その}風采^{ふうさい}は母と同じく異体^{いてい}に

見えたが、極めて無邪氣らしい、小児^{こども}のような可愛い顔であつた。

髪^{おどろ}を蓬^{かしろ}に被^ふつた頭^ふを掉^ふつて、

「何にも無いよ。」

一日や二日の断食は此^{この}母子^{おやこ}に珍しくもないらしい。お杉^{ただ}は唯^{ただ}

首^{うなず}肯^ないて其^{そこ}処^こに坐^につたが、俄^{にわか}に思^{ことば}い出したように少^{こと}しく詞^{ことば}を改^かめ

た。

「重太郎。お前に少し話して置きたい事があるのだ。」

「阿母^{おつか}さん、何だ。」

「妾^{わたし}は既^もう十日^{うち}の中に死^しぬかも知^しれない。死^しんだら必然^{きつかな}仇^{たき}を取^とつ

てお呉れよ。」

「可いとも……。どんな奴でも、俺ア必然仇を取つて与る。唯は置くものか。」

重太郎は腕を叩いて潔よく答えたので、お杉も快げに微笑んだ。「そこで、お前に見せて置く物が有る。今まではお前にも秘して

置いたが、此の窟の奥には大切な宝が蔵つてある。何か大事が出

来して、お前が何うしても此処に居られない様な場合になつ

たら、其れを持出して逃るが可い。相当な買人を探して売払え

ば、お前は乞食を為さないでも済むのだ。」

母は起つて奥へ入ると、重太郎も黙つて其後につづいた。窟の

奥は昼も真暗であつたが、お杉の点す一挺の蠟燭に因つてお

ぼろおぼろに明るくなった。

行くこと七八間けんにして、第一の石門せきもんが有った。これから先は

路みちが狭く、岩が低くなって、到底とても真直まっすぐに立つては歩けなかった。

母子おやこともに頭かしらを屈かがめて進むと、更に第二の石門が行手を塞ふさいでい

た。蝙蝠かわほりのような怪しい鳥が飛んで来て、蠟燭の火を危あやうく消そ

うとしたのを、重太郎は矢庭やにわに引握ひつつんで足下あしもとの岩に叩き付けた。

第三の石門には、扉のような大きな扁平ひらたい岩が立て掛けてあつ

て、其下そのしたの裂目から蝦蟇ひきがえるのように身を縮すくめて潜り込むので

ある。二人は兎とも角かくも此この石門を這い抜けて、更に暗い冷つめたい石

室ろに入った。

「さあ、覗いて御覧。」と、お杉は蠟燭を高く擎ささげた。

石室の隅には広い深い岩穴があつて、穴の遠い底には、風か水
 か知らず、ごうごうと微かすかに鳴つていた。若しも一步を誤れば、この
 暗い地獄の底に葬られねばならぬ。重太郎も足下あしもとを覗いて流石さすがに
 ぞつと
 悚然した。

(十二)

お杉は無言で蠟燭を翳かざすと、深い岩穴の中腹かとも思われる所
 に、さながら大蛇おろちの眼の如き金色こんじき爛々の光を放つものが見えた。
 「判ったか。」と、お杉が蠟燭を退のけると、穴は旧もとの闇に復かえつて、
 金色こんじきの光は夢のように消えた。重太郎は呆れて立っていた。

「阿母^{おつか}さん、あれは何だい。」

「何でも可^いい。いざと云う時に持ち出して他^{ひと}に売れば、お前は金持になれるのだ。」

穴の中では猿のような声で、キキと叫ぶ者があつた。

「騒々^{しず}しい。静^{しず}にお為^しよ。」と、お杉は鋭い声で叱り付けると、

怪しい声は忽^{たち}ち止んだ。お杉は再び無言で歩み出すと、重太郎も黙^もつて続いて出た。

二人が旧^{もと}の入口に出た頃には、山^{やま}峡^{あい}の日は早く暮れて、暗い山霧が海のように拡がつて来た。重太郎は再び枯木を焚^たくと、霧は音もせず^{ても}に手下^{もと}まで襲^{よう}つて来て、燃え颯^{あが}る火の光は宛^{さな}ら紗^がに包^{しゃ}まれたる様^{よう}に朧^{おぼろ}になった。

窟の奥から人か猿か判らぬ者が、ちよこちよこと駈け出して来た。^{あたり}四辺が薄暗いので正体は知れぬが、人ならば先^まず十五六歳の少年かとも思われる。髪を颯^{さつ}と振^{ふり}乱^{みだ}して、伸^{のび}上^{あが}りつつ長い手をお杉の肩にかけた。小児^{こども}が親に甘えるように……。

「どこへ行くんだえ。」と、お杉は顧^{みかえ}つて、「お前、里へ行くなら頼みたい事が有るんだよ。」と、彼の耳に口を寄せた。

怪しの者は首肯^{うなず}いて、忽^{たちま}ちひらりと飛び出したかと思^{うち}る中に、^{きのねい}樹根^{いわかど}岩角を飛越^{とびこ}え、跳越^{はねこ}えて、小さい姿は霧の奥に隠れて了^{しま}つた。お杉は白い息を吐^はいて呵^{から}々と笑った。

「阿母^{おつか}さん、阿母さん。」と、重太郎は思い出したように声をかけた。

「何だえ。」

「お前は十日の中に死ぬと云ったね。俺おら先刻さつきも約束した通り、
必然きつとその其仇を取る。其代りお前にも頼んで置くことが有るんだ。お
前が居なくつても、俺が困らない様ように……。」

「だから、宝の在所ありかを教えて置いたじゃアないか。あれさえ有れ
ば些ちつとも困ることは無いよ。」

「そればかりじゃ無い。」と、重太郎は少しく云い淀んで、
「あの、俺に嫁を貰くつて呉れないか。」

「嫁……。」と、お杉は寂しく笑った。

「むむ。実は俺ア嫁に貰いたい女があるんだ。阿母おつかさん、知つて
るかい。」

母は黙っていた。重太郎も流石に面目が惡いか、燃未了の薪を撥りながら、

「あの、何を……。柳屋にいるお葉という女……。好い女だね。俺ア大好きだよ。」

人か獸か判らぬような生活をしている此の青年にも恋は有つた。彼は何日か柳屋のお葉を見染めたものと思われる。お杉は憫れむように我子の顔を見た。

一口に酌婦とは云うものの、お葉は柳屋の一枚看板で、東京生れの氣前は好し、容貌も好し、山の中には珍しい粹な姐さんとして、ここらの相場を狂わしている流行児である。恋に間隔は無いとは云え、此方は宿無の乞食も同様で、山の兄弟分

とも云うべき身の上では、余りに間隔へだてが有り過ぎて、到底とてもお話にも相談にもなる訳のもので無い。

けれども、それは普通の人の考える単純の理屈である。小児こどもの

時から人も通わぬ此この窟を天地として、人間らしい（？）のは阿お

ふくろ

母一人で、昔物語に聞く山姥やまうばと金太郎とを其そのまに、山

や猿や鹿や蝙蝠かわほりを友としつつ、此ここに二十余年を送り来きたつた重太

郎自身に取つては、人間の身分や階級などは、何の値あたも無いもの

であつた。彼は唯ただ自己おのれの情じょうの動くがままに働くのである。彼がお

葉を嫁に貰もらいたいと云い出したのも、決して不思議でも無理でも

ない。

「お前あがそんなに彼の女ほしが欲ほければ、妾わたしがお嫁に貰もらつて上げるよ

」。

お杉は極めて無難作に受合つた。

(十三)

角川安行の父子が吉岡家を辞して、帰途に就いたのは午後四時
すぐを過る頃であつた。ここらの冬の日は驚くばかりに早く暮れて、
むらさかい村境を出る頃には足下が漸く暗くなつた。

「吉岡のおばさんは、何だか私が柳屋の女に關係でもあるように
 思っているらしいので、実に困りましたよ。」と、市郎は歩きな
 がら語り出した。

「それだから氣を注^つけなければ不可^{いけな}い。世間では針ほどの事を棒のように吹聴するのだから……。併^{しか}し眞^{ほん}実^{とう}にお前は彼^あのお葉とか云う女に關係はあるまいな。」

「大丈夫です。決して無いです。」

風は無いが、夜の氣は漸^{だんだん}々に寒くなつて來た。あなたの丘で

狐の啼く声が聞えた。

「明後日^{あさって}は市の立つ日だな。」と、安行は独^{ひとりごと}語^{ごと}のように、

「何^どうか天氣に為^したいものだ。」

「そうです。月に一度の市ですから……。」

この時まで主人の後^{あと}に温^{おとなし}和^なく尾^ついて來た彼^かのトムは、猝^{にわか}に何を認めたか知らず、一^{いっせい}声^{せい}高く唸^うつて飛^ひ鳥^{ちよう}の如くに駈^かけ出した。

「トム、トム……。」「と、市郎は呼び返したが聞えぬらしい、犬は直^{まつしぐら}驀^{まっ}地^ぢにあなたの森へ向つた。市郎も心許なさに其^{その}後^{あと}を追つて行くと、唯^とある樅^{もみ}の大樹の蔭でトムが凄^{しみ}じく吠^わえていた。加之^{しか}も堆^{うずた}かき枯葉を蹴^けつて、何者かと挑^もみ闘^むうように聞えた。

何か知らぬが、猶^{なほ}予^よはならぬ。市郎は洋^{すてつき}杖^{とり}を把^な直^{なお}して、物音^{かた}のする方^{かた}へ飛^とび込^こんで見ると、もう遅^{おそ}かつた。僅^{わず}に一^{ひと}足^{あし}違^{ちが}いで、トムは既に樹^{きの}根^ねに倒^たれていた。敵^{てき}は髪^{かみ}を長く垂^たれた十五六の少年で、手^てには晃^{きら}めく洋^{やう}刃^ふのようなものを振^{ふり}翳^{かざ}していた。薄^{うす}闇^{やみ}で其^{その}形^{かたち}は能^よくも見えぬが、人^{ひと}に似^にて人^{ひと}らしく無い。

「若^{もし}や山^{やま} ^{やまわろ}か。」と、市郎は咄^{とつ}嗟^さに思^{おも}ひ付^ついた。で、先^まず其^{その}正^{ただ}体^{てい}を見定^みめる為^{ため}に、袂^{たもと}から燐^ま寸^ちを把^{とり}出^だして、慌^{あわ}てて二三本擦^すつた。

この時、敵は血に染^そみたる洋刃を揮^{ふる}つて、更に市郎を目がけて飛^かび菟^かつて来たが、其^その眼^め前^{さき}に恰^あだ^かも燐寸の火が澆^ばつと燃ゆるや、彼は電氣に打たれたように、猝^にに刃物をからりと落して、両手で顔を^おお^お掩^おつたまま、霎^{しば}時^{らく}そこに立^{たち}縮^ちんで了^{しま}つた。

この刹那に、市郎の眼に映つた敵の姿は、頗^{すこ}る異^い形^{ぎよう}のものであつた。勿^{もちろん}論、顔は判らぬが、膚^{はだ}は赭^{あか}土^{つち}色^{いろ}で手足は稍^{やや}長^{なが}く、爪も長^{とが}く尖^{とが}つていた。身^{みの}丈^{たけ}は低^ひいが、小兒^{こども}かと思^{おも}へば人のようでもある。この寒空に全身殆^たど裸^わで、僅^{わず}に腰^{こし}の辺^{あたり}に獣の皮を纏^{まと}うているのみであつた。が、斯^こう見えたのも一瞬時^まで、燐寸^まの火は忽^{たち}ち消^めえた。火が消えると同時に、彼は再び強くなつた。地に落ちたる洋刃^なを手^て早^{はや}く

拾い取つて、更に市郎に對つて突いて來た。彼は闇中でも多少は物が見えるらしい。

市郎は透さず第二の燐寸を擦ると、彼は再び眼を掩つた。彼は野獸に均しく、非常に火を恐るるらしい。市郎は勝つに乗つて、続けさまに燐寸を擦ると、敵は既う此方を向く勇氣が失せたらしく、頭を回らして一散に逃げ出した。市郎は何処までもと其後を追つたが、敵は非常に逃足が疾い。森を出抜ける頃には、既に十五六間も懸隔たつて了つた。

「畜生……到底駄目だ。」と、市郎は呟きながら引返して來ると、安行も丁度駈付けた。トムは咽喉を深く抉られて、既に息が絶えていた。

「可哀想な事を為しましたな。今の奴は何うも山　　らしかったですよ。」

「そうか。」と、安行は低声で云った。

兎に角、愛犬を路傍に捨てては置かれぬので、市郎は血に染みたるトムの死骸を抱えて起った。

「市郎、衣類が汚れるぞ。」

「けれども、ここへ残して置くのは何だか不安心ですから……。」
自分達が去った後へ、再び山　　が現われて、トムの屍骸を盗み去らぬとも限らぬ。愛犬の骨を敵に渡すのは、何だか口惜い様にも思われるので、市郎は到頭トムを抱えて帰った。

(十四)

其翌そのあくるる日も申分のない天気であつた。霜は日増ひましに深くなつて来るが、朝の日影は麗うららかであつた。

鉾山のお客だとか云う三人連づれが、昨夜ゆうべから柳屋の奥に飲あかみ明あしていて、今朝けさも早天そうてんから近所構ぐわずに騒いでいたが、もう大抵騒くたびぎ草臥くたびれたと見えて、午頃ひるごろには生醉なまよも漸だんだん々だに倒しまれて了しまつた。酌婦の笑い声も聞えなくなつた。内も外も蕭寂ひっそりとなつた。

心さびしや飛驒ゆ行く路みちは

川の鳴瀬なるせと鹿の声

低声^{こごこえ}でこんな唄^{うた}を謳^{うた}いながら、お葉は微醉^{ほろよい}機嫌^{きげん}で門^{かど}に出た。

お葉は東京深川生れの、色の稍^{やや}蒼白^{そうはく}い、細^{ほそ}面^{おもて}の、眉の長い女であつた。彼女^{かれ}は自ら謳^{うた}うが如く「心さびしい」のであろう、少しく眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めつつ晴れたる空を仰いでいた。

「お葉さん、お葉さん。」

奥から続いて出て来たのは、お清^{せい}という酌婦^{しやくふ}、色白^{せいはく}の丸顔^{まるがん}で、

お葉よりも二三^{ふたつみつ}歳^{さい}若く見えた。これも幾らか酔^よっているらしい、

苦しうに顔^{しか}を皺^{しわ}めて、

「お前さん、何を見ているの。」

「何、昨夜^{ゆうべ}から飲^のみ続^{つづ}けて、余^あり頭^{あたま}が重^{おも}いから、表^{ちやう}へ些^{ちつ}と出て見

たのき。」と、お葉はものう懶げに答えた。

「ほんとうに鉾山の人は忌ね。お酒を飲むと、無闇にわるふざけ悪巫山戯をして……。それでも鉾山が出来たお底で、ここらもだんだん漸々に賑かになったんだと云うから、仕方がないけれど……。」

「芋掘も忌だが、鉾掘も忌だねえ。どうせ樂はで能きないのさ。こんな商売になつちやア仕様がないよ。好すきなお酒でも飲んで紛まぎらしているのさ。」

「お前さん此頃このごろは何だか鬱ふさいでばかり居るね。平生ふだんから陽気な人でも、矢張り苦勞やつぱがあると見えるんだね。」

「呼んでお呉れよ。」と、お葉は突然いきなりにお清の腕を掴んだ。

「誰を……。」と、対手あいては笑った。

「察してお呉れな。角川の若旦那を……。お前も知ってるじゃアないか。」

「何故、あれ限り来ないんだろう。」

「究竟^{つまりあつち}妾^{あつち}達が意^きに適^いらないからさ。けれども、妾^{あつち}ア必然^{きつと}呼ん

で見せる。昨日も丁度^{ちやうど}ここで逢つたから、腕を掴んで引摺上^{ひきずり}

げて与^やろうと思つたんだけど、生憎^{あいにく}阿父^{おとつ}さんが一^{いっしよ}所^{しよ}だった

から、まあ堪忍して置いて与^やつたのさ。嫌うなら嫌うが可^いい、妾^{きつと}

ア必然^{きつと}崇^やつて与^やるから……。」「

「だつて、そりやア無理だ。」と、お清は益々笑い出した。

「無理なもんかね。昔から云う安珍^{あんちん}清姫^{きよひめ}さ。嫌えば嫌うほど

執念深く崇^やつて与^やるのが当^{あたりまえ}然^{むこう}だアね。先方^{むこう}が何とも思わなく

つても、此方こつちが惚れていりやア仕方がないじゃアないか。お前さんは馬鹿だよ、素人だよ。」

お清は対手あいてにならずに、相変らず笑っていた。お葉は口惜くやしそうに、

「今に見ておいて。必然きつとあの人を呼んで、お前さん達に見せ付けて与やるから……。嫌われたからと云つて、すごすご指くわを啣ひえて引込つこむようなお葉さんじゃアないんだから……。確しつかり乎頼むよ。」

お清の腕を掴んで又小突こづいた。

「痛いよ。だツて、お前さん。角川の若旦那には判然ちやんとお嫁さんが決きまつてると云うじゃアないか。」

「決きまつていても可いいよ。そんな悪魔は妾あたしが追ツ攘ばらつて了しまうから：

…。」

「お前さんの方が余ッ程惡魔だ。の御親類かも知れないよ。」
と、お清は笑いながら不図思い出したように、「と云えば、角
川の若旦那は昨夜に逢ったってね。」

「若旦那に……。まあ而して何うしたの。」と、お葉は俄
に真面目になった。

「でも、若旦那の方が強かったので、は逃げたとき。」

「ほんとうかい。担ぐと肯かないよ。」

「何でも犬は殺されたとき。」

「あ、あの犬が……。可哀想にねえ。お前、ほんとうかい。」

「この人は疑り深いね。ここらじやア今朝から大評判だわ。それ

を知らない様^{よう}じゃア、お前さんは馬鹿だよ、素人だよ。」

「他真^{ひとまね}似をお為^しでないよ。馬鹿……。」

「馬鹿……。」

お清は笑いながら奥へ入つて了^{しま}つた。人通りの尠^{すくな}い往来には、小禽^{ことり}が餌^えを獵^{あさ}っていた。

(十五)

お葉は其^そのままふらふらと歩き出した。わろの噂が何となく意^きに
関^{かか}つたのであろう、彼女^{かれ}は他^{よそ}ながら恋人の様子を探ろうとして、
行くとも無しに角川家の門前まで来て了^{しま}つた。門^{もん}の前には彼^かの七

兵衛老爺じじいが、銀杏いちようの黄なる落葉を掃はいていた。横手の材木置場には、焚火の煙が白く渦巻いて、鋸のこぎりの音に雑まじる職人の笑い声も聞えた。

お葉は酔っていた。七兵衛の傍そばへ進み寄って、馴なれなれ々しく声をかけた。

「あの、若旦那ゆうべは昨夜 にお逢いなすったツて、真ほん実とうですか。」

「はあ、酷ひどい目に逢いましたよ。」

「怪け我がでも為なすって……。」

「何、若旦那どは何しうも為ねえが、大事の洋犬かめを殺やられたので、力を落うなずしていなさる様ようだよ。」

お葉は首肯うなずいて奥を覗いた。七兵衛は無頓着に落葉を掃はいてい

た。

この時^{あた}恰も市郎の姿が見えた。市郎は庭の空地にトムの亡骸^{なきがら}を葬^{おわ}り了つて、鍬^{くわ}を片手に奥の方へ行くらしい。お葉^{その}は其姿を見ると共に、有^{あり}合^あう小石を拾つて投げ付けると、礫^{つぶて}は飛んで市郎の袂^{たもと}に触れた。振返^{ふりかえ}ると門前にはお葉が立つている、加^{しか}之^{えみ}も笑を含^こんで小^こ手^て招^{まね}ぎをしている。市郎も其^その図^ず迂^う図^ず迂^うしいのに少^あしく惘^{あき}れた。

前にも云う如く、市郎が冬子の兄忠一と連^{つれ}立^だつて、彼の柳屋に遊^{あそ}んだのは、今から三四ヶ月前のことで、それも唯^{ただ}一度、別に深い馴^{なじ}染^みというでもないのに、其^{その}後^ごはお葉^とが兎^とかく附^{つき}纏^{まと}つて、往^い来^うで逢^あえば馴^な々^なしく詞^{ことば}をかける。あ^よわ好^よくば自^う分の家^{うち}へ誘^い込

もうとする。随したがつて根も葉もない噂も立ち、吉岡の母にも有らぬ疑うたがい惑ごうを受ける様ようになつた。実に馬鹿馬鹿しい。身の潔白を立てる為ためには、今後何処どこで行逢ゆきあおうとも決して彼女かれとは口を利くまいと、窃ひそかに決心きんしている矢先へ、恰あたかも彼かのお葉が現あらわれた。加し之かも先方むこうから真白まっびるま昼押掛おしかけて来て、平氣でお出いでお出いでを極きめるとは、凶迂ずうずう凶迂ずうずうしい奴、忌々いまいましい奴と、市郎あきは惘あきれを通り越して、稍ややむっ勃然とした。

見ればお葉は嫣然にこにこして、相變らず小手招てぎをしている。市郎は黙しばらくつて霎時しぱく睨にらんでいた。

「何故なぜそんな怖い顔をして被いらっしや在あるの。妾あたし、
妾ばちの罰ばちで、貴下あなたは 酷い目に逢つたと云うじゃありませんか
に

。」

お葉は首を掉ふるようにして、はははははと高く笑った。彼女かれは酒の強い方であつたが、昨夜以来飲み明かした地酒の酔よいは漸次しだいに発したと見えて、今は微酔ほろよいどころでない。

「老爺じいや。其女そのを追つ攘ばらつて了しまえ。」と、市郎は声を暴あらくして云つた。

「お前めえは酔よっている様ようだ。早く歸らツせえよ。」と、七兵衛ほつきは箒はきを輟やめて顧みかえつた。

「大きにお世話よ。後生だから若旦那をここまで呼んで来て頂戴。」

「そんなこと云わねえで、歸らツせえと云うのに……。」

「どうしても呼んで呉れないの。」

「不可ねえと云つたら……。」

この押問答の中に、市郎は奥へつかつかと入つて了つた。

「若旦那……市郎さん……。」

お葉も続いて内へ入ろうとするので、七兵衛は驚いた。

「どこへ行くのだ。」

「若旦那に逢わして下さいよ。」

「馬鹿云うものでねえ。」

「いっこくおやじ 酷老爺の七兵衛は、箒で手暴く突き退けると、酔っている

お葉は一堪りもなく転んだ。だらしなく結んだ帯は解けかかつ

て、掃き寄せた落葉の上に黒く長く引いた。

「随分酷いのね。」と、お葉は落葉を掴んで起上ったが、やがて
 畜生ちきしようと叫んで、其葉そのを七兵衛の横面よこつらに叩き付けた。眼潰めつぶし
 を食つて老爺じじいも慌てた。

「阿魔あま、何をするだ。」

腹立紛れに箒はらたちまぎを取直とりなおして、お葉の弱腰はたを礎なと薙ぐと、女は
 堪らず又倒れた。

「あら、老爺じいやさん。どうしたの。」

優しい声に驚いて顧みかえった七兵衛、俄にわかに色やわらを和けて、

「や、吉岡の嬢様……。被入いらつせえまし。」

(十六)

市郎が途中でわろおそわに襲れたという噂は、早くも隣村まで伝えられたので、吉岡の家でも甚だ心配して、冬子が取敢とりあえず見舞に来たのであった。来て見ると此この始末で、仔細わけは知らぬが七兵衛老爺じじいの箒もとの下に、一人の女が殴り倒されているので、制めずには居いられぬ。

「老爺じいやさん、まあ其そんな乱暴なことを為しないで……。一体、どうしたの。」

「何、この淫売婦じごくおんなが家の若旦那うちを呼び出しに来たから、追っ攘ばらつて了しまう所で……。」

「若旦那を呼び出しに……。若もしや柳屋の……。」「と、冬子は眼を

輝かしてお葉を凝じつと視みた。お葉は落葉の上に倒れていた。

「そうでがすよ。」と、七兵衛は首肯うなずいて、「お前様めえさまよく知つていなさるね。這奴こいつ、若旦那を釣出つりだそうと思つたつて、然そうは行かねえ。」

七兵衛は憎さげに顧みかえつた。冬子も嫉ねたげに顧つた。この四つの眼に睨よこたまれたお葉は、相変らず落葉を枕にして、死んだ者のように横よこたわつていた。

「酔つてゐる様ようね。」と、冬子は少しく眉を顰ひそめた。

「這奴等こいつらア毎日毎晩、酒ばかり食くらつてゐるのが商しょう売べえだからね。お前様めえさまも用心しなせえ。こんな阿魔あまが蛇のように若旦那を狙つてゐるんだから……。」

「何しろ、何うか為なくつちやア不可まい。兎も角も起して与つて……。」

「さあ、さあ、寝た振なんぞ為ねえで、起きろ、起きろ、横着な阿魔だ。」

口小言を云いながら、七兵衛は進んでお葉を抱え起そうとすると、彼女は其手を跳ね退けて衝と起つた。例えば疾風落葉を巻くが如き勢いで、さつと飛んで来て冬子に獅噛付いた。あれと云う間に、孱弱い冬子は落葉の上に捻倒されると、お葉は乗し掛つて其の庇髪を掴んだ。七兵衛は胆を潰して、直に背後から抱き縮めたが、お葉は一旦掴んだ髪を放さなかつた。

「阿魔、放せ。嬢様を何うするだよ。」

七兵衛は息を切つて制したが、お葉は唯冷笑うのみで何とも答へなかつた。余りの意外に驚いたのであろう、冬子は声をも立てなかつた。

「これ、馬鹿為るでねえ。放さねえか。」と、七兵衛は無理に其手を引放ひきはなそうとしたが、お葉の握つた拳は些ちつとも弛ゆるまなかつた。彼女は冬子の前髪を掴んだままで、凝じつと対手あいての顔を睨にらんでいた。寂しいと云つても往来である。この騒さわぎを見て忽たちまち五六人駈かけけ付けた。材木置場から職人しやくじんが駈かけ出して来た。大勢寄つて兎とも角かくも二人を引き起おこしたが、何どうもならぬのはお葉の手であつた。彼か女の石の如き拳は、如何いつまでも冬子の黒髪を握り詰めて放さなかつた。

大勢は声を揃えて「放せ」と叫んだが、お葉の口は決して答えなかった。大勢が力を協あわせて、無理に引放ひきはなそうとしたが、お葉の拳は決して開かなかった。彼女かれは黙って冬子の髪を掴んでいるのである。

打ぶつても叩いても仕方がない。此このうえ上は、お葉の白い手を切るか、冬子の黒い髪を切るか、二つに一つを択えらぶの他ほかは無かった。

「強情な阿魔だなあ。」

何れいずも惘あきれて顔を見合せている処へ、この騒さわぎを聞いて市郎も奥から出て来た。人々から委細の話を聴いて、彼も驚かずには居られなかった。お葉の傍そばへ進み寄って、

「お前、何故そんなことをするんだ。」

お葉は初めて口を開いた。

「此女これはあなたのお嫁さんでしょう。」

市郎は返事に困った。

「妾あたし、死んでも放しませんよ。」

實際、死んでも放すまいと思われた。掴まれた冬子とは見れば、不意の驚愕おどろきと恐怖おそれとに失神したのであろう、真蒼まつさおな顔に眼を瞑とじて、殆ど息も為しない。酔よも漸次しだいに醒めたと見えて、お葉の顔も蒼くなつて来た。

見物人は追々に殖ふえて来た。柳屋のお清も駈けて来たが、唯ただわやわや云うばかりで手の着つけよう様がない。其その雑踏ひとごみを掻き分けて、ぬつと顔を出したのは彼かのお杉婆ばあであつた。彼女かれは例の如く黄きいろ

齒を露出^{むきだ}して笑っていた。

(十七)

前にも云う如く、お葉が角川家の前に来たのは、別に深い意味があるのでは無かった。の一件^き意にかかると、二つには何と無しに此地^{こつち}の方へ足が向いたと云うに過ぎないのである。けれども、彼女^{かれ}は酔^よっていた。酔^よに乗じて種々^{いろいろ}の捫^{もん}着^{ちやく}を惹起^{ひきおこ}している中に、折悪^{おりあし}くも其処^{そこ}へ冬子が来合わせたので、更にこんな面倒な事件を演出^{しゅつだ}す事となつて了^{しま}つた。

恋^{かたき}の仇と睨^{にら}まれた冬子の災難は云うまでもないが、市郎もこれ

には頗る弱った。この場合に理屈を云つても仕方がない、嚇して
 も仕方がない、こんな狂氣染みた女は宥めて還すより他はある
 まいと思つた。

「お葉さん。何しろ、この通り人立がしては、お前も外聞が悪
 かりうし、私の家でも迷惑するから、まあ堪忍して呉れ。此方に
 不都合があるなら、何んなにも謝るから……。」

お葉は冷笑つて答えなかつた。

「ね、後生だから堪忍して与つて呉れ。必然お前の意の済むよう
 にするから……。」

迂濶口を滑らせると、黙つていたお葉は屹と顧つた。

「妾の意の済むようにするんですね。」

否^{いや}とも云われぬ、市郎は首肯^{うなず}いた。

「じやア、二度と此^この女をここの家へ入れないようにして下さい。若^もし此^この女がここの門^{かど}を潜^{くぐ}つた所を見ると、妾^{めかけ}は何日^{いつ}でも押掛^{おしか}けて来て、頭の毛を一本一本引ツこ抜いて与^やるから、然^そう思つてお在^いなさい。」

無理は最初^{はじめ}から知れているが、一時^{いつとき}逃れに市郎は承知した。

「可^{よし}、可^{よし}。それだから最^もう堪忍して与^やつて呉^くれ。頼むから……。」

「必然^{きつと}ですね。」

「むむ、必然^{きつと}だ。間違^{まちがい}はない。」

市郎は心にもない誓^{ちかい}を立てた。これで漸^{ようや}く意^きが済んだのである。う、お葉は勝利の笑^{えみ}を洩^{もら}して、掴んだ手を初めて弛^{ゆる}めようとする。

時、お杉婆おばあが衝と寄つて来て、例の凄愴ものすごい顔をぬツと突き出した。

「いや、不可いけない、不可いけない。それは嘘だ。」

「え。嘘だ……。」

市郎も驚いて顧みかえると、怪しの婆おばあは傍若無人に呵から々と笑つた。

「此娘このを二度とこの家うちへ入れないと云うのは嘘だ。お前の顔に判然ちやんと書いてある。ははははは。」

「喧やかましい、引込ひっこんでいろ。」と、市郎は疳かん癩しゃくを起おこして呶鳴どなり付けた。

「ははははは。怒つても駄目だ。お前の嘘は妾わたしが知っている。お前も此この娘も相おたがい互に惚れ合っている。どうして二度と逢わずに

居られるものか。ははははは。―

忌々しいとは思うけれど、婆ばばあの云うことは確たしかに真実である。

市郎も少しく怯ひるんだが、ここで弱味を見せては落着おさまりが付かない。

「ええ、貴様の知ったことじゃアない。余計な口を出すな。彼方あつちへ行け。―

「はは、妾はお前に云っているのじゃアない。このお葉さんに教えて与やっているのだ。お前さん、意きをお注つけよ。幾ら何どうしたつて、この男と娘とは離れるんじやアないからね。―

お葉の火の手が折角鎮しずまりかかった処へ、又もや斯こんな狂氣きちがい婆ばばあが飛込とびこんで来て、横合よこあいから余計な藁わらを炙くべる。重ね重ねの面倒こじれに小悶こもんの来た市郎は、再び大きい声で呶鳴どなり付けた。

「喧^{やかま}しい、煩^{うる}さい。もう彼方^{あつち}へ行け。」

「ははははは。」

お杉は嘲^{あざけ}るように高く笑った。如何^{いか}にも他^{ひと}を馬鹿にした態度である。もう斯^こうなつては我慢も堪忍^でも能^{でき}ぬ。市郎の疳^{かん}癩^{しやく}は一時に爆発した。

「彼方^{あつち}へ行けと云うのに……判^わらないか。おい、這奴^{こいつ}を彼方^{あつち}へ引^ひ摺^きつて行け。」

左右^{みかえ}を顧^みつて又呶^{どな}鳴^なったが、直^{すぐ}には声に応^{こた}ずる者もなかつた。

これが余人^よならば知らず、一種の魔力^{りき}を有^もつてゐるかの様^{よう}に思^{おも}われてゐるお杉婆^{ばばあむか}に對^{むか}つて、迂濶^{うかつ}に手^てを下^{くだ}すのは何^{なん}だか不氣味^{ぶきび}でもあるので、何^いれも眼^{いず}と眼^めを見合^あわして、真先^{まへ}に進^{すす}んで出^でる勇者^{ゆう}を

待っていた。

この臆病者等が怯んで動揺めく醜態をじろじろ見廻して、

「ははははは。」

お杉は又もや凱歌の笑声を揚げた。

(十八)

この時、群集を押分けて、捫着の中へ割って入ったのは、
駐在所の塚田巡査。年の壮い、色の黒い、口鬚の薄い、小作りの男であつた。

彼は職掌柄、平生からお杉婆に就ては注意の眼を配っている処

へ、恰もこの騒動を見付けたのであるから、容赦は無い。

「こら、お前はここへ来て何をして居る。ここの家の迷惑になるから、早く立去れ。」

お杉は依然笑って答えず、腰にぶら下げた皮袋から山毛櫨の実を把出して、生のままで悠々と咬り初めた。

「実に困るんです。どうか追攘って頂きたいもので……。」と、市郎も口を出した。

「よろしい。」と、巡査は首肯いて、「さあ、早く行け。他の迷惑になるのが判らんか。斯ういう所に何時までもぐずぐずしていると、道路妨害で引致するぞ。」

対手は相変らず平気で笑っているので、巡査も少し悶れ出した。

「こら、行けと云うのに……。何故ぐずぐずして居るのか。判らん奴だ。」

お杉の瘦腕やせうでを掴んで一つ小突いたが、彼女かれは些ちつとも動かなかつた。見掛みかけは枯木のようにでも容易に倒れない、さながら大地に根が生えたように突ツ立っていた。巡査はいよいよ悶しれて、力一ぱいに強く曳ひくと、彼女かれも流石さすがに二足ふたあしばかり踉蹌よろめいた。

「さあ、行け、行け。」

突遣つきやつても又ふらふらと戻つて来る。市郎も見兼ねて突き戻した。巡査も亦また突き戻した。血氣の男二人に、突き戻され、押遣おしやられて、強情なお杉も漸次しだいに後あとへ退すきつたが、やがて口一杯に啣ふくんだ山毛櫨ぶなの実を咬みながら、市郎の顔に向つてふツと嘖き付けた。

市郎はあつと顔を押えながら、腹立紛れの殆ど無意識に、お杉の胸の辺あたりを強く突くと、彼女かれは屏風倒しに撲地はたと倒れた。袋の山毛櫨は四方に散乱した。

この騒ぎを聞き付けて、安行も奥から出て来た。

「こりやア一体どうしたのだ。」

人々はわやわや云いながらお杉の周圍まわりに群れ集ると、婆ばあは齒くいしば食縛くわくつて正体もない。巡査は小膝を突いて抱え上げた。

「偽死そらじにでもないらしい。急所でも打ったかな。」

市郎も立寄たちよつて検あらためた。彼は医師である。左右の人々に吩咐いいつけて、兎とも角かくもお杉を我家へ昇かき入れさせた。

けれども、お葉の方はまだ埒らちが明かぬ。彼女かれは依然として生いけに

贅^えの冬子を掴んでいたのであった。市郎は気が気でない。忙しい中にも駈^かけ寄つて、

「この通りの始末だから、委^{くわ}しいことは後で話す。兎^とも角^{かく}も今日の処^どはどうか堪忍^くして呉^くれ。」

拝^ひむようにして只^{ひたすら}管^さ頼^つむと、お葉は誇^うりがに首肯^{うなず}いた。

「可^よござんす。じゃア、先刻^{さつき}の約束は忘れませんね。」

「忘れない、必然^{きつと}忘れない。」

お葉は初めて手を弛^{ゆる}めた。荒鷲^{ぬくどり}の爪から逃^ぬれ出た温^{ぬく}め鳥^{どり}のように、冬子は初めてほつと息を吐^ついたが、髪^{ふりみだ}を振^ふ乱^{みだ}した彼女^{かれ}の顔には殆^{ちのいろ}ど血色^{ちのいろ}を見なかつた。

それも関^き心^{がかり}ではあるが、猶^{なほ}一方^{ひとへ}には氣を失^うつてい^るお杉^がが有

る。市郎は倉皇^{あたふた}として内へ駈^{かけこ}込んだ。塚田巡査も続いて入った。お杉は南^{みなみむき}向^{よこた}の縁側に横えられた。市郎の人工呼吸^{そのた}其他の応急手当が効を奏して、彼女^{かれ}は間もなく息を吹き返した。

「どうだ、既^もう気が注いたか。」と、巡査が問うた。

「何、死ぬものか。」

独^{ひとりごと}語^ごのように云つて、お杉は轟然^{すつく}と起^たち上^{あが}つたかと思^{うち}る中

に、左右の人々を一々睨^ねめ廻しながら、彼女^{かれ}はふらふらと歩き出した。加之^{しか}も今の騒動^{さわぎ}は忘れたように、諷^{ひようぜん}然^{ぜん}と表へ出て行つた。居合^{そのあと}わす四五人は其後^つを尾けて行くと、お杉は顧^{みかえ}りもせず、町の真中を悠々と歩いていた。

町の尽頭^{はずれ}まで来た時に、お杉は初めて立止^{たちどま}った。尾行して来

た人々も既^もう散^{しま}つて了^{しま}つた。お杉は柳屋の門^{かど}に寄^よつて、皴^{しわ}枯^がれた声^{こゑ}で、

「お葉さん、居^いるかい。」

(十九)

思^{おも}うがままに恋^{かたき}の仇^{かたき}の冬子^{ふゆこ}を呵^{さい}責^{いな}んだお葉は、お清に扶^{たす}けられて柳屋へ歸^{かへ}つた。

「お前さん、随^{ずい}分^{ぶん}酷^{こつ}いことを為^したねえ。」

「ああ、これ^{せいせい}で清^{せい}々^{せい}した。」と、お葉は酔^よ醒^{いざめ}の水^{みづ}を飲^のんだ。お清は惘^{あき}れて其^{その}顔^{かほ}を眺^{なが}めている処^{ところ}へ、彼^かのお杉^{すぎ}婆^{ばあ}の声^{こゑ}が聞^{きこ}えたの

である。

「お葉さん……お葉さん。」

わが名を呼ばれて、お葉はふらふらと起^たつた。お清は慌てて其^そのたもと袂^ひを曳いた。

「お止^よしよ、お前さん、もう外へ出るのは……。あんな奴にお構いでないよ。」

「お葉さん。」と、外では又呼んだ。

「あいよ。」

お葉はお清を突き退^のけて、門^{かど}へ出た。門にはお杉が笑いながら立っていた。

「お前さん、少し話があるから一^{いっしょ}所^{しょ}に来てお呉^くれでないか。」

「あい、行きますよ。」

お葉は弛ゆるんだ帯を結び直して、店みせぐち口ありあに有合う下駄を突ツ掛
ると、お清はいよいよ危あやぶんで又抑留ひきとめた。

「お前さん、どこへ行くんだよ。」

「可いいよ、うるさい人だねえ。」

「早くお出いでよ。」と、外では又呼んだ。

「あい、あい。」

お杉は瘦せた手をあげて差さしまね招くと、お葉は宛さながら死神むかいの迎を受
けた人のように、唯ただふらふらと門かどぐち口へ迷い出た。お清もつづい
て追つて出ると、婆ばあしは徐あしに顧みかえつて、

「お前に用は無いよ。」

鋭い眼でじろりと睨まれて、気の弱いお清は思わず立縮たちすくんだ。
 其間そのまにお杉は出て行く。お葉も後から躡ついて行つた。正午に近い
 冬の日はは明るく晴れて、蒼い空には黒い鳥の一群ひとむれが飛んで渡つ
 た。

お葉は酒の酔よが未だ醒めぬのかも知れぬ、或あるは何かの夢か幻を
 視みているのかも知れぬ。兎とにかくお杉婆ぼばあの魔力に引かれたように、
 殆ど無意識でふらふらと歩いてゐた。彼女かれは一種の催眠術に罹かかつ
 た人ようの様であつた。

町つくを行き尽して村境むらぎかいに出た。昨夜トムととが闘もつ櫓みの
 林を過ぎると、路みちは爪先上りに峻けわしくなつて来た。落葉松や山毛
 櫸なや扁柏ひのきの大樹が日を遮さえぎつて、山路やまみちは漸次しだいに薄暗くなつて来た。

どこ
何処やらで猿の声が聞えた。

天正十三年、所謂「飛驒の三方崩れ」という怖るべき大地

震が、ここら一帯の地形を一変して、麓近い路にまで剣なす岩石

が突出した。其中には怒れる人の顔のような真蒼な岩もあ

った。百千人の生血を灑ぎ掛けたような真赤な岩もあった。岩と

岩との間は飛んで渡るより他はない、二人は蛇のような山蔦の

太い蔓に縋つて、宛ら架空線を修繕する工夫のように、宙にぶ

ら下りながら通り越した。

お杉は通い馴れた路であるから不思議はないが、お葉が何うし

て此の難所を跳越え、渡り越えたかは疑問である。恐く夢のよ

うで自分にも判るまい。

虎ヶ窟の入口には彼の重太郎が佇立^{たたず}んでいた。其の傍^{かたえ}には猿のような、小児^{こども}のような、一種の怪しい者が蹲踞^{しゃが}んでいた。

「帰つて来たよ。」

お杉が声をかけると、重太郎は無言^{みかえ}で顧^みつた。母の後^{うしろ}には、帶^{すそ}も裳^{はぎ}もしどけなく、脛^{あし}も露出^{あらわ}に立つたるお葉の艶^{えん}なる姿が見えたので、重太郎は山猿のような笑い声を出して、猶^{なほ}予なく其前^{その}にひらりと飛んで行つた。怪しい者も同じく叫んで、後から続いて行こうとすると、忽^{たちま}ちお杉に叱^いられた。

「お前は彼方^{あつち}へ行つてお出^{いで}よ。」

怪しい者は小さくなつて、窟^{いわや}の奥へ逃げ込^{しま}んで了^{しま}つた。お葉は茫然^{ぼんやり}と立っていた。重太郎も黙^{もく}つて其顔^{その}や容^{かたち}に見惚^{みと}れていた。

山風がどつと吹き下して、岩と岩との間を掻き廻すと、そこらに積つていた真赤な落葉は、さながら火粉を散らすが如くに、はらはらと乱れて飛んだ。

(二十一)

お杉が去り、お葉が去った後の角川家は、所謂大風の吹いた後であつた。塚田巡查も近所の人々も漸次に帰つて了つた。

冬子も一時は失神の態であつたが、これも市郎の手当に因て回復して、南向の座敷に俯向いて坐つていた。傍には安行と市郎の二人が同く黙つて坐つていた。

「冬子さん、何うだね。気分は既う悉皆快いのかね。」と、安行は霎時しばらくして口を切った。

「はあ、有難うございます。お底さまで、もう悉皆快くなりました。」

とは云ったが、冬子の顔は未だ蒼ざめていた。市郎は心許なげに、

「ほんとうに既う快いんですか。まだ血色が不良よくないようだが……。何しろ、飛んだ災難でお気の毒でしたねえ。」

冬子は黙って俯向うつむいていた。

「災難……実に飛んだ災難だったよ。」と、安行も首肯うなずいて、

「あんな狂気染きちがいじみた奴が飛び込んで来るといふのは、何う云う

訳だろう。私が早く知ったら、何とか無事に納めたのだが、あの七兵衛めが一いつこく酷なことを云うもんだから、到頭とうとうあんな騒ぎを演出しでかして了しまつて……。そこへ出ツ食くわした冬子さんは、実に運が悪かったのだ。それでも怪我けがを為しないのが勿怪もつけさいわいの幸で、大事の顔へ疵きずでも付けられようものなら、取返とりかえしが付きやアしない。何しろ、お葉とか云う奴は呆れた女だ。」

「實際、呆れた奴ですなあ。あれも少し気が触ふれているんじゃないやありませんか知らすくな。尠すくなくくもヒステリー患者ですな。」と、市郎も眉ひそを顰ひそめた。

「何どうして又、ヒステリーに罹なつたんでしょう。」と、冬子是不意に顔を擡あげた。お葉に掴こわみ毀こわされた前髪ひさしくずの底は頰ほれたままで、

搔^{かき}上げもせぬ乱れ髪は黒幕のように彼女^{かれ}の蒼い顔を鎖^{とぎ}していた。

其^{そのなか}中から輝くのは葉末^{はすえ}の露の如き眼の光であつた。

「さあ、何^どうしてと云つて……。」と、市郎も考えて、「ああ云う女には能^よくあるんですよ。其^{その}上に酒にも酔つている様^{よう}でしたから……。」

「酔っているばかりでも有りますまい。妾^{わたくし}が二度と御当^{ごち}家へ来ればあの人が又暴れて来るそうですね。あの人は何故そんなに妾を恨んでいるんでしょう。妾には些^{ちっ}とも訳が判りません。」

口では「判りません」と云うけれども、冬子は大抵推量している。自分達母子^{おやこ}が予^{かね}て疑っている如く、お葉という女は市郎と情^わ交^けがあるに相違ない。左^さもなければ自分に対して、あんな乱暴を

働く筈がない。市郎が婚礼延期などを主張するのも、畢ひつきよう竟は彼の女あを恐れている為であろう。自分の夫たるべき男を他ひとに奪とられて、加之おまけに自分が斯こんな酷ひどい目に逢うとは、債権者が債務者から執達吏しつたつりを差向さしむけられたようなもので、余りに馬鹿馬鹿しい理屈である。自分には何の科とがが有つてこんな理非顛倒りひてんどうの侮辱を受けるのであろう。考えれば考えるほど、冬子は口惜くやしくつて堪たまらなかった。

けれども、彼女かれも若い娘である。流石さすがに胸一杯の嫉妬うらみと怨恨うらみを明白地あからさまには打出うちだし兼ねて、先まず遠廻しに市郎を責めているのである。自分が折角見舞に來たしまの問題などは、も何どうでも可いいことになつて了しまつた。

「いや、誰にも判りませんよ。彼の女は云う通りのヒステリー……
 ……究竟^{つまりきちがい}狂人も同様なんですから……。」と、市郎は嘆息するよ
 うに答えた。

「でも、狂^{きちがい}人になるには何か仔細^{わけ}があるでしょう。」と、冬子
 は目^{まな}眦^{じり}を昂^あげて追^{つい}窮^{きゆう}した。

「余^{あんま}り酒でも飲み過ぎたんでしょう。」

「そうでしょうか。」と、冬子は少^あしく冷^ぎ笑^{わら}つて、「あなたは
 其^{その}原因を御存知ないんですか。」

「知りません、一向知りません。」

「知らない筈は無いでしよう。」

冬子の声が稍^{やや}鋭く聞えたので、市郎も聊^{いささ}か面^{めん}食^{くら}つて思わ^{その}ず其

顔を屹きつと視みると、露の如き彼女かれの眼は今や火のように燃えていた。「ああ、判った。あなたは僕を疑うっているんですね。それは冤えんざ罪ざいです、全く冤罪えんざいです。昨日も云う通り、僕は唯たった一度彼家あそこへ行いった限りぎで、あの女と何等の關係も無いんです。先方むこうでは何どう思おもっているか知らんが、此方こつちは清し浄じやう潔けつ白はくです。」

「それならば何故あんな乱暴を為したのだろう。可怪おかしいな。」

父も我子の味方ではなかった。

(二十一)

お葉の問題に就ついて市郎を責めるのは、實際氣の毒であつた。本

人が自白する通り、過ぎし夏に冬子の兄忠一が帰郷した砌、若い
 同士が連れ立って唯一度彼の柳屋へ遊びに行つたことが有る。忠
 一は元氣の好い男で、酔つて随分騒いだ。市郎も温順くしては
 居なかつた。けれども、二人ながら唯酔つて騒いで歸つた丈のこ
 とで、別に後日の面倒を惹起すような種は播かなかつたのであ
 る。

右の通りで、此方では何の種も播かなかつたが、結局は此方が
 自ら刈らねば成らぬような羽目に陥つたのは、市郎の不幸であつ
 た。此方には何の考慮もなかつたが、恋の種はお葉の胸に播か
 れた。東京の深川に生れて、十六の年から神奈川、豊橋、岐阜と
 東海道を股にかけたウエンチ生活の女が、二十三といふ此年の夏

に初めて真の恋を知った。まこと

市郎は其後再び柳屋の門を潜らなかつたが、元来が狭い町で、

恋しい人の家屋敷は眼と鼻の間にあるのだから、女は男を呼び出

す術が無いでもなかつた。況てお葉は男を恐れるような弱い女で

は無かつたが、恋に柔げられた此女は日頃の気性に似も遣らず、

自分の男を捉えて来ることは躊躇して、唯往来で折々逢う毎に、

馴々しく詞をかける位を切てももの心遣りに、二月三月を過

す中に、飛驒の涼しい秋は早くも別れを告げて、寒い冬の山風が

吹いて来た。柳屋の門の柳が霜に痩せると共に、恋に悩める女に

も漸次に瘦が見えた。持病のヒステリーも嵩じて来た。果は酔う

て狂うて、前の如き椿事を演出したのである。

けれども、其^{その}対^{あいて}手の市郎は云うに及ばず、父の安行も周圍^{まわり}の人々も、お葉の恋を斯^かばかりに熱烈なるものとは想像し得なかつた。昔から世間に能^よくある習^{ならい}で、田舎のお大^{だい}尽^{じん}を罫に掛ける酌婦の紋切形であらう位に、極めて單純に解釈していた。況^{まし}て市郎は、最初^{はじめ}から彼^かのお葉という女を意中^{おろか}は愚^{おろか}、眼中にも置いて居なかつたのであるが、今日の一件に出逢^いつて聊^{いささ}か意外の感を作^なした。固^{もと}より半^{はん}狂^{きやう}氣^{がい}の酒乱のような女が、何を云うか判^はつたものでは無いが、彼女^{かれ}は自分の未來の妻たるべき冬子^{ふゆこ}に対して、一種の根強い嫉妬心を懷^かいているのは事實らしく、加^し之^かも自分に対しても、二度^こと此^この女をここの家^{うち}へ入れるなと誓^{ちか}わしめたのを見ると、其^そ底^{そこ}意^いは善^よか悪^{わる}か知らず、兎^とにかく自分に対して何等かの執着心

を有^もっているらしく思われる。随^{したが}つて、冬子にも疑われ父にも怪まれるのも無理はない。

「この疑^{うたが}惑^いを何^どうして解くか。」

市郎も考えた。が、彼^かの柳屋に就^{つい}て事実の有無を証拠立てるより他に仕様もない。

「じゃア、阿父^{おとつ}さんと冬子さんと三人で柳屋へ行つて、私が其^{その}後^ご遊びに行つたことが有るか無いか訊いて見ましょう。」

「馬鹿な。」と、安行は叱るが如くに苦笑いした。「親^{いっし}と一^{しょ}所に訊きに行つたつて、先方^{むこう}で真^{ほん}実^{とう}のことを云うと思うか。」

これは至極^{もつとも}道理である。市郎も叱られて閉口して了^{しま}つた。冬子も声^{こゑ}を顫^{ふる}わして、「妾^{わたし}は死んでもあんな家^{うち}へは行きません。」

と云った。これも道理もつともである。

「だが、お前は眞実ほんとうにお葉という女と関係は無いんだな。」と、
霎時しばらくして父は問うた。

「実際です、実際関係は無いんです。」

市郎は之これより他に、自分の潔白を表明すべき詞ことばを知らなかった。
わが子を信ずる安行は僅わずかに首肯うなずいたが、疑惑うたがいと嫉妬ねたみとが蟠わだかま
る冬子の胸は、まだ容易に解けそうにも見えなかった。

「冬子さん。」と、安行は声を和やわけて、「倅せがれも此の通り云うんだ
から、よもや嘘じやアありますまい。で、今日のことは阿母おつかさん
が心配しないように、能く云つて置いて下さい。何れ私いずからも委くわ
しいお話を為しますから……。」

さしあた
差当り斯んなことを云つて、冬子を宥めるより他は無かつた。
いっ
冬子も何時まで憤つても居られないので、解けぬ疑^{うたが}惑^{がい}を懷いた
ままで、やがて我家へ歸る事となつた。が、途中が何となく不安
である。

よし
「可、私と七兵衛とで送つて上げよう。」

安行と七兵衛は冬子を送つて出た。

(二十二)

虎ヶ窟の前に立つたお葉は、霎^{しばらく}時夢^むのようであつた。襟^{えり}に沁^し
む山風に吹き醒まされて、少しく正氣に復^{かえ}つて見ると、自分の白

い手は人か山^{やまわろ}か判らぬような重太郎に掴まれていた。お葉は驚いて慌てて振放^{ふりはな}した。

「重太郎、お前のお嫁さんを連れて来たよ。」と、お杉は笑いながら云った。重太郎も笑^{えみ}を含んで首肯^{うなず}いた。

飛^{とん}でもない話である。誰がこんな奴の嫁になるものかと、お葉は寧ろ^{むし}可笑^{おかし}くなつた。が、之^{これ}に伴う不安が無いでもなかつた。さりとして逃げる訳にも行かぬ。彼女は相変らず黙って立っていた。

「お葉さん。お前は倅^{せがれ}の嫁になつて呉^くれるだろうね。」と、お杉は徐^{しずか}に問うた。

お葉は矢^やはり黙っていた。重太郎は堪^{たま}り兼ねて又飛び付こうとするのを、母は制して、

「まあ、お待ちよ。ねえ、お葉さん。^{わたしたち}妾達も時々^{かね}に町へ出るから、お前さんとも予てお馴染だが、妾達は二十年^{このかた}以来この窟^{いわや}に棲んで、山^{いつしょ}と所に暮している。けれども、妾の倅の重太郎はじゃアない。是^{これ}でも立派な人間だ。其^その人間の重太郎がお前さんに惚れたのも無理ではあるまい。そこで、是非お前さんを嫁に貰つて呉^くれと云うから、今日お前さんを呼んで来たのだ。何^どうぞまあ仲好くしてお呉^くれよ。」

云う人は極めて真面目であるが、云われる方は余り馬鹿馬鹿しくて御挨拶^{でき}が能ぬ。お葉は唯^とある岩角に腰^{おろ}を卸して、紅い木葉^{このは}を弄^{いじ}つていた。

重太郎は漸^{だんだん}々に熱して来たらしい、又飛^{とび}菟^{かか}つてお葉の手を

捉とろうとするのを、母は再び遮さえぎった。

「そんなことをすると、お葉さんに嫌われるよ。ねえ、お前さん。ここまです所に来る位だから、肯きいて呉くれるのだろうね。」

「妾あたしはそんな意つもりで来たんじゃないやありません。」

「それじゃア何しに来た。」

「お前さんが呼んだから……。」

「呼ばれて来るからには、承知だろう。」

「いいえ。」と、お葉は頭かぶりを掉ふった。

併しかし斯こうなると、お葉も我ながら判らなくなつて来た。自分は何の為にここまでお杉に附いて来たのであろう。呼ばれたから来た……とばかりでは、余りに他愛が無さ過ぎる。何か他に相当な

理屈が無ければならぬ。が、何^どう考えても夢^{よう}の様で、何の為に惡所絶所を越えて斯^こんな処へ入^{いりこ}込んだのか、其^{その}理屈は一切判らぬ。まだ酒に酔^{せい}っていた故^{せい}か知らと、無理に理屈を附けても見たが、それも何だか覺束^{よう}ない様にも思われた。

酒^よの酔^いも醒め、ヒステリーの發作も漸^{よう}く鎮^やつた今^まの彼女^{かれ}は、所謂^い「狐^わの落^おちた人^{にん}」のよう^に、従^{これ}来^{まで}の自分と現在^{いま}の自分とは、何だか別人^よの様^{よう}にも感^{かん}じられた。

お杉は又もや徐^{しず}かに問^かうた。

「お前^{まへ}さん、重太郎^{しんたろう}が忌^いなのかえ。」

問^とわずとも判^はつた話^わだ。お葉^はは矢^やはり黙^{もく}っていた。

「何故^{なん}、忌^いなのだえ。」

お葉は相変らず俯向うつむいていた。

「はは、判った。お前は彼の市郎に惚あれているのだろう。無効だめだからお止よしよ。先方むこうじやアお前を嫌い抜ぬいているのだから……。」

「嫌きらわれていても可よござんすよ。」と、お葉は屹きつと顔を上げた。

「嫌きらわれても思いを通すというのかえ。それは道理もつともだ。が、お

前まへが市郎に嫌きらわれても、自分の思いを通とそうと云うのと同じ訳で、

重太郎も幾いくらお前に嫌きらわれていても、必然きつと自分の思いを通とすよ。

然そう思いつてお在いて。」

お杉は嬌にやにや然ぜん笑わらっていた。

逃げようと思おもつても逃げられる筈はずは無い。傍そばには重太郎が獣けものの

ような眼ひかを晃ひからして見張みはっている。窟くつの奥おくには山やま　らし怪物ばけもの

も居る。路は人間も通わぬ難所である。こんな処へ導かれて来て、こんな怪物共に取^{とり}囲^{かこ}まれたからは、自分の智恵や力で自分の運命を左右する訳には行かぬ。運を天に任すと云うのは、洵^{まこと}に今のお葉の身の上であつた。

(二十三)

窟の中から怪しい者の影が又現れた。加之も二つ、うす暗い奥から此方^{こつち}を覗いていたが、やがて入口の方へちよこちよこ駈^{かけだ}出して来た。

「^{わろ}が又来たよ、^{うる}煩さいねえ。」と、お杉は重太郎を顧^{みかえ}つて「少

し焚火をお為^しよ。」

重太郎は燐寸^{まっち}を有^もつていた。有^{ありあ}合^あう枯枝や落葉を積んで、手早く燐寸の火を摺^{すり}付^つけると、澆^{ばちばち}々云う音と共に、薄^{うす}暗^{くろ}い煙が渦巻いて颺^{あが}つた。つづいて紅い火焰^{ほのお}がひらひら動いた。

火の光を見ると、怪しい者共は俄^{にわか}に恐れたらしい。キキと叫んで、早々に窟の奥へ逃げ込んで了^{しま}つた。

「お葉さん、寒いだろう。此方^{こつち}へ来てお当りな。」と、お杉^{しずか}は徐々に焚火の傍^{そば}へ寄つた。お葉は岩に腰をかけたままで、返事も為^しなかつた。

「幾らお前が強情を張つた所で、一旦ここへ連れて来た以上は、もう帰す気配^{きづか}いはないから、其^{そのつもり}意^いで悠々^{ゆっく}してお在^{いで}。夜も寒

くない様ように、毛皮も沢山用意してあるから……。大事の花嫁さんに風邪でも引かせると大変だからね。ははははは。」

焚火はいよいよ燃え上あがつて、其その紅い光は、お杉の尖とがつた顔と、重太郎の丸い顔と、お葉の蒼い顔とを鮮明あざやかに照てらした。

昼も暗い山峽やまあいでは、今が何時頃だか判らぬ。あなたの峰を吹き過ぐる山風が、さながら遠雷のように響いた。

三人は霎時しばらく黙っていた。やがてお杉は轟然すつくと起たつた。

「お葉さん、何を考えているんだえ。もツと此方こちへお出いでよ。」
対手あいては矢やはり黙っているのです、お杉は笑いながら其傍そのそばへ歩み寄よつた。

「判らない人だねえ。何でも可いいから妾わたしの云うことを肯きいて、素

直にこの人にお成りよ。お前が惚れている市郎も、今にここへ連れて来て上げるから……。可いだろう。」

「若旦那がここへ……。」

「ああ、妾が必然きつと連れて来て見せるから、温順おとなしくして待つてお在いで。え、それでも忌いやかえ。ねえ、お葉さん、確乎しつかり返事をお為しよ。」

お杉は窪んだ眼を異様に輝かして、対手あいての顔を穴の明くほど凝じつと見詰めると、お葉は少しく茫ぼうとなつて来た。

「え、判ったかえ。」

低声こごえに力を籠めて云うと、お葉は小児こどものように首肯うなずいた。彼女かれは漸次しだいに酔つて来たように感じた。

「可い^いかえ。はいと返事をお為^し。」

「はい。」

「重太郎のお嫁になるかい。」

「はい。」

お葉は夢心地で答えた。

「可^{よし}、可^{よし}。さあ、妾と一^{いっしょ}所にお出^いで。」

進んで其手^{その}を把^とると、お葉は拒みもせず^しにふらふらと起^たち上^{あが}つた。お杉は此^この捕虜^{とりこ}を窟の暗い奥へ連れ込^{しま}んで了^{しま}った。焚火に映る重太郎の顔は、火よりも熱して赤く見えた。

やがて窟の奥からお杉の声で、

「重太郎、火を消^{しま}しておいよ。」

重太郎は云わるるままに焚火を踏み消すと、四辺あたりは俄にわかに暗くなつた。奥から母が再び出て来た。後につづいて例の怪しい者が二つ飛んで来た。

お杉は宙を歩むように、傍かたえの小高い岩角へするすると登つた。天を凌しのぐ山毛櫟ぶなの梢の間ひまから、僅わずかに洩るる空の色を仰いで、

「もう日が暮れるのに間もあるまい。今夜はお前達だいじに大事の仕事があるんだよ。」

「阿母おつかさん、何だ。」

「角川の市郎はお前の仇かたきだ。彼奴あいつが無事に生きて居ては、お葉は何日いつまでも未練が残つて、長くお前に附いて居まいよ。」

重太郎は眼を瞋いからして首肯うなずいた。

「それから彼奴は妾にも仇だ。先刻妾を突き倒して、半殺しの目に逢わした奴だ。お前達は其の復讐をしてお呉れ。頼んだよ。」
「可、大丈夫だ。」

勢い込んで駈け出そうとするのを、母は呼び止めて何事かを囁き示す中に、日も漸く暮れかかったらしい。例に依て濛々たる山霧が潮の如くに湧いて来た。

「早く行ってお出でよ。」

お杉の声を後に聞きながら、重太郎もも霧の中衝いて出た。
お杉は笑いながら再び焚火を撥り初めた。

冬子を送つて隣村まで出向いた安行と七兵衛とは、日が暮れるまで戻らなかつた。が、それは左のみ珍しいことでも無い。安行が吉岡家を訪問して、半日ぐらい話し込んでいることは、従来これまでにも屢々しばしばあつた。

此頃このごろは日ひが滅切めつきり詰つまつて、午後四時には燈火あかりが要る。麗うららか

な日も、今日は午後から俄にわかに陰くもつて、夕から雨を催した。五時

過ぎても、六時を過ぎても、二人は帰らないので、市郎も少しく

不安を感じ初めた。殊に昨夜のわろの一件もあるので、途中が何だ

か剣呑けんのおんにも思われた。家うちにいて心配するよりも、迎いながら町

尽頭はすれまで出て見ようと決心して、市郎は洋杖すてつきを振りながら門を

出ると、恰も七兵衛の駈けて戻るのに逢った。

「小旦那……。」

彼は呼吸を喘ませていた。暗くて能くは判らぬが、恐く顔の色も蒼くなっているだろうと思われた。

「どうしたんだ。」と、市郎も慌しく駈寄つて訊ねた。

「大旦那様は戻ったかね。」

「まだ帰らない。お前は親父と一所じやアないのか。」

「一所だったが……途中で失れて……一体どうしただろう。」

七兵衛が口早に語るのを聞くと、二人は冬子を吉岡家へ送り届けて、母のお政に昨夜の一件や、今日のお葉の一条などを話している中に、思いの外に時が移って、冬の日は早くも傾きかか

った。二人は暇いとまを告げて立ち出ると、お政は途中の用心に松明たいまつを貸して呉れた。

七兵衛が先に立つて松明を振り照しながら、村と町との境まで来き蒐しかると、路みちは全く暗くなった。昨夜山ゆうべに襲われたの此この辺へんだなどと話していると、行手の木蔭から一人の小作りの男がひらりと飛んで出た。何者かと松明を突き付ける間ひまもなく、彼は蝗いなごの如くに飛んで来て、七兵衛の持った松明を叩き落した。加之しかも落ちたる松明を取って、傍かたえの小川に投げ込んだしまった。

火の消えるのを相図のように、同じ木蔭から又もや怪しい者がばらばらと飛び出して、安行を手取り足取り引担ひっかついで行こうとする。安行も無論抵抗した。七兵衛も進んで主人の急を救おうと

すると、最初の小さい男が這つて来て七兵衛の足を掬つた。彼は倒れながらに敵の腕を取つて、一旦は膝下に捻伏せたが、体に似合わぬ強い奴で忽ち又跳返した。二人は起きつ転びつ筆り合つている中に、安行は自分の敵を突き退けて十間ばかりは逃げたらしい。敵もつづいて追つて行つた。

主人の身の上が関心ではあるが、自分も一人の敵を控えているので何うすることも出来ない。七兵衛は声をあげて救いを呼んだ。この声を遠く聞き付けて、後の村から二三の人が駈けて来た。其のあしおと
登音を聞くと、敵も流石に狼狽えたらしく、力の限りに七兵衛をつきの
を突退け退けて、あなたの森へ逃げ込んで了つた。

が、主人の行方も安否も判らぬ。救いに來つた人々に仔細を話

して、七兵衛も共々に其処そこらを尋ね廻つたが、何分にも暗黒くらがりと云い、四辺あたりには森が多いので、更に何の手懸りてがかも無かつた。或はあるい首尾好く町の方へ逃げ延びたかも知れぬと、彼は念の為に兎とに角かくも駈かけ戻つたのである。

以上の報告を聞いて、市郎も色を変えた。對手あいてはか或は其あるいそれに似寄によりの曲者くせものか知らぬが、何れいずにしても彼等に襲われた父の運命は、甚だ心許ないものと云わねばならぬ。

「七兵衛、早く駐在所へ行つて来い。」

七兵衛が駐在所へ駈付かけつける間に、市郎は家うち中の者じゆうを呼集よびあつめて、右の始末を慌しく云い聞かせると、一同は眼を瞠みはつて駭おどろいた。何しろ一刻も早く捜査さがしに出ると身支度する処へ、塚田巡查も

しゅっちよう
出張した。提灯や松明が点された。

「角川の大旦那が攫さらわれた！」

誰云うとなく此声このこえが駅しゆくちゆう中に拡がると、まだ宵ながら眠れ

るような町の人々は、不意に山海嘯やまつなみが出たよりも驚かされた。

日頃出入の者は云うに及ばず、屈くつきよう竟の若者共は思い思いの武

器を把とつて駈集かけあつまった。

塚田巡査は町の者共を従え、市郎は我家の職人や下男げなんを率いて、

七兵衛老翁じじいに案内させ、前後二手に分れて現場げんじようへ駈向かけむかった。

夜の平和は破られて、幾十の人と火とが、町尽頭まちはずれの方へ乱れて

走った。

(二十五)

午後から陰くもった冬の空は遂に雨を齎もたらして、闇を走る人々の上に
 冷つめたい糸の雫しずくを落した。が、そんなことに頓着とんちやくしている場合でない。
 松明たいまつの火を消すほどの強雨つよぶりでも無いのを幸いに、何れも町を
 駆け抜けて、隣村の境まで来て見ると、暗い森、暗い川、暗い野の
 路みち、見渡す限り唯真黒な闇に鎖とざされて、天地寂寥せきばく、半時間前に
 怖るべき椿事ちんじがここに起おこったとは、殆ど想像の付かぬ位であつた。
 「老翁じいや、この辺へんかい。」と、市郎は立止たちどまつて顧みかえると、七兵衛は
 水みづ涕ばなを啜すすりながら進み出た。

「はあ、丁度ちやうどこちらでがすよ。あれ、あの樅もみの木の蔭かげからわろが

出て来たので……。それから何でも大旦那は彼地あつちの方へ逃げたように思うのですが……。」

人々は松明を振照ふりてらして、七兵衛の指さす方かたを仔細に検査したが、別に手懸りとなるべき足跡もなく、遺留品も見出し得なかつた。

「どうも判らんな。」と、塚田巡查も失望の嘆息といきを洩もらした。

が、兎とに角かくに其儘そのままでは済まされぬ。巡查の率いる一隊は、森に沿うて山路やまみちを北に登る事となった。市郎の一隊は現場げんじようを中心として、附近の森や野原や村落を獵あさる事となった。斯かくて夜半やはんまで草を分けて詮議したが、安行の行方は依然不明であつた。加しも夜かの更けると共に、寒い雨が意地悪く降ふりしき頻しきるので、人々も

寒気^{かんき}と飢^{うえ}とに疲れて来た。

「到底今夜のことには行くまい。」と、弱い音^ねを吹く者も出て来た。が、市郎は容易に諦めることは能^{でき}なかつた。疲れた一隊を慰め励まして、其附近^{その}約三里の間を東西に南北に駈け廻ったが、遂に何の手懸りも無かつた。懷中時計を見ると、既^もう午前一時である。松明の火も漸^{ようや}く尽きて来た。

此上^{この}は矢^やはり山へ向うより他は無^ない。で、曩^{さき}に巡查等が登った路^{みち}とは方角を変えて、西の方から山路^{やまみち}へ分入^{わけい}ろうとする途中に、小さい丘が見えた。ここに多い山毛櫨^{ぶな}が茂^{ふも}つて、丘の麓^{ふもと}には名も無い小川が繞^{めぐ}っていた。

「や。人が死んでいる！」

先に立つたる一人が松明を翳^{かぎ}して驚き叫ぶと、余^よの人々も慌て駈^{はな}け寄つた。見ると、山毛櫸^{ぶな}の大樹の根を枕にして、一人の男が赤裸で雨の中に倒れていた。

市郎は殆ど夢中で駈^{かけ}寄つた。消えかかる幾多の松明の火が一時にここへ集められた。其^その光に照し出されたる屍体^{ありさま}の有様は、身の毛も悚^{よだ}立つばかりに残酷なるものであつた。男は前にも云う如く、身には一糸^{いっし}を附けざる赤裸で、致命傷は咽喉^{のど}であろう、其^そのきずぐち疵口^{こんこん}から滾々^{なまち}たる鮮血を噴いていた。更に驚くべきは、鋭利なる刃物を以て其^その顔の皮を剥ぎ取つたことである。随^{したが}つて其^その顔は判然^{はんぜん}せぬが、僅^{わず}に灰色の髪の毛に因^よつて、其^その六十近い老人であることを確^{たしか}め得た。

「阿父さんだ。」と、市郎は屍体を抱いて叫んだ。七兵衛も声を揚げて泣いた。

この意外なる光景に胆を挫がれて、余の人々は唯動揺めくばかり、差当り何うするという分別も出なかった。が、流石は職業であるから、市郎は先ず其疵口を検査すると、疵は刃物でなく、鋭い牙と爪とて咬破り搔裂いたものらしい。彼は再び驚くと共に、敵は正しくであることを悟った。

この時、あなたの山の方から幾箇の松明が狐火のように乱れて見えた。巡查の一隊は尋ね飽んで、今や山を降つて来たのである。斯くと見るより此方の人々は口々に叫んだ。

「大旦那はここに居たぞ。おうい、おうい。早く来いよ。」

先方でも声に應じて駈けて来た。が、慘憺たる此場の光景を見て、何れも霎時は呆氣に取られた。巡査は劍鞘を握つて進み出た。

「残酷なことを行りましたなあ。　でしうか。」

「無論、　です。　の仕業です。」と、市齋嚙をした。

「顔の皮を剥いだのは、犯跡を晦ます為でしうか。」

「そんなことかも知れませんな。」

巡査は首肯いて、これも一応屍体を検めたが、やがて少しく眉を顰めた。

「角川さん。」と、塚田巡査は市郎を顧^みつて、「もう一度この老人の口を……歯を能^よく見て下さい。」

市郎は死人^{しにん}の口を開けて見た。

「どうです。違^{ちが}や為^しませんか」と、巡査は首を拈^{ひね}った。

成程^{なるほど}、違^{ちが}っていた。今まで氣が顛倒^{てんどう}していたので、流石^{さすが}に

そこまでは意^きが注^つかなかつたが、安行の前歯は左が少しく缺^かけていた。この男の前歯は左右とも美事に揃^{そろ}っている。髪の色こそ似ているが、確^{たしか}に人違^{ちが}いだ、我父では無い。市郎は吻^{ほっ}とした。

「違います。違います。成程、これは親父じゃありません。」

「そうでしょう。」

「違つた、違つた。」と、人々は喜よろこ悦びの声を揚げた。七兵衛は嬉しさに又泣き出した。人々は消えかかった松たいまつ明が再び明るくなつた様ように感じた。

が、これが安行でないとすると、何いずこ処この何者であろう。たとい角川家の主人其そのひと人にあらずとも、一個ひとりの人間が惨殺されて此ここ処こに横よこわつてゐるのは事実である。塚田巡査は職務上これを捨すて置おく訳には行かぬ。取とり敢あえず其屍その体を町へ運ばせて、己おのれは其報告書そのを作とる準備に取とりかかつた。

夜はいよいよ更けて、雨は益々烈しくなつて来た。此このまま雨中に立ち尽しては、或あるいは凍えて死ぬかも知れぬので、遺憾ながら安行の搜索は一旦中止して、一同も空しく町へ引揚ひきあげて来た。市

郎は其夜一睡も為なかつた。

「阿父さんは何うしたろう。」

彼の冴えたる眼には、彼の慘殺されたる老人の屍体がありありと映つた。自分の父も矢はり彼のような浅ましい姿になつて、人の知らぬ山奥か谷間に倒れているのではあるまいか。それにしても、あの老人は何者であらうか。父の行方不明と彼の慘殺事件との間に、何等かの関聯があるのではあるまいか。こんな事を際涯もなく思い続けている中に、夜は白んだ。幸いに暁方から雨は晴れた。

遠近では鶏が勇ましく啼いた。市郎は衾を蹴つて跳ね起きた。

家内の者共は作夜の激しい疲労に打たれて、一人もまだ起きてい

ない。が、何だか沈おちつ着いても居られないので、市郎は洋服身輕に
扮いでた装つて、兎とも角かくも庭前にわさきへ降立おりたつた。

「今日は先まず何地どっちの方面から搜して見ようか。」

頬を吹く雨あまあがり後の寒い朝風は、無数の針を含んでよういる様にも

感じられたので、市郎は思わず襟えりを縮すくめながら、充血した眼に大

空を仰ぐと、東は漸ようやく明るくなつたが、北の山々は夜の衣ころもをまだ

脱がぬと見えて、顔くすれかかった砲壘ほうるいのような黒雲くろくもが堆うずたかく拡が

つていた。

一昨夜はトムを殺された、昨夜は父を奪われた。彼かの山やまわろな

るものは、何が故に執念深く自分等に祟うかるのか、市郎は殆ど判断
に苦くるしんだ。が、彼は不図ふとこんな事を思いうか泛べた。

トムは一昨日吉岡家の門前で、彼のお杉婆おさばあに吠え付いた。而そうして其晩そのに殺された。自分は昨日我家の門前で、同じくお杉婆を突つ倒きたおして氣絶させた。而そうして其晩そのに父が行方不明になった。果はたして世間で伝うる如く、お杉婆と山との間に、何か不思議の因縁が結び付つけられてあるとすれば、昨夜の禍も或はお杉婆おさばあに關係が有るのではあるまいか。

「そうだ、必然きつとそうだろう。」

斯こう考えると、彼は矢も盾も堪たまらなくなつた。家内の者共を呼び起おこすまでもなく、自分一人で彼の虎ヶ窟かを探ろうと決心した。で、一旦内へ引返ひっかえして、応急の藥劑と繃帶ほうたいとを用意して、足早に表へ出ようとする時、七兵衛父爺しじいが寢惚眼ねぼけまなこを擦こすりながら裏

口を遅々^{のそのそ}出て来た。出逢頭^{であいがしら}に喫驚^{びつくり}して、

「や、小旦那……。朝飯も食わねえで何処^{どこ}へ……。駐在所かね。」

「いや、虎ヶ窟へ……。私は一足先へ行くから、皆^{みんな}なが起きたら直^{すぐ}に後^{あと}から来るように然^そう云^いつて呉^くれ。」

「虎ヶ窟へ……。」

七兵衛が危^{あやぶ}む顔を後^{あと}にして、市郎は早々に飛び出して了^{しま}った。

(二十七)

市郎が駅^{しゆく}を抜^ぬけて村境^{むらぎかい}に着いた頃には、旭日^{あさひ}が已^{すで}に紅々^{あかあか}と昇^{のぼ}った。遠近^{おちこち}の森では鳥が啼いて、眼も醒めるような明るい

朝の景色は、彼に前途の光明を示すようにも見えたので、市郎は自ずと心が勇まれた。

例のもみばやし樅林の落葉を踏んで行くと、漸次しだいに山路やまみちへ差さ蒐しかる。岩はにわか俄に峻けわしくなつて来た。

「多寡たかが一里だ。知れたものだ。」

市郎は勇を鼓こして登った。が、彼は所謂いわゆる虎ヶ窟なるものの在あ所りを委くわしくは知らなかつた。小児こどもの時に友達と一いつしよ所しょに、一度ばかり登ったことが有るように記憶するが、今となつては其方角そのも頗すこぶる覚束おぼつかないものであつた。何でも本道から西へ入ると聞き伝えていたので、心の急せく彼は遮しや二無二西むにへと進んだ。昨日彼かのお葉が踏んだ路みちである。彼も大小の岩を飛び越えねばならなかつた、

山やまづた蔦すがに縋あぶなつて危あぶない綱渡りをせねばならなかつた。洋服扮装でたちの彼

は、草鞋わらじを穿はいて来なかつたのを悔くいた。

彼は又、曾かつて読うんだ八犬伝うちの中で、犬飼いぬかい現八げんぱちが庚申山こうしんざんに

分け入るの一段を思おもひ出した。現八は柔術やわらに達していたので、岩

の多い難所なんじよを安々と飛び渡つたと書いてある。市郎には生憎あいにく

そんな素養が無かつた。

「多寡たかが一里だ。」と、彼は難所なんじよに逢あう毎に自ら励あました。が、

或は路あるいみちを踏ふみ違ちがえたのかも知れぬ。已すでに二時間余あまりを費したかと思

うのに、目指す窟いわやを未だ探り得いなかつた。この寒いのに彼は全身

に汗を覚えた。岩の蔭から瞰みあぐ上れば、日は已すでに高く昇つたらしい。

幾ら氣が張つかつていても、疲労つかれには勝たれぬ。市郎は昨夜雨中を

駆けまわ 廻つた上に、終夜殆ど安眠しなかった。加之も今朝は朝飯も食わなかった。疲労と不眠と空腹とが重つた上に、又もや此の難所を二時間余も彷徨つたのであるから、身体からだの疲れと気疲れとで、彼は少しく眼が眩くらんで来た。脳に貧血を来きたしたらしい。ここで倒れては大変だ。

「これでは到底歩とてもかれない。」

市郎は唯ある岩角に腰をかけて、用意の氣注薬きつぐすりを啣ふくんだ。足の下には清水が長く流れているが、屏風のような峭立きつたての岩であるから、下へは容易に手が達とどかぬ。少しく体を前へ屈かがめると、翻も筋斗打んどりつて転げ墜おちるであろう。斯こう思うと、飲料のみものを用意して
いない彼は愈いよ渴よいかわきを覚えた。

「自分は医師いしやでありながら、何故斯こう不注意だろう。」と、彼は自己おのれを叱おつつても追付かない。市郎は余りに慌おつてて我家を出たのであつた。

「それにしても、七兵衛や他ほかの者は何どうしたろう。」と、彼は心細こさに斯こんな事も考えた。が、今更ひつ引返かえすべきではない。進め、進め、倒れるまでも進めと、市郎は勇氣を振おこい起おこして又歩き出した。あなたの梢しほでは大きな山猿ななかぼが、他ひとを嘲あざけるように笑わらっていた。市郎は何処どこを何どう歩いたか、半は夢中で無闇に進んで行いつた。それから約一時間ばかりも経へつたと思う頃、彼はあなたの大きい岩の狭間から、一縷いちるの細い煙けぶりの迷いい出でづるを見た。

「占めた！」

彼は喜んで躍った。で、思わず声を揚げて呼ぼうとしたが、遠方から敵を驚かしては妙でない。窃に近寄つて其不意を襲うに如ずと、市郎は故意に跫音を偷んで、煙のなびく方へ岩伝いに辿った。

この辺には大樹が多かつた。大樹の聳ゆる下に落葉焚く煙が白く颯つて、彼のお杉婆は窟を背後に、余念もなく稗の粥を煮ていたが、彼女の耳は非常に敏かつた。忽ち人の跫音に心附いたと見えて、灰色のおどろ髪を振乱しつつ此方を屹と顧った。市郎はつかつかと其の眼前に現れた。

お杉は騒ぐ気色もなく、徐に起ち上つて軽く会釈した。

「昨日は何うも飛んだ御邪魔を致しました。」

「いや、僕の方でも大変失礼した。」と、市郎も尋常の挨拶をして、「時に今日来たのは他でもないが、家の親父が昨夕から行方知れずになったので……。」

「まあ。」と、お杉は驚いた顔をした。

(二十八)

市郎は少しく躊躇したが、更に詞を次いだ。

「そこで、心当りを方々探しているんだが、何うも判らないので困っている。」

「それは困りましたねえ。」と、お杉も心配そうに眉を寄せた。

「村の者の話に拠ると、親父は山の方へ登ったとも云うんだ。若し然うならば、万一此地の方へでも迷い込んで来やアしないかと思つて……。」

「いいえ、お見掛申しませんね。」

お杉は昨日に引替えて、極めて叮嚀な口吻であつた。が、市郎は中々油断しなかつた。

「親父は来なかつたかね」と、考えて、「そこで、些と云い難いことだが、折角ここまで来たもんだから、念の為に窟の中を一応調べさして貰いたいんだが、何うだろうね。」

「判りました。あなたは妾を疑っているんでしょう。妾はこんな姿をして、乞食同様の生活をしていますが、人を攫つたり、殺し

たりした記憶おぼえはありません。山やまわろとは違いますからね。」

「それは僕も知っているが、まあ念ねんばら晴あたらしだ。検あたらめても可いいだろ
う。」

お杉は黙って市郎の顔を視みていた。

「可いいだろう、鳥渡ちよいと検とめても……。」

「何どうとも勝手にお為しなさい。だが、倅せがれの帰かえらない中うちに早く願ねがい
ますよ。」

「倅せがれは何処どこへ行いった。」

「そこらへ木実きのみを拾ひろいに行いきました。」

「そうか。」

市郎は窟へ五六歩踏ふみこ込んだが、奥は暗いので何にも見えなかつ

た。お杉は黙つて窟の入口に立つていた。

「中は真暗まつくらだね。」と、市郎は外みかえを顧みつて呼ぶと、お杉もつづ

いて入つて来た。

「何か松明たいまつか蠟燭ろうそくのようなものは無いかね。暗くつて仕様がな

い。」

「松明もあります、蠟燭もあります。」

「何方どっちでも可いいから貸して呉くれないか。」

お杉は黙つて蠟燭に火を点つけた。

「あなた、どうぞお早く願いますよ。ここへ倅ひとが歸つて来ると不い可けませんから……。彼兒あれは正直者ですから、他ひとから嫌疑うたがひを受け

て家捜やさしをされたなどと聞くと、必然きつとおこ憤おこるに相違ありませんから

……。―

「可、可。^{よしよし}判った。」

お杉が照す蠟燭の淡い光を便宜^{たより}に、市郎は暗い窟の奥へ七八間^{けん}ほど進み入ると、第一の石門^{せきもん}が眼の前に立っていた。市郎はお杉の手から燈火^{あかり}を受^う取^けつて、左右の隅々^{くまぐま}を照し視^みたが、上も下も右も左も唯^{ただ}一面の嶮^{けわ}しい岩石で、片隅の低い岩の上には母子^{おやこ}の寢道具^{ねどうぐ}かと思われる獣の生皮二三枚と、茶碗と箸^{やかん}と薬罐^{やくかん}のたぐいが少しばかり転がっているのみで、他には別に眼^めに入る物もなかった。市郎は念の為に獣の皮を一枚づつ引き剥^{めく}つて見た。

「何か見付^{みつ}りましたか。」と、お杉は冷笑^{あざわら}うような口吻^{くちぶり}で問うたが、市郎は何とも答えなかった。これより更に奥深く進むと、

第二の黒い石門せきもんが扉のように行手を塞ふさいでいて、四辺あたりの空気は凍るばかりに寒かった。

「この先にも路みちがあるかね。」

「ありますから、まあ入って御覧なさい。石の下から潜もぐって行くんですよ。」

市郎は一旦立止たちどまったが、此このまま半途で引返ひっかえしては何にもならぬ。彼は障碍物しょうがいぶつ競走をするような形で、兎とも角かくも冷つめたい石門の下を這って通ると、其後そのあとからお杉の痩せた身体が蛇のようにするすると抜け出して来た。

「ここが行止ゆきどまりだね。」

お杉は首肯うなずいた。市郎は一度消えた蠟燭に再び燐寸まっちの火を点つけ

て、暗い石室いしむろの中を仔細てらに照して視たが、所々の岩の窪みに氷のような水を宿している他には、矢やはり何物も眼に入はいらなかつた。「何か見付みつりましたか。」と、お杉は重ねて問うた。其声そのが四方の低い石壁に響いて、何となく凄愴ものすごいように聞えた。市郎は黙って立っていた。

(二十九)

市郎が唯一のぞみの希望の光も消えた。あれほどの難所なんじょを越えてようよう此処ここを尋ね当てた効かいも無く、暗い窟の奥には何の秘密も無かつた。彼はお杉に有らぬ疑惑うたがいを掛けたのを、今更大おおいに後悔し

た。

「どうも僕が悪かったよ。」

「じゃア、もう可いんですか。」

「むむ。ここまで詮議すれば心残りは無い。もう帰ろうよ。」

とは云ったが、まだ幾分の未練が有るらしい、市郎は壁に沿うて室内を一巡りした。

「や、あの隅に大きな穴がある……。」

お杉の眼は晃然と光った。市郎は進んで蠟燭の火を翳すと、岩穴は深さ幾丈、遠い地の底でどうこうという音が微に聞えるばかりで、蠟燭の細い光ぐらいでは到底達きそうも無い。穴の奥は深い闇に埋まっていた。

市郎は更にひざま跪ずいて底を覗いたが、底は唯ただ暗いのみで何にも見えなかつた。お杉は黙つて其その背後に突つ立つていた。

低い狭い石室いしむろの中は、墓場のように鎮しずまり返つていた。が、其その寂寞せきばくは忽たちまち地に破られた。市郎は我が背後で微うしろに物の動かくけ息はいを聞いたので、何なに心こころなく顧みかえると、驚くべし彼かのお杉婆ばあは手とに磨すまぎ澄としたる小刀こがたなを振ふり翳かざして、あわや彼を突かんとしているのであつた。

「何をするツ。」

市郎が驚いて叫ぶ間もありや無しや、お杉の兇器は其その頸くび筋すじへ閃きいて来た。が、咄とつ嗟さの間に少あしく体たいを躲かわしたので、鋭きつい切き尖きは僅わずに其の肩先を掠かすつたのみであつた。空を撃つたお杉は力くう

余つて、思わず一足前へ踰よるめく機会はずみに、恐おそく岩角つまずに蹉すいたのであ
 ろう、身を翻ひるえして穴の底へ真逆さまに転おげ墜おちた。蠟燭は消え
 て真の闇となつた。

意外の出来事に市郎も一時は呆あけつけに取られたが、お杉が自分を
 殺そうとしたのは、恐おそく昨日きのうの復讐ふしうばかりではあるまい。彼女かれは
 此この岩穴うちの中に何等かの暗い秘密を蔵ぞうしているので、其その発覚を
 恐かれて斯かる兇行を企てたに相違ない。矢やはり自分が最初はじめに疑つて
 いた通り、生しょう死不明の父は此この穴の底深き処に葬られてゐるのか
 も知れぬ。それにしても、お杉は何どうしたろう。岩石に骨を砕か
 れて即座に命を隕おとしたか、或あるは案外あるの輕傷で無事に生きてゐるか、
 先まず其安否そのを確ためねばならぬ。いかに悪人にもせよ、此このまま見

殺しにするという法はあるまい。

「兎も角も穴へ入つて見よう。」

父の行方とお杉の安否とを探る為に、市郎は直ちに此の冒険を試みようとは決心した。彼は燐寸を擦つて再び蠟燭に火を点けた。其光に因て又もや穴の中を窺うと、底の底は依然として真暗であつたが、彼は幸いに或物を見出した。それは一条の細い綱である。

今までは些とも眼に注かなかつたが、綱は人間の髪の毛に因て固く編まれたもので、所謂「毛綱」の類であつた。其の一端は穴の降口とも思しき処の岩角に結び付けられて、他の端は暗い底の方に長く垂れていた。試みに之を手繰つて見ると、綱は古代

の大蛇だいじゃのように際限はてしもなく長いもので、繰くれども繰くれども容易に
 其端そのはしには達とどかなかつたが、根こんよく手繰たぐつている中うちに、漸ようやく残り
 なく引揚げた。長さは幾丈あるか鳥渡ちよつとは想像が付かぬ位で、黒
 い固い綱は狭い室内に蟠とぐろを巻いて、其端そのはしは蛇の鎌首のように
 突つ立つた。これが総て人間の髪毛かみのけであるかと思うと、市郎は
 何となく薄気味悪く感じた。

が、今は猶予している場合でない。市郎は其綱そのの片端を自分の
 胴しかに緊しと結び付けて、海うみつばめ燕の巢あさを獵あさる支那人のように、岩を
 伝まつつて真直まっすぐに降り初めた。岩は殆ど峭立きつたつたように嶮けわしいが、
 所々には足がかりとなるべき突とつしゅつ出の瘤こぶがあるので、それを力
 に探りながら徐そろそろ々と進んだ。

降^{くだ}るに従つて、深い穴の底はいよいよ暗かつた。彼が僅^{わず}かに頼^かみとするのは、鬼火のように燃ゆる一^{いつちよう}挺の蠟燭の他は無かつた。

(三十)

市郎は半夢^{なかば}中であるから、約何^{およそ}のくらい降りて進んだか判らぬ。兎^とにかく手がかり足がかりの岩を辿つて、下へ下へと危^{あやう}くも降りてゆくと、暗い中から蝙蝠^{かわほり}のようなものがひらりと飛んで来て、市郎の横^{よこ}面^{つら}を礎^{はた}と打つた。あつと顔を背^{そむ}ける機^{はずみ}に、冷^{つめた}い空氣の煽^ふりを受けて、頼^{たの}みの蠟燭はふツと消えた。

「あ、失敗^{しま}つた！」と、市郎は思わず舌^{した}打^{うち}した。が、現在の位

置にあつて再び蠟燭を点けると云うことは、殆ど不可能であつた。彼は左の手に蠟燭を持ち、右の手に岩を抱いて、辛くも其身を支えていたのであるから、到底燐寸を擦るべき余裕は無い。迂濶に手を放せば、彼は底知れぬ暗黒に転げ墜ちて、お杉と同じ運命を追わねばならぬ。さりとて此のままの暗黒では仕方が無い。

彼は霎時途方に暮れたが、此の場合兎も角も進んで行くより

他は無いので、市郎は探りながらに徐に降りた。それから二三間

ほど進んだかとも思う時に、彼の左の足は硬い物に触れた。靴で

幾度か探つて見ると、これは突出した岩の角で、岩は可成

に広いらしい。ここならば両手を放しても立つて居られそうに思

われたので、「可、ここで燐寸を点けようか。」と、市郎は更に

右の足を踏み締めると、足の下は意外に柔かであつた。左は硬く、右は柔かい。少しく可怪いとは思つたが、柔かいのは恐らく粘土であらうと想像して、彼は先ずここに両足を踏み固めた。

で、何よりも早く蠟燭を点けねばならぬ。市郎は手早く燐寸を擦ると、余りに慌てた結果、火は点いたが又忽ち消えた。が、この瞬時の光に因て、彼は我が足下に人の横わっているのを見た。男か女か確とは判らぬ、唯蒼白い顔が朦朧と浮き出したかと思ふ間もなく、四辺は再び旧の闇に隠れて了つた。

「阿父さんか、お杉か、但しは別人か。」

市郎は急いで又燐寸を擦つたが、胸の動悸に手は顫えて、幾たびか擦損じた。彼は愈よ悶れて、一度に五六本の燐寸を掴んで

力任せに引擦ひっこすると、火は漸ようやく点いた。

わが足下あしもとよこたに横わっているのは、尋ぬる父の安行であつた。わが

右の足で踏んでいた柔かい物は粘ねばつち土で無い、老たる父おいの左の股もも

であつた。市郎は驚いて声も出なかつた。慌とびて飛退いて更に熟よく

視みると、人違いでない、確たしかに父の安行である。が、其顔そのは生ける

日と些ちつとも変らず、極めて平和な温順な人相を現わして、斯かる変

死者に往々おうおう見る所の苦痛や煩悶の死相は少しも見えなかつた。

父は恐く不意に殺されたのであろう。父は怖るべき危害の迫り来

るを予知せずに突然死んだのであろう。

市郎は蠟燭を岩の罅間さけめに立てて、一先ひとまず父の亡骸なきがらを抱おこき起し

たが、脈は疾とうに切れて、身体は全く冷えていた。併しかし一通り見

た所では、何処どこにも致命傷らしい疵きずの痕は無かった。多分この岩の上へ突き落されて、脳震盪のうしんとうを起おこして死んだのではあるまいか。勿論もちろん、これとても想像に過ぎない。

おとつ
「阿父さん……。」

切せめてもこころゆかの心 床しに、市郎は父の名を呼んだが、魂たましい魄いの空しい人は何とも答えなかつた。

「阿父さん……。」

彼は再び呼んだ。呼んで返らぬとは知りながら、再び呼んだのである。

市郎は一人ひとりこ児であつた。小児こどもの時に生うみの母には死しに別わかれて、今こ日にちまで父おや一人子一人の生涯を送つて来たのである。父は年とし齡いよ

りも若い、元氣の好い人であつた。わが子に對つても平氣で冗談を云うような人であつた。加之も我子を又無く愛する親であつた。遠からず我子に嫁を迎えて、自分は隠居する意の親であつた。この父と子と突然に別離を告げたのである。それも尋常一様の別離でない。父は夢のように姿を隠して、夢のように死んだのである。加之も人間の通わぬ窟の奥、暗い蠟燭の下で其悲しき死顔を見たのである。

市郎は父の亡骸を抱いて泣いた。

(三十一)

この時、背後うしろの方から不意に物の氣息けはいが聞えて、何者か忍び寄るようにも思われたので、市郎は手早く蠟燭を把とつて起上たちあがると、余りに慌てたので、彼は父の死骸つまずに蹠つまずいた。広いと云つても一坪にも足らぬ岩の上である。彼はあつと云う間に足を踏み外して、深さも知れぬ暗い底へ転げ墜おちた。

が、幸いに彼の身体には例の毛綱けづなが結び付けてあるので、市郎は岩から墜おちる途端に、早くも綱に取付とりついてずるずると滑り墜おちると、二三間げんにして又もや扁平ひらたい岩の上に止とまつた。横さまに跪ひざまずいて倒れたので、左の膝を少しく痛めたが、差したることでも無いらしい。彼は疼痛いたみを忍んで直すぐに起き上あがつた。其片手そのには消えた蠟燭を後生大事に握にぎっていた。

斯^かくして彼は父の死骸から遠ざかつて了^{しま}ったのである。引返^{ひっかえ}

そうにも足がかりが見出されぬ。降りる方は比較的容易であつたが、登るのは余^よほど困難であるらしい。斯^こうなるからは寧^{いっ}そのこと、どん底まで真^ま直^{すぐ}に降りて行つて、彼^かのお杉の安否を確^ため^{しか}た方が優^{まし}かも知れぬ。ええ、何^どうなるものか、行ける所まで行つて見ると、一種の自棄^{やけ}と好奇心とが混^{まじ}つて、市郎は更に底深く降りることに決心した。それに付けても唯一の味方は蠟燭である。彼は又もや燐寸^{まっち}を擦^{すり}付^つけようとする時、人か獣か何か知らぬが、巖^いを跳越^{はねこ}えてひらりと飛んで来た者がある。

身を躲^{かわ}す間もあらばこそ、彼^かの怪物は早くも市郎の前に飛込^{とびこ}んで来て、左の外股^{そとも}の辺^{あたり}を礎^{はた}と打った。敵は兇器を持つているら

しい、打たれた所は唯ただならぬ疼痛いたみを感じて、市郎は思わず小膝を突いた。「わろか。」と、此この刹那たちまちに市郎は忽に悟ったが、敵が余りに近く薄せまつているので、火を点つける余裕が無い。彼は右の足を働かして強く蹴ると、敵は足下あしもとに倒れたらしい。暗黒くらやみで固もとより見当は付かぬが、市郎は勝つに乗つて滅多矢鱈めつたやたらに蹴飛ばす中に、靴の尖さきには応こたえがあつた。敵は猿のような声を揚げてきやツと叫んだぎりで霎時しばらくは動かなかつた。

この隙を見て、市郎は忙いそがわしく燐寸まっちを擦すつた。蠟燭の火の揺ゆめく影を便宜たよりにして、先まず此この怪物の正体を見定めようとする時に、一人の男がぬツと其その眼前めさきへ現われた。市郎は悸然ぎよつとして熟視よくみると、これは では無いらしい而しかも とは大差ない程に見ゆる下

級労働者らしい扮装で、年の頃は五十前後でもあろう、髪を長く
 伸のびして、尖とがった顔に鋭い眼を晃ひからせ、身には詰襟つめえりの古洋服の破
 れたのを着て、足には脚絆きやはん草鞋わらじを穿はいていた。其扮装そのいでたちを見て
 察するに、近来この土地へ続々流れ込んで来る坑夫どかたか土方の仲間
 らしい。

「私わたしは

じやアありませんよ。御安心なせえまし。ははははは。」

男は笑いながら馴なれなれ々々しく近寄つて来たが、市郎は容易に油断

しない、蠟燭を突き付けたままで其顔そのを屹きつと睨にらんでいた。

「はここに居まさあ。御覧なせえまし此この醜態ぎまだ。」

男が笑いながら指さす我が足下あしもとには、何さま異形いぎようの者が倒れ
 ていた。先夜トムを殺した奴と確たしかに同種類に相違ない。赭土色あかつちいろ

の膚で、髪はだの長い、手足の長い、爪の長い、人か猿か判らぬような怪物である。彼は市郎の靴で額の真向まっこうを蹴破きられたと見えて、濃どすくろ黒いような鮮血なまちが其凄愴そのものすごい半面を浸ひしていた。

併しかし彼は死んだのでは無かつた。其の眼前めさきに蠟燭の火を差さしつ付けられると共に、又もやきやツと叫んで跳ね起きて、血だらけの顔を抱えながら岩から岩へ、何処どこへか飛んで行つて了しまつた。

斯かくして真実ほんとうのは逃げ去つたが、類似の怪しい果まげ眼の前に残つてゐる。此男このは果はたして善か悪か、敵か味方か、市郎も其判断そのに苦くるんで佇立たたずんでゐると、男は愈いよ馴なれなれ々しい。

「旦那、御心配なせますな。なんて云うものは、意気地のねえ奴ですから、もう蒐かつて来る気配きづかいありませんよ。はははは。」

彼は勇士である。人の恐るる山　　を物屑かずとも思っていないらしい。

(三十二)

何しろ、得体の判らぬ男であるが、何時いつまで睨み合っている間際はてしがないと、市郎の口も解ほぐれ初めた。

「お前さんは此穴このに棲すんでいるのか。」

「そうじゃありませんが、大抵勝手は心得ていますよ。」

「底までは未だ余まよほど遠いかね。」

「何、もう直すぐです。御覧なせえまし、唯たつた三四間けんの所でさあ。」

蠟燭を照して視ると、底は近い。獣の牙のような大小の岩が聳そびえていた。

「今、人が墜おちたんだが……。 」と、市郎は伸上のびあがって底を覗くと、男は首肯うなずいた。

「もう少し前に、上から墜おちて来た者がありましたよ。 かわらつていたが、然そうじゃ無かつたか知ら。」

男は先に立って岩を降りた。市郎も続いて降りた。やがてどん底まで辿り着くと、果して其処そこにお杉の死骸が倒れている。彼女かれは牙のような岩と岩との間に挟まれて、さながら巨大おおなる野獣に咬まれたような形で死んでいた。

男は少しく眉を顰ひそめて、お杉の死顔を凝じつと眺めていた。市郎は

念の為に脈を取って見たが、これも手当を施すべき依頼は切れて
いた。

「一体、この女は何うして墜ちたんだろう。旦那は此女を御存知
ですか。」

善悪判らぬ此男このに対して、市郎は真を語らなかつた。

「さあ、僕も知らない。僕は唯この窟を探険に來たのだ。」

「じゃア、書生さんだね。」

「まあ、然うさ。」

こんなことを云っている中に、市郎は漸次に足の疼痛を感じた。
今までは気が張っていたので、何も彼も殆ど夢中であつたが、曩
に岩の上へ転げ墜ちた時に彼は左の膝を痛めた。続いて　の為に

左の股ももを傷きけられた。加之しかも二度目の傷は刃物で突かれたと見えて、洋袴ずぼんに滲にじみ出る鮮血なまちの温あた味たかみを覚つえた。究竟つまり彼は左の片足に二ヶ所の傷を負っているのであった。

父の行方ゆくも探し当て、お杉の生しょう死しも確たしかめ得たので、彼も今は氣が弛ゆるむと共に、市郎は正しく立つに堪たえられなくなつて来た。跛足びつこを曳ひきながら傍かたえの岩角よろに跟よ躑ろけかかつて、倒れるように腰おろを卸おろした。男も其側そのそばへ腰をかけた。

「旦那は何どうか為なすつたんですか。」

「些ちつと怪我けがをした。」と、市郎は顔を皺しかめて、「そこでお前さんに頼たのみたいことが有あるんだが……。僕は此この通り、足を痛いためていいるんで到底とて歩もけそうもない。お前さんは此處ここの勝手を知しっている

と云うなら、後生だから僕の家まで行つて来て呉れないか。而して、僕がここに居るから迎いに來て呉れと……。」

「旦那の家は遠いんですか。」

男は余り氣の進まぬような返事であつた。市郎は衣兜の紙入から紙幣を探り出して、黙つて男の手に渡すと、彼は鳥渡頂いて直に我が洋袴の衣兜へ捻込んで了つた。

「じやア、行つて来ましょう。旦那のお宅は何方です。」

「この山を降りて樅の林を抜けると、町は直に見える。僕の家は角川と云うんだから、町で訊けば直に判る。」

角川と聞いて、男の顔色は少しく動いた。市郎の顔を再び覗いて、

「あなたは角川の若旦那ですかい。」

「むむ。僕は角川の倅だ。」

「へえ、そうですか。」と、考えて、「大旦那はまだ御健康で
すかい。」

「え、お前さんは僕の親父を知っているのか。」と、市郎は不審
の眼を^{ひか}晃らせると、男は^{たちまかしら}忽ち頭を^ふ掉った。

「いいえ、お目にかかったことは有りませんが……。何しろ、そ
れじゃ^{すぐ}ア直に行つて来ましょうよ。」

「何分頼むよ。」

「よろしい。待つてお^{いで}在なせえまし。」

男は口早に、身輕に^{たちあが}起上つて、衣兜^{かくし}から新しい手拭を^と把つて

頬ほ包おかむりした。

「旦那、この綱は大丈夫ですかい。」

「むむ、上の岩に緊しつかり乎結び付けてある。」

市郎は自分の胴に巻いた毛綱けづなを解といて、傍かたえの岩角に結び付けると、男は之これに縋すがつて登り初めた。かれは鉾山生活に慣れているらしい、手は綱に縋り、足は岩に踏みかけて、案外無造作にするすると登って行った。穴の入口に達した時に、彼は下に向って声をかけた。

「旦那、行つて来ますよ。」

虎ヶ窟に於て是^{これ}ほどの事件が 出^{しゅつ}来^{たい}している間に、彼^かのお葉と重太郎とは、何^{どこ}処に何をしていたであらう。二人に関する昨夜以来の成^{なり}行^{ゆき}を、こ^こで簡^{かん}短^{たん}に説明せねばならぬ。

前にも記す如く、お葉は自分にも判らぬ心理状態の中^{うち}に此^この山^やまな^まか^いい^ざな^な中^{ちゆう}へ誘^いわれ、此^この窟の奥に囚^しまれて了^{しま}つた。重太郎と山^{やま}と^{わろ}は夜の更けるまで歸つて来なかつた。

「妾^{あかし}は何^どうして斯^こんな処へ来たんだらう。」と、時の経つに従つて、お葉は夢から醒めたように考えた。今日一日のお葉は、自分ながら何^どが何^どうしたのか殆ど判断が付かなかつた。或^{ある}は酔^いい、或^{ある}は醒^あめ、或^{ある}は夢^いみ、自^あ分^{たま}の頭^{あたま}脳^いろは種^いろ^ろ々の混^き乱^{らん}を来^{きた}した末に、お

杉婆しばあの威嚇的命令の下もとに重太郎の嫁たるべく約束した。が、考
 えて見ると斯こんな馬鹿馬鹿しいことは無い。妾めかけは氣でも狂ちがつたのか
 知らと、お葉はつくづく自分の馬鹿馬鹿しさに愛想あいそを竭つくした。
 で、何は扱さて措さいても、斯こんな処に長居すべきでない。自分は東
 京深川生れのお葉さんである。自分の身状みじようが悪い為ために、旅から
 旅を流れに渡つて、「行くにや辛い」と唄うたにまで謳うたわるる飛驒ひだの
 山家やまがに落ちて来たが、それでも自分には自分の生命せいめいが有る、自
 分には自分の恋が有る。こんな山奥へ引摺ひきずり込まれて、人だか
 だか判らぬような怪物共ばけものどもの玩弄おもちゃにされて堪たまるものか。他面ひと白
 くもない、好加減いいかげんに馬鹿にしろと、彼女かれは持前の侠肌きやんを發揮し
 て、奮然たもと袂たもとを払はつて起たつた。

が、お葉も流石に彼のお杉婆に對しては、何となく不氣味の感
が無いでもなかった。窟の奥から窺と抜け出して、先ず表の有
様を偷み視ると、夜は既う更けたらしい、山霧は雨となつて細
かに降っている。お杉は消えかかる焚火を前にして、傍の岩に瘦
せた身体を凭せかけたまま、さながら無言の行とでも云いそうな
形で晏然と坐つていた。生きてゐるのか、死んでゐるのか、眠つ
てゐるのか、起きているのか、一向に見當が付かない。

捉まつたら其れまでと度胸を据えて、お葉は拔足をして外へ出
た。お杉婆は身動きも為なかつた。お葉は折柄の雨を凌ぐ為に、
有合う獣の皮を頭から引被つて、口には日頃信ずる御祖師様の
題目を唱えながら、蹠音を偷んで忍び出た。

それから一時間も過ぎた後に、重太郎が帰つて来た、山　も帰

つて来た。彼等は山やまづた蔦で引縛ひっくくつた角川安行を抱えていた。

「阿母さん、阿母さん。」
おつか

重太郎が呼んでもお杉は答えなかった。重太郎は先まず窟の奥へ駈け込んだが、霎時しばらくして狂気の如く飛んで来た。

「阿母さん、お葉は……。お葉は何処どこへ行つた。」と、彼はお杉の腕を掴んで、力任せに引摺廻ひきずりした。

「何、お葉が居ない。」と、お杉も初めて眼を睜みひらいた。

「阿母さん、寝ていたのか。」

「例いつもの通り、眼を瞑つぶつて神様に祈っていたのさ。」

「そんなら判りそうなものだ。お葉は居ない、お葉は逃げた。」

重太郎は足摺あしずりして泣き出した。

「お葉が逃げた……。」「と、母も眼を晃ひからしたが、「心配お為しでない。何処どこへ行くものか。家うちへ帰ったら又連れて来るから……。」と、さびしく笑っていた。

「何日いつ連れて来て呉くれる。」

「明日あしたでも、明後日あさってでも……。」「

十日の中うちには死ぬと予言したお杉婆ばばあにも、流石さすがに明日あしたの自分の運命は判らなかつたと見える。彼女は沈着おちつき払はらって我子を慰めた。が、若い血の燃ゆる重太郎には、明後日あさっては愚おろか、明日あしたをも待たれなかつた。彼は宛さながら狂える馬のように跳おどり上あがつた。

「否いやだ、否だ。今夜中に連れて来て呉くれ。」

「でも、今夜は^{いけな}不可い。^{あたし}妾は他に用が有る。明日までお待ちよ。」
 重太郎は^も既う耳にも入れなかつた。これから直^{すぐ}にお葉の行方を追^{つもり}う意であらう、彼は旧来^{もと}し方^{かた}へ直^{まっしぐら}驀地に駈けて行つた。

(三十四)

お葉は虎ヶ窟^{こく}から虎口^{こう}を逃れた。

逃れたのは嬉しいが、^{さてそのさき}扨其先に種々^{いろいろ}の困難^{よこた}が横わつていた。
 路^{みち}は屢々^{しばしば}記す通りの難所^{なんじよ}である、加^{しか}之^かも細雨^{こさめ}ふる暗夜^{あんや}である。
 不知^{ふちあんない}案内の女が暗夜に此^この難所を越えて、恙^{つつが}なく里へ出られるであらうか。

けれども、今はそんなことに頓着する場合で無かつた。お葉は唯ただ無闇に行手を急いだ。昼ならば一度越えた路に就つて、多少の心覚えや目め標じりしも有つたか知らぬが、真暗黒では何が何やら些ちつとも判ろう筈が無い。同じような岩や、同じような谷や、同じような坂が、そこにも此処ここにも路を遮さえぎつて、彼女かれを遣やらじと抑留ひきとめるようにも思われた。

「死んでも構うものか」

お葉は覚悟を極きめた。見わろたような奴等の玩弄おもちゃになる位ならば、寧いっろ死んだ方が優ましである。彼女かれは足の向く方へと遮二無二と進んだ。其その勇氣は健氣けなげとも云うべきであつたが、此種このの冒険は氣の強いばかりでは押通おしとおせるものでない。獵かり夫ゆうどや樵夫きこりの荒く

れ男ですら之を魔所と唱えて、昼も行悩む三方崩れの悪所絶所を、女の弱い足で夜中に越そうと云うのは、余りに無謀で大胆であつた。

彼女は裳を高く褰げて、足袋跣足で歩いた。何を云うにも暗

黒で足下も判らぬ。剣なす岩に踏み懸けては滑り墜ち、攀上

つては転び落ちて、手を傷け、脛を痛めた。況て飛驒山中の冬の

夜は、凍えるばかりに寒かった。霧に似たる細雨は隙間もなく瀟

々と降頻つて、濡れたる手足は麻痺れるように感じた。

併し彼女は飽までも強情であつた。倒るるまでは進むという覚

悟で、方角も知らずに起きつ転んづ、盲探りに辿つて行くと、

兎も角も普通の山路らしい処まで漕ぎ着けた。東に迷い、南に迷

い、彼女^{かれ}は実に幾時間を費したか知らぬが、人の一心^{いっしん}は怖いもので、何うやら斯うやら彼の難所^{なんじよ}を乗切^{のりき}つたらしい。

ここまで来ると、流石^{さすが}のお葉も寒氣^{かんき}と疲労とに堪え兼ねて、唯^とある大きな岩の蔭に這い寄つたが、再び起ち上る元氣は無かつた。彼女^{かれ}は殆ど夢のように倒れて了つた。

雨は何時^{いつ}か降歇^{ふりや}んで、其夜^{そのよ}も明け放れた。暁^{あかつき}の霧は晴れて、朝日は昇つた。父を尋ぬる市郎も、同じ時刻に此^この山路^{やまみち}へ迷い入つて、或^{あるい}は此^このあたりを過ぎたかも知れぬが、お葉は遂に見出されず^{しま}に了つた。

ここで市郎に見出されたら、お葉は何んなに幸福であつたらう。ここで重太郎に見出されたら、お葉は何んなに不幸であつたらう。

飽^{あく}までも運の悪いお葉は、第二の籤^{くじ}を取らねばならぬ不幸に陥^おつた。彼女^{かれ}はここで重太郎に見出されたのである。

重太郎はお葉の跡を追つて、これも東西の嫌^{きら}い無しに山中^{やまじゅう}を駈^ひけ廻^ひつたが、容易に女を捉え得なかつた。嶮^{けんそ}岨に馴^なれたる彼は、飛^ひぶが如くに駈^{かけ}歩^{ある}いて、一旦は麓^{ふもと}まで降^ふつたが又思い直^ひして引^ひ返^{つかえ}した。お葉は矢^やはり山中^{さんちゅう}に迷^{まよ}つていると信^{しん}じたからであらう。斯^かくて此^{ここ}処^{そこ}よ其^そ処^{そこ}よと捜^{さが}し廻^{まわ}る中^{うち}に、夜が明^あけた。彼は目眩^{まぼゆ}き朝日の光を避^さけて、岩の蔭^{かげ}を縫^ぬつて歩いていると、不^ふ図^と我眼^{われがん}の前^{まえ}に白^{しろ}い物の横^{よこ}わつてい^{よう}るのを見^み付^つけた。

「お葉だ、お葉だ。」と、重太郎は跳^{おど}つて近^{ちかづ}いた。

彼は半死半生のお葉を抱^{おこ}え起^{おこ}して、霎^{しばし}時は飽^あかず^しに其^{その}顔^{かほ}を眺^{なが}め

ていたが、やがて傍かたえの谷間の清水を掬すくい取って、女の口に注そそぎ入れた。死んだ方が寧いっそ優ましのお葉は、不幸にも又蘇いき生かえったのである。

気が注ついて見ると、自分の手は獣のような重太郎に握られていた。驚いて振放ふりはなして起上おきあると、重太郎は再び其手そのを掴んだ。

「お葉さん。何故逃げるんだ。お前は俺おらの女房になるという約束じゃアないか。」

「馬鹿にしてるよ。」と、お葉は蒼い顔を瞋いからして、眼を吊上つりあげた。

「だって、昨夕ゆうべ約束したじゃアないか。」

「知らないよ。昨夕は昨夕、今日は今日さ。昨夕は雨が降っても、

今日はお天気になるじゃアないか。」

「じゃア、俺おらの女房にはならないのか。」

「知れたことさ。」

お葉ののしは罵るように答えた。

(三十五)

獣のような重太郎と相あいた対たいしているお葉は、頗すこぶる危険の位置にあると云わねばならぬ。彼かれの情じょうが激しょうして一旦そ其の野性を發揮した
ら、孱弱かよわい女に対して何どんな乱暴を敢あえてせぬとも限らぬ。

お葉もそれを知らぬでは無かつたろうが、彼女かれも或時には其その

野性を遠慮なく發揮する女であつた。或時には坑夫や土方を客にして、負けず劣らずに乱暴比べをする程の勇氣を有つていた。彼女は大抵の男を恐るるような女では無かつた。昨日彼のお杉に対して殆ど絶対的の服従を敢したのは、自分にも判断の付かぬ一種不可思議の心理作用に因つた為で、醒めたる後の彼女は依然として強い女であつた。

況てお杉はここに居ない。わが目前の敵は重太郎一人である。たとい這奴が山の同類にした所で、一人と一人との勝負ならば多寡の知れたものである。罷り間違つたらば、其の喉笛にでも啖い付いて与るまでのこと。勝負は時の運次第と、彼女は咄嗟の間に度胸を据えて了つた。

あいて
こ
対手が斯ういう覚悟で居ようとは、重太郎は夢にも知らぬ。彼

は母に甘える小児しょうにのような態度で、飽あくまでもお葉に附纏つきまとった。

「お葉さん。お前、何どうしても俺おらの嫁になるのは忌いやか。え、お葉

さん。後生だから承知して呉くれないか。俺おらア斯こんな山の中に棲ん

でるけれども、善いい宝たからもの物を沢山有もっているんだ。」

お葉は唯ただ冷あざわ笑うのみで、見向きも為しなかつた。

「お葉さん、真ほん実とうだよ、決して嘘じやアない。俺おらア昨日きのう……い

や、一昨日おととい……阿母おつかさんから大事の宝物ありかの在所を教わったんだ。

それを持出もちだして他ひとに売れば、一足飛いっそくびに大変な金持になれるんだ。

俺おらも能よく知らないが、其その宝物たからものというのは実に立派なものだ。真ま

聞きこな処でもぴかぴか光って……。何だか斯こう……。」「

山育ちの彼は、之これを形容すべき適當ことばの詞を知らなかった。重太郎は徒爾いたずらに眼を瞠みはり、手を拡げて、其その尊とうとき宝であるべきことを頻しきりに説明し為ようと試みた。

「そんな立派な宝物がありやア其それで可いじやアないか。お前さんが金持になりやア、何どんな良いいお嫁さんでも貰えるんだから、妾あたしなんぞに構くつてお呉くれでないよ。」

お葉は相変らず鼻で扱あしらつていたので、重太郎は愈いよ急いいた。

「だから、お前に頼たのむんだ。俺おらが金持になるから、お前を嫁に貰もらいたいんだ。何日いつだったか忘れたが、雨のふる日の夕方に、俺が町ちやうどへ食物あじものを獵あさりに出て、柳屋の門かどぐち口に立たつて彷徨うろしている、酒に酔った奴等が四五人出て来て、此この乞食あつちめ、彼地へ行けと俺

を突き飛ばした。口惜いから撲つて与ろうと思つたけれども、対
手が^{いて}大勢だから我慢していると、そこへお葉さん、お前が出て来
たんだ。」

彼は其の^そ当時の光景^{ありさま}を思い^{うか}泛べたらしい、今更のようにお葉
の顔を^そしげしげと眺めた。

「而して^{そう}お前が大きい声で、お止しよ、そんな可哀想なことをす
るもんじゃアない。其人^{その}は妾^{あたし}の可愛い人なんだから……。ねえ、
お葉さん。お前は然^そう云つたろう。俺は其^{その}時に確^{たしか}に聞いた。其^{その}晩、
俺は窟へ帰ると、お前と夫婦になつた夢を見たんだ。それから……
：それから俺は、何^どうしてもお前と夫婦になる氣になつたんだ。
ねえ、お葉さん。判つたろう。俺は毎晩お前を夢に見ていたんだ

。一

然そう云いわれると、此方こつちに記憶おぼえが無いでもない。成なるほど過日いつかそん

なことも有あった様ようである。が、それは固もとより酒の上の冗談に過ぎ

ないのを、世間知らずの山育ちの青年わかものは唯一ただいち図ずに真実ほんとうと信じ

て、此こに飛とんでもない恋の種を播まいたのであろう。対手あいてに因よつては迂う

潤つかり冗談も云えぬものだ、お葉は今更のように思い當あつた。

山 同様の分際で、深川生れのお葉さんに惚れるとは、途方も

ない贅沢な奴だと、今の今までは馬鹿馬鹿しくもあり、腹立はらだたし

くもあつたが、斯こうなつて見ると自分にも罪が無いでもない。嘘

にもしろ、冗談にもしろ、自分は重太郎を可愛い人だと云つた。

で、対手あいての方でも自分を可愛い人だと思おもい染つめた。究竟つまりは無心の

小児こどもに對むかつて菓子やを与からふと戯たつた為にに、小児こどもは本氣まことになつて是非こ呉くれろと強請ねだつて來たような理屈こである。對手あいてが世間よこを知らぬ小児こども同様の人間にだけに、斯こうなると誠まことに始末しまつが悪い。

(三十六)

お葉はが黙もくつて考かんへてゐるので、重太郎しげたろうは又もや迫せまり寄よつた。
「ねえ、お葉さん。お前は俺おらが髪かみをこんなはやに生はしてゐるので、忌いなのいか。それから……こんな獸類けだものの皮かわを被きてゐるので、忌いないのか。髪かみは今いまでも直すぐに切きるよ。衣服きものは……金持きんもちになれば直すぐに良いいい衣類きものを買かつて被きるよ。お前まへにも最もツと良いいい衣類きものを被きせて与やる。それ

から……山に棲んでいるのが忌なら、お前と一所いっしょに町へ行く。

何処どこへでも行く。ね、可いいだろう。ね、それから……。」「

云わんとすることは未だ種々いろいろたまたま疊たまっているらしいが、山育ちの

悲しさには彼の口が自由に廻らぬ。重太郎は唾おしどもりか呷なのように、半

は身振や手真似で説明しながら、其その切なき胸を訴えているので

ある。普通の人から見れば、彼は野蠻である、兇暴である、殆ど

わろけんぞくの眷属である。が、彼は決して所謂いわゆる悪人では無かった。彼

が獰猛野獸の如きは其そのひと人境遇の罪で、其そのひと人自身の罪では無か

った。

そんな理屈までは思い及ばぬにしても、お葉は氣の強いと共に

涙脆もろい女であつた。種々いろいろ考えると、最初はじめは唯憎ただいと思つていた

重太郎其^{そのひと}人も、今は漸^{だんだん}々に可哀そうにもなつて来た。先刻^{さつぎ}からの様子を見ると、彼は飽^{あく}までも無邪気である。彼は極めて明白に、正直に、自己^{おのれ}の詐^{いつわ}りなき恋を語っているのである。

形は人か猿か判らぬような青年^{わかもの}ではあるが、彼の恋は深山^{みやま}の清水^{しみず}の如く、一点^{いってん}人間の塵^{ちり}を交えぬ清いものであつた。お葉も其^その誠には動かされた。が、此^この返事は何となろう。

「お前さん、堪忍してお呉^くれよ。」

お葉は重太郎の手を把^とつて泣いた。

「じゃア、嫁になつて呉^くれるかい。」

「それが不可^{いけな}いから謝^{あやま}るんだよ。妾^{あたし}は何^どうしてもお前さんのお嫁にやアなれないんだから……。」

重太郎は黙つて眼を^{ひか}晃らせた。

「だから、堪忍してお呉^くれと云うんだよ。」と、お葉は^{すか}賺すように重ねて云つた。

「何^な、何故^{なぜ}だ。」と、重太郎は息を^{はず}喘ませて詰^{つめ}寄つた。

何故と聞かれると返事に困るが、お葉も重太郎と同じように片思いの恋が有る。重太郎の片思いが哀れであると共に、お葉の片思いも哀れであつた。彼女は^ど何うしても^か彼の市郎を思い切れぬのである。

「お前さんは可哀想な人だねえ。」と、お葉は我身につまされて嘆息した。

「可哀想なら、嫁になつて呉^くれないか。」

重太郎は飽^{あく}までも無邪氣であつた。可愛いと可哀想とは其^{その}間に少^すしく距離のあることを、彼は未^まだ理解し得なかつた。お葉は重太郎を可哀想だとは思つたが、其^{その}同情が變じて恋とはならなかつた。

「どうしても忌^{いや}か。俺^{おら}が斯^こんなに云つても肯^きいて呉^くれないのか。」と、重太郎は泣かぬばかりに口説いた。

「堪忍してお呉^くんなさいよ。」と、お葉は泣いて答えた。

「だから、何故だと云うのに……。」

以前のお葉ならば、「お前が忌^{いや}だからさ」と、木て鼻を括^{くく}つたように情^{すげ}なく断つたかも知れぬ。が、今は然^そうでない。彼女^{かれ}は優しく重太郎の手を把^とつた。

「ねえ、お前さん。妾は決してお前を嫌う訳じゃアない。それほ
どに妾を思つて呉れるのは、真実に嬉しいと思つてゐる。だが、
困ることには、妾にも思つてゐる人があるんだから……。どうし
てもお前のお嫁になることは出来ないんだから、何うぞ諦めてお呉
んなさい。ね、判つたかい。決してお前さんを嫌うんじゃないよ。
世間に女は妾一人じゃアない。お前が真実に金持になれば、ど
んな良いお嫁さんだつて貰えるんだから……。妾よりも若い、最
つと綺麗な人がお内儀さんに能るんだから……。」

重太郎は頭を掉つた。其眼には熱い涙を湛えていた。

「判らないの。」と、少しく持余したようなお葉の声も湿んで
聞えた。

可哀想ではあるが、何時^{いつ}までも際限^{はてし}が無い。お葉は捉^とられたる袂^{たもと}を払^はつて、

「じゃア、左様^{さよ}なら。」

重太郎は追掛^{おいか}けて、又其^その袂^{たもと}を捉えた。

(三十七)

お葉を追ひ捉えた重太郎は、定めて破れかぶれの乱暴^{らんぼう}を始めるかと思^{おも}いの外^{ほか}、彼は矢^やはり温順^{おとなし}い態度であつた。が、其^その湿^{うる}んだ眼は一種異様に輝^{きら}いていた。

「お葉さん。どうしても帰^{かへ}るのか。」

「今も云つたような訳だから……。」

「どうしても帰るのか。」と、重ねて念を押した重太郎の声には、低いながらも力が籠つていた。

彼も恐く最後の決心を固めたかも知れぬ。涙の眼は漸次しだいに乾いて、険しい眉の間に殺気を含んで来た。物を奪い、人を殺す位ぐらいのことは、彼等の仲間では別に不思議の事でもない。

お葉も其その眼色めいろを早くも悟つた。

「お前さん、妾あたしを殺す気かい。」

重太郎は黙つていた。

「殺すなら殺しても可いいよ。だが、力づくで乱暴を為しようと云うなら、妾にも料見があるから……。」

重太郎は黙っていた。

「だから、素直にお帰りよ。」

重太郎は矢^やはり黙っていた。が、やがて傍^{かたえ}の岩蔭^{そび}に聳^{そび}えたる山椿^{つばき}の大樹^{おおい}に眼^めを注^つけると、彼は忽^{たちま}ち猿^{さる}のように其^その梢^{さへ}にするすると攀^{よじのぼ}登^{のぼ}った。南^{みなみむき}向^{むか}の高い枝は既に紅^{つばき}い蕾^{つぼみ}を着^きけているので、彼は其^その二^{ふた}又^{また}の枝^{えだ}を扨^{えら}んで折^をった。

何^どうするのかと見ていると、重太郎は其^その枝^{えだ}を口^{くち}に啣^{くわ}えてひらりと飛び降りたが、物^{もの}をも云^いわずお葉^はの前^{まえ}に歩^あみ寄^よって、二又^{ふたまた}の枝^{えだ}を股^{もも}から二^{ふた}つに引^ひ裂^きくと、何方^{どっち}の枝^{えだ}にも四五輪^{ごしゆん}の蕾^{つぼみ}を宿^{しゆく}していた。彼は其^その一^{ひと}枝^{えだ}をお葉^はに渡^{わた}した。お葉^はも黙^{もく}って受^う取^けった。

二人は黙^{もく}って各^{めい}自^{めい}の枝^{えだ}を眺^{なが}めていた。

「取替とりかえて貰おう。」と、霎時しばらくして重太郎は自分の枝を出した。お葉も自分の枝を出した。春待顔はるまちがおに紅い蕾を着けた椿のふたえだ一二枝は、二人の手に因よつて交換されたのである。

重太郎はお葉の枝を我が胸に犇ひしと押当おしあてた。お葉は重太郎の枝を我が袖に抱いだいた。重太郎の眼には涙が見えた。お葉も何とは無しに悲しくなつた。

「じやア、もう帰りますよ。」

重太郎は無言で首肯うなずいた。市郎が窟にあると知つたら、お葉は無論引返ひつかえしたのであろうが、そんなことは夢にも知らなかつた。

重太郎も知らなかつた。飛驒山中の寒い朝あした、哀れは同じ片思いの男と女は、温かい涙を形見の花に灑そそいで別れた。

重太郎は潔いさぎよくお葉を思い切ったのであろうか。彼はお葉から受取うけとった椿の枝を大事に抱えて、虎ヶ窟かたの方へ悄しおしお々と引返ひっかえした。

昨夜彼さくやがわろと共に山を降つて、七兵衛と闘い、安行を奪うばつたのは、市郎に對する恋の恨うらみと母の恨とであつた。が、そんなことは既もう忘れて了しまつたらしい。重太郎は唯ただこの形見の枝を保護するこゝとにのみ屈託して、夢のように岩石の間を辿つた。

窟の前に来ると、母の姿が見えぬ。少しく怪あやしんで内を覗いたが、奥にもお杉の姿は見えなかつた。

「阿母おつかさん、阿母さん。」

彼は続けて呼んだ。この途端に窟の奥から一人の見馴れぬ男が

飛んで出た。これは前に記した通り、市郎の使を頼まれて、穴の底から登つて来た坑夫体の男である。

二人は恰も入口で礮と出逢つた。

「誰だい、お前は……。」

重太郎は眼に角立てて詰つたが、男は急いているのであろう、返事もせずに駈け出した。窟には母の姿が見えず、加之も怪しい男が出て来たのであるから、重太郎の不審は愈よ晴れぬ。先ず飛び蒐つて男の腰に組付いた。

「お前は誰だ。」

「誰でも可いよ。煩せえ。」

男は突放して又駈出そうとした。

「お前は俺おらの阿母おつかさんを殺したのか。」と、重太郎は唖鳴どなった。

「そんなことは知らねえ。」

男は手暴てあらく重太郎を突き退けると、彼は椿の枝を持ったままで地に倒れた。これで黙っている重太郎ではない、椿の枝を口に啣くわえて又跳ね起きた。此こに忽たちまち掴あみ合が始まった、上になり下になり、互たがいに転うげて挑うちみ争あう中に、何方どっちが先に足を滑らしたか知らず、二人は固ひつくく引組ひんだままで、傍かたえの深い谷へ転おげ墜おちた。

(三十八)

山椿の下では、お葉と重太郎との詩的な別離わかがあつた。窟の外

では、重太郎と素性の知れぬ男との蛮的な格闘があつた。こんな事件が続いてある間、市郎は暗い岩穴の底に取残されて、救いの人々の来るのを待っていた。

一本の蠟燭は漸次に燃え尽して、風なきに揺めく火の光は聴て其の消えんとするを示している。左したる重傷ではないと知りながらも、股と膝との疼痛は漸々に激しくなつて来た。疲労と空腹とは愈よ我を悩して来た。

「七兵衛は何うしたろう。彼奴等も途に迷っているのか知ら。それにしても使の男が早く行着いて呉れば可いが……。一体、あの男は何者だろう。土地不案内の為に、これも途中で迷つていられた日には、何時まで経つても際限があるまい。どうか一刻も早く

町へ出て貰いたいものだ。若し彼奴が不親切な奴で、金を貰いながら其儘どこへか行つて了つたら何うだろう。いや、真逆にそんな事もあるまい。」

甲から乙へと考えながら、市郎は硬い岩を枕に暫く寝転んでいた。

「もう何時だろう。」

懷中時計を取り出して視ると、先刻からの騒ぎで何時何うしたか知らぬが、硝子の蓋は毀れて針は折れていた。日光の視えぬ穴の底では、今が昼か夜か、それすらも殆ど見当が付かぬ。

待つ身の辛さは今に始めぬことであるが、取分けて今此の場合、市郎は待つ身の辛さと侘しさとを染々感じた。彼は何とは無し

に起き上あがつて、蠟燭を照てらしつつ四辺を見廻すと、四方の壁は峭きつた立ての岩石であるが、所々に瘤こぶのような突とつしゅつ出の大岩があつて、其その岩の奥には更に暗い穴があるらしい。

「わろこのは此穴に棲んでゐるんだろう。」と、市郎は首肯うなずいた。先刻さつき

自分きずつを傷けたも恐おそくあの穴へ逃げ込んだのであろう。一体、

彼かのなるものが何匹居るのか知らぬが若もし大勢が其そこ処かしこや彼か処この穴から現われて出て、自分一人を一度に襲つて来たら到底敵とてもかなわぬ。

彼は何等の武器を有もつて居なかつた。而しかも先夜の経験よつに因て、

彼等に対する唯一の武器は燐寸まっちの火であることを知つてゐるので、市郎は慌あわてて燐寸の箱あちを検あめると、剩あます所は僅わずかに五六本に過ぎぬ。

彼は先刻から燐寸を濫用したのを悔いた。

で、更に念の為に蠟燭を揚げて、高い岩の上を其処ここと照して視ると、遠い岩蔭に何か知らず、星のように閃く金色の光を視た。蠟燭の淡い光で熟くは判らぬが、兎にかく其処に一種の光る物があるらしい。こんな処だから何が棲んでいるか判らぬ。或は怪獣の眼かと市郎は屹と瞰上げる途端に、頭の上から小さな石が一つ飛んで来たが、幸いに身には中らなかつた。市郎は俄に蠟燭を吹き消した。敵の的にならぬ用心である。

「これも　の仕業だろう。」

斯う思うと中々油断はならぬ。市郎は小さくなつて岩の蔭に身を寄せた。つづいて第二の石が落ちて来た。今度のは余ほど大き

いと見えて、投げると云うよりも、寧ろ^{むし}転がし落したらしい。これに頭を打たれたら人間の最期である。

市郎も流石^{さすが}に肝^{きも}を冷して、愈^{いよいよ}小さくなっていると、又もや石をがらがらと投げ落す奴がある。敵は一人ではないらしい、大小の岩石が一時^{いちじ}に上から落ちて来た。何人^{なんびと}も此の石攻めに逢つては堪^たらぬ、市郎も実に途方に暮れた。頭の上では何とも形容^{てき}の能ぬ一種奇怪な笑い声が聞えた。石はつづいて落ちて来た。

「どうしたら可^よからう。」

此^このまま小さくなっているのも愚^ぐである。何とかして彼等を撃退する工夫はあるまいかと、市郎も苦し紛れに種々^{いろいろ}考えていると、わが傍^{かたわ}らにひらりと飛んで来た者があるらしい。め、近寄

つて来たなど、市郎は直ちに用意の燐寸まつちを摺すった。果して一人いちにんの敵は刃物を振翳ふりかざして我が眼前めさきに立つていた。

不意に燐寸の火に出逢つて、敵は例の如く立縮たちすくんで了しまつた。
 そのすき其隙を見て、市郎は我が足下に落ちたる大石を両手に抱えるより早く、敵の真向まっこうを目がけて力任せに叩き付けると、頭が割れたか顔が砕けたか、敵は悲鳴をあげて倒れた。

(三十九)

目前の敵を一人殪ひとりたおしたので、市郎は少しく勇気を回復した。敵もこれに幾分の恐怖おそれを作なしたか、其後そのごは石を降らさなくなつた。

が、彼等は何処どこに隠れているか判らぬ、又何時なんどき不意に近寄つて来るか判らぬ。斯こう思うと些ちつとも油断が能できぬので、市郎は絶えず八方に気を配っていた。

併しかしこんな不安の狀態ありさまで何時いつまでも続いていたら、結局自分は根負こんまけがして了しまうに決きまっている。先刻さつきから余よほど時間も経へつているだろうのに、救いの人々はまだ見えぬ。一旦は勝誇かちほこった市郎も漸次だんだんに心細くなつて来た。この上は依頼たのみにもならぬ救援すくいの手を待つてはいられぬ、自分一人の力で此この危険の地を脱出するより他はない。

「早く然そう決心すれば可よかつた。」

市郎は痛む足を踏み締めて、例の毛綱けづなを再び我が胴しかに緊しかと結び

付け、綱を力に精一杯伸び上つて、^{あが}傍の^{かたえ}高い岩に飛び付こうとしたが、^ど何うも足が自由に働かぬ。彼は飛び損じて又^お墜ちた。さらでも痛い足を更に痛めた。

「到底^{とてもいけな}不可い。」と、市郎は失望の声を揚げて倒れた。

この時、遠い頭の上で例の^{こんじき}金色の光が淡く閃いた。市郎は眼を^{さだ}定めて^{よくみ}熟視すると、穴の入口と覚しき所で何者か火を^{てら}照しているらしく、^{その}其光に映じて例の金色が見えつ隠れつ漂うのであった。

「^{さて}扨は救いの人が来たか。」

市郎は我を忘れて蹶^はね起きた。精一ぱいの声を^{ふりしほ}振絞つて、
「助けて呉^くれ。角川市郎はここに^{これ}いるぞ。」

声はあなたまで響いたらしい、上でも之に^{これ}応じて、「おうい。」

と、答えた。

市郎は重ねて呼んだ、上でも再び答えた。やれ可よし矣と安心する途端に、何処どこから飛んで来たか知らず、例の大石が磊がらがら々と落ちて来て、市郎の左の肱ひじを強く撃つたので、彼は堪たまらず横さまに倒れた。生きているのか死んで了しまったのか判らぬ、彼は既もう再び起き上あがらなかつた。

上では其そんなこととも知らないであろう。大勢が声を揃えて市郎の名を呼んでいた。其そのなか中には塚田巡査の錆さびた声も、七兵衛老翁じじいの破鐘われがね声ごえも混まじつて聞えた。

この人々は今や漸ようやくここへ辿り着いたのであつた。市郎が単身登山の途とに就いた後のち、七兵衛は慌かないて家内の人々を呼び起おこしたが、

疲れ切っている連中は容易に床を離れ得なかつたので、彼等が朝飯を済まして、家を出たのは午前七時を過ぎていた。塚田巡查も町の若者も之これに加わつて、一隊十四五名の人数にんずが草鞋穿わらじばきの扮いでた装ち甲かい斐がいしく、まだ乾きもあえぬ朝霜を履ふんで虎ヶ窟を探りに出た。人々は用心の為に、思い思いの武器を携えていた。

巡查は窟の案内を心得ている筈であつたが、何どうしたものか路みちを踏み違えて、あらぬ方かたへと迷い入つた。それが為に意外の時間を費して、今や初めて窟の入口へ辿り着いた時には、一隊の多くは既に疲れ果てて、そこらに有あり合あう岩角に腰を卸おろして先まずほつと息を吐つく者もあつた。寒かん氣きを凌しのぐ為に落葉を焚く者もあつた。

けれども、巡查は流石さすがに屈しなかつた。七兵衛も頑丈であつた。

二人が先ず窟の奥へ潜り入つて、第二の石門まで仔細に検査したが、内には暗い冷い空氣が漲っているのみで、安行の姿も見えなかった。市郎の影も見えなかった。

「どうしたのだろう。」

二人は愈よ不安を感じて、そこらを頻に見廻す中に、彼等も例の岩穴を見付けた。念の為に用意の松明をあげて、真暗な底を窺っていると、下から救いを呼ぶ声が遠く聞えた。安行は知らず、兎にかく市郎だけは穴の底にいたことが確められた。

七兵衛は引返して斯くと報告すると、他の人々もどやどや入込んで来た。

「兎も角も降りて見よう。」

巡查は斯^こう決心して、再び四^{あた}辺に鋭い眼を配ると、岩角に結び
 付けられたる彼の^か長い毛^{けづな}綱を見出した。これを手^{たぐ}繰つたら、市郎
 の身体は無事に引^{ひきあ}揚げられたかも知れぬが、其^{その}綱の端が彼の胴に
 縛^{くく}られてあると云うことを誰も知らなかった。が、何^{なんびと}人の考^{かんが}え
 も同じことで、巡查も先^まず此^この毛^{けづな}綱に縋^{すが}つて、行かれる所まで行
 って試^みようと思^{おも}い付いた。

片手は綱に縋^{すが}り、片手は松^{たいまつ}明を把^とつて、塚田巡查は左右の足
 を働かせながら、足がかりとなるべき大小の岩を探りつつ、漸^{だんだ}
 次に暗い底へ降りて行^いった。他の人々は息を嚙^のんで其^{その}行動に注
 目していた。

(四十)

塚田巡查が穴を降るに就ては、市郎ほどの危険と困難とを感じなかつた。上に立つ大勢の人々は綱を操つて彼の行動を助け、且つ幾多の松明を振翳して、能う限りの光明を彼の行手に与えて居た。

巡查も亦大胆であつた。一条の綱を力として猶予なくするすると降りて行くと、彼は中腹の稍扁平い岩石の上に立つて、先ず彼の安行の死骸を発見した。驚いて其の手足を檢めると、既に数時間の前に縊切れたらしい、老人の肉も血も全く冷えていた。父が此の如き有様であるとすれば、其子の安否も甚だ心許ない

ものである。巡査は念の為に市郎の名を呼んだ。が、声は四方の岩に反響するばかりで、底には何の返答こたえもなかった。十分前までは頻しきりに救助を呼んでいた市郎が、俄にわかに黙しつて了しまつたのは不可思議である。これも若もしや何等かの禍害わざわいを蒙こうむつたのではあるまいかと、巡査は胸を騒がした。

此上このは一刻も早く底の底まで探らねばならぬ。巡査は安行の死骸を見捨てて、更に底深く降りて行くと、途中には所々とつしゆに突出した大小の岩が聳そびえて、天然か人工か知らず、其その岩の上には横に低い穴が開かれている。けれども、先を急ぐ巡査は其穴そのの奥を一々検査する暇は無かった。彼は唯真直ただまっすぐに降りて行つた。

やがて底近く来たと思う頃に、滔とうとう々たる水の音が凄まじく聞

えた。松明を振照^{ふりてら}して視^みたが水らしいものは見えぬ、恐^{おそ}く地の底を流れるのであろう、岩に激するような音が宛^{さな}がら雷^{らい}のように響いた。更に二間^{けん}ばかり降りると、自分の縋^{すが}っている綱の端^{はし}には何物か縛^くられているのを発見した。巡査は息も吐^つかずに急いで降りると、それは人であつた、彼の市郎であつた。

巡査は今や幾十尺の底に達したのである。先^{まず}其の綱を解^といて市郎を抱^{おこ}え起すと、彼も所^{しよ}々に負傷して、脈は既に止^{とま}つていた。が、これは確^{たしか}に血温^{けつおん}が有る。巡査は少しく安堵の眉を開いて、取^{とり}敢^{あえ}ず彼の綱を強く曳^ひくと、上では直^{すぐ}におうと答えた。

この時、巡査の足下^{あしもと}を距^さる一間^{けん}ばかりの所で、怪しい唸^{うなり}声^{ごえ}が聞えた。傷^{きず}いた野獸^{きずつ}が喘^{あえ}ぐようである。松明をそなたへ向けて

窺うと、岩を枕に唸っているのは、半面血塗れちまぶの怪しい者であつた。人か猿か判らぬ。「これが所謂山いわゆる だな。」と、巡査も悟つた。で、猶能く其正体なおよ そのを見届ける為に、其傍らへ一歩進み寄ろうとする時、頭の上から大きな石が突然転げ墜ちて来た。巡査は慌てて飛退くと、石は傍の岩角かたえに中つて、更に跳ね返つて彼のかの上に落ちた。
 傷ける顔は更に微塵きずつ みじんに碎けて、怪しい唸うなりご声は止んだ。

併し彼の大石は自然に落ちて来たのか、或は故意に投げ落したのか、巡査には早速の判断が附かなかつた。若し故意であるとするれば、四辺あたりには 同類なおいそ猶潜んでゐるに相違ない。巡査は再度の襲撃を避ける為に、慌てて我が松明を踏み消した。

穴の底は再び旧もとの闇に復かえつた。遠い地の下を行く水の音が聞えるばかりで、霎時しばしは太古の如ごとくに静しずかであつた。

下の松明ぼんが俄にわかに消えたので、上の人々は又もや不安に襲われた。七兵衛を始め、一同が声を揃えて、おういと呼んだ。が、巡査は容易に答えなかつた。迂濶うかつに叫ぶと、其声そのを便宜しるべに何処どこからか岩石を投落なげおとされる危険を懼おそれたからである。

そうとは知らぬ人々は愈いよいよ不安の念に駆られて、手に手に松明を振翳ふりかざしつつ穴の底を窺うかがつたが、底の底までは到底達とてもとどかぬ。この上は更に第二の探検隊を降くだすより他は無かつた。

「可よし、俺おらが降りて見る。」

六十に近い七兵衛老爺じじいが手に唾つばきして奮然と起たつを見ては、若い

者共も黙つては居られぬ。皆口々に、「老爺じいさんは危ねえ、私等わしらが行く。」と、遮り止めた。さえぎとどが、此この毛綱けづなを伝つて降りると云うことは余り安全の方法でない。

「何か可いい物はあるまいか。」

飛驒やまびとの山人は打寄うちよつて、この国特有の畚ふごを作ることを案じ出した。

(四十一)

飛驒ふごの畚渡わたしは、昔から絵にも描かかれ、舞台にも上のぼされて甚だ有名である。河かわ中なかに岩石突とつこつ兀つとして橋を架ける便宜よすがが無い

のと、水勢が極めて急激で橋きょう台だいを突き崩して了しまうのとで、少しく広い山河やまがわには一種の籠かごを懸けて、旅人は其その兩岸に通ずる大綱おおづなを手繰たぐりながら、畚こんに吊られて宙を渡つて行く。勿論もちろん、今日こんにちでは其仕掛そのに多少の改良は加えられたが、天然の地形は未だ畚渡しの全廃を許さぬ。飛驒の奥ふかく迷い入る人は、大切な生命せいめいを一個の畚に託して、眼も眩くらむばかりの急流の上を覚束なくも越えねばならぬのである。

されば今この人々は早くも畚を思い付いた。七兵衛が指揮もとの下に、大勢は窟の外へ一旦引返ひつかえして、四辺あたりに立つたる杉や樅もみの大枝を折った。或者は山蔦やまづたの蔓を折った。斯かくて約二十分の後のちには、大きい枝を組み合わせ、長い蔓を巻き付けて、人を容いるるに

足るほどの畚を作り上げた。

「これがあれば大丈夫だ。」

彼等は再び窟に入つて、畚を卸す準備に取懸つた。畚を吊る

には彼の毛綱が必要である。大勢が手を揃えて其綱を繰上げると、

綱の端には尠からず重量を感じたので、不審ながら兎も角も中途

まで引揚げると、松明の火は漸く達いた。洋服姿の市郎は胴を

縛られたままで、さながら縁日で売る亀の子のように、宙に吊ら

れつつ揚つて来たのである。人々も驚いて声を揚げた。

「や、小旦那だ……。角川の小旦那だ……。早く引揚げろ。」

市郎は恙なく引揚げられた。が、彼は正体も無く其処に倒れて

横わつたので、騒ぎは愈よ大きくなつた。一隊の中でも足の達者

な一人いちにんは、麓ふもとまで医師を迎えに走った。斯こうなると、巡查の身の上も益々不安である。権次ごんじという若者を乗せた畚ふごは直ただちに卸おろされた。

畚が中途まで下さがつて来た時、暗い岩穴の奥から一個ひとりの怪しい者が現われた。彼は刃物を振翳ふりかざして、綱を切つて落おそうと試みたが、綱は案外に強いので、容易に刃が立たなかつた。而しかも権次が無闇に振廻ふりまわす松明の火に恐れて、彼は忽たちまち逃げ去った。畚は滞りなく底に着いた。

塚田巡查は先刻せんこくから待侘まちわびていたらしい、暗い中から慌しく進み寄つて、先まず其その無事を祝した。権次は畚から降り立つて、合図の綱を強く曳ひくと、上ではおうと答えて、畚をするすると繰くり上あ

げた。

「用心しないと不可い。何処からか石を投げる奴があるぞ。」と、
巡査は注意した。権次は首を縮めて岩のかげに隠れた。

つづいて第二第三の畚が卸されて、穴の底にも大勢の味方が殖えた。もう斯うなつては、隠れたる敵も恐怖を作したのであろう、

何等危害を加えようとも為なかつた。人々は持ったる松明を揚げ
て四辺を窺うと、そこには鬼の如きお杉婆の死顔と、猿の如き山
まわろ
の亡骸とを発見した。

此上の手続は委しく記すまでもあるまい。権次が一旦上まで
引返して、一同に其始末を報告した上で、三個の亡骸は畚に乗
せて順々に引揚げられた。第一は安行、第二は
であつた。最後

に乗せられたお杉の亡骸は、既に頂上まで達いたと思う頃、何うした機会か其畚は斜めに傾いて、亡骸は再び遠い底へ真逆様に転げ落ちた。更に畚に乗せて再び吊上げると、今度も亦中途から転げ落ちた。お杉の靈魂は此窟を去るのを嫌うのであろう。が、何うしても其儘には捨置かれぬので、最後には畚に緊と縛り付けて、遂に彼女を上まで運び出した。

これで先ず屍体の収容は済んだ。三個の亡骸を窟の外へ昇き出して明るい所で検視を行うと、安行の屍体には何等負傷の痕も無く、其顔は依然として安らかに眠っていた。が、お杉の瞋れる顔は宛然の鬼女であつた。加之も高い所から再三転げ落ちて、剣の如き岩石に撃れ劈かれたので、古い鳥籠を毀したように、身体

中の骨は滅裂ばらばらになつていた。

更に人を駭おどろかしたのは、彼の山かの最期であつた。幾百年の昔

から、口でこそ山と云うけれども、誰と云うけれども、誰あきらか白そのかたちに其形を認を認

め得た者は無かつた。然るに今や白昼に其その怪しき形骸を晒したを晒した

のである。白昼に幽霊が出たように、人々は驚異の眼を睜みはつて、

何れいずも其その周圍まわりに集り来つた。

(四十二)

此ここに怜悯りこうな觀世物師みせものしがあつたら、直ただちに前代未聞と吹聴すべき山や

なるものの正体は抑何んなであつたか。勿論もちろん、彼等にも牝めす

牡おすはあろうが、今ここに屍体となつて現われたのは、確たしかに女性であつた。脊丈せいは先まず四尺ぐらいで、腰に兎の皮を纏まとつてゐる他は、全身赤裸あかはだか々である。鮫さめのように硬い皮膚の色は一体に赭土色あかつちいろで、薄い毛に覆われていた。頭は小さく、眼も小さく、額の著いちじしく窪んでゐるのが人の注意を惹いた。彼等の或者あるは非常に長い髪を垂れてゐると伝えられるが、これは殆ど禿はげ頭あたまと云つても可い位で、脳天に僅少わずかばかりの灰色の毛がちよぼちよぼと生えてゐるのみであつた。

鼻は猿のように低かつた。耳は狐のように立つてゐた。口も比較的に小さい方で、黄きいろい口唇くちびるから不規則に露出むきだしてゐる幾本の長い牙は、山犬よりも鋭く見えた。足の割には手が長く、指は矢や

はり五本であるが、爪は鉄よりも硬く且尖つていた。手^{ての}掌^{ひら}の皮が非常に厚く硬いのを見ると、或^{ある}場合には足の働きもして、四つ這いに歩^あくらしい。

これが満足で居^いても既に此^{かく}の如^いき異^い体^{てい}の怪物である。況^{まし}て市郎の為に、最初^{はじめ}は靴で額を蹴破られ、次に石を以て真^{まつ}向^{こう}を打割^{うちわ}られ、最後には味方の石に因^{よつ}て顔一面を碎かれたのであるから、肉は碎け、骨は露^{あら}われて、其^その醜^{しゆう}、其^その怪^{かい}、実^じに形容も能^{でき}ぬ光景であつた。人々も之^{これ}に對しては何とも云うべき詞^{ことば}を知らなかつた。

「一体、これは何だろう。猿か知ら、人間か知ら……。」

猿か人間か到底判^{とて}らぬ、究^つ竟^{まり}は一種の山と云うものであると答^こえるより他は無かつた。塚田巡查も此^この解^く釈^るには苦^{くる}んだ。

「若し之これが生きていたらなあ。」と、呟く者もあった。實際、之これが生きていたら、人か猿かの区別が付くかも知れぬ。万一、彼が人間の詞ことばを幾許いくばか解するとすれば、訊問の結果、どんな有益な発見が無いとも限らぬ。

「そうだ。此この機会に乗じて奴等を生捕いけどつて与やろう。」

塚田巡査は野心に富んでいた。又、仮たとい野心が無いにしても、人間に対して屢々しばしば危害を加える山の如きものを唯見逃ただして置くという法は無い。殊に昨夜さくやの身元知れざる惨殺屍体と云い、今日きょうの安行殺害事件と云い、何れもいずに關係があるらしく思われるのであるから、警官の職分として、唯見逃ただしては置かれぬ。巡査は再び窟に入つて、穴居けつきよのを捕獲すべく決心したのも無理

ではなかった。

巡査の決心と勇氣とに励まされ、これに又幾分の好奇心も交つて、数名の若者は其後に続いた。七兵衛等は後に残つて、生死不分明の市郎と三個の屍体とを嚴重に守つていた。

松明を把つたる巡査と他数名の勇者は、頼光の四天王が
大江山へ入つたような態度で、再び窟へ引返した。巡査が先
ず畚に乗つて降りた。他の者も順々に降りた。

穴の中は依然として暗かつた。松明の光を便宜にして、ここぞ
と思うあたりの岩穴を一々検査すると、岩壁を穿つたる横穴は数
ヶ所に拓かれていた。が、穴の天井は極めて低いので、到底真
直に立つては歩かれぬ。人々は のように四つ這いになつて進

んだ。

第一の穴は行^{ゆきどま}止りになつていて、別に何者をも発見しなかつた。第二の穴も空虚^{から}であつた。

「め、もう逃げたかな。」

更に降つて第三の穴を窺^{ゆつ}つた。ここは比較的に大きい岩が突^{とつし}出して、苔^{こけ}に包まれたる岩の面は卓^{おもて}子^{テーブル}のように扁平^{たいら}であつた。巡査は松明を片手に這い寄ると、穴の奥から不意に一個^{ひとつ}の石が飛んで来た。石は松明に中^{あた}つて、火の粉は乱れ飛んだ。素破^{すわ}やと一同色めいて、何れも持^{いず}つたる武器を把^{とり}直^{なお}した。

若者の一^{いちにん}人は猟銃を携えていた。或者^{ある}は棒を持^もつていた。或者^{ある}は竹槍を搔^{かいこ}込んでいた。巡査は劍^{けん}の柄^{つか}を握つて立つた。

敵より投げたる一個の石は宣戦の布告である。人間と
 此
 に戦鬪たたかいを開かねばならぬ。

(四十三)

わろ
 はこの奥に棲んでいると見当は付いた。が、敵の方にも何ん
 な準備があるか測り知られぬので、巡查等も容易には進み兼ねた。
 敵の方でも最初の石を投げた後は、鎮のちり返しつて音も為しない。
 併しかし此このままに何時いつまでも睨み合あつていては、際限はてしが付かぬ。

塚田巡查は此こゝに一策を案じ出した。

「松明たいまつを消せ。燈火あかりを消せ。」

敵は最も火を嫌うのである。此方こつちが火を消したならば、恐おそく勢ちからいを得て突とつしゅつ出して来るであろう。そこを待受まちうけて囲み撃つという計略であつた。守ること固きものは誘いざなうて之これを撃つ、我が塚田巡査は孫子そんしの兵法へいほうを心得ていた。

是はたして人間よりも愚おろかであつた。松明の火が消されると共に、俄にわかに石を投げ初めた。巡査等は身かを屈かめて其その的まとに立つのを避けた。敵は愈いよいよ増長して、穴の奥から二匹三匹這い出して来た。彼等は我が術中に陥つたのである。

「占めたツ。」

巡査は心に喜んで、闇を探りながら衝つと寄つて、其その一匹の襟え首りくびを掴んだ。が、敵も中々素捷すばやかつた。忽たちまち其手そのを払い退けて、

口に啣くわえたる刃物を把とり直なおした。其切先そのきつさきは危あやうくも巡查の喉かすを掠さらめて、背後うしろの岩に戛然がちりと中あたると、澆ばっと立つ火花に敵は眼くらが眩くらんだらしい。其隙そのすきを見て巡查は再び組んだ。背せいの低い敵は巡查の足を取った。而も此方しかは柔道を心得こつちているので、倒れながらに、敵の腕ひつかつを引担ひつかついで投げた。が、生憎あいにくに穴の入口へ向つて投げたので、彼は奇怪な叫さけびこえこえ声を揚げながら、再び奥へ逃げ込んだしまった。

は一匹でなかったが他たは入口に立つて格闘の模様を窺うかがつていたらしい。で、今や真先まつさきの一匹が斯しかる始末ひきさとなつたので、少しく怯おくれが出たのかも知れぬ。何れも奥へ引退ひきさつて、再び石を投げ初めた。何分にも暗いので始末が悪い。巡查は危険おかを冒して、

穴の奥へ潜り込んだ。他の者共も勇を鼓して後に続いた。

敵は屈せずに石を投げたが、幸いに石が小さいのと、距離が余りに接近しているのとで、我には差したる損害を与えなかった。それでも二三人は顔や手に微傷を負った。もう斯うなれば騎虎の勢いで、今更後へは引返されぬ。巡查も頼に打撲傷を受けながら、猶も二三間進んで行くと、天井は少しく高くなつて、初めて真直に立つことができた。

敵は幾人居るか判らぬが、兎にかく石を投げ尽したらしい。今度は木のような物や、骨のような物を投げ初めた。骨は尖つているので、巡查は又もや左手を傷けた。

もう仕方がないので、巡查は剣を抜き閃かした。或者は猟銃を

撃った。散弾が轟然として四辺に迸ると、頑強の敵も流石に胆を挫がれたらしい、踵を旋してばらばらと逃げ出した。巡查等は勝に乗って追い詰めると、穴は漸く広くなつた。ここが恐く行止りで、彼等は今や袋の鼠になつたろうと思いの外、何処を何う潜つたか知らず、漸次に登音も消えて了つて、後は寂寞たる闇となつた。

「奴等は何処へ隠れたろう。」

松明は再び点されたが、広い穴の中に何者の影も見えなかつた。幾らで隠形の術を心得ている筈はない。恐く何処にか隠れ家があるうと、四辺を隈なく照し視ると、穴の奥には更に小さい間道が有つた。彼等は此処から這い込んだに相違あるま

い。巡查等は続いて其穴を潜った。

穴は極めて低く狭いので、普通の人間には通行甚だ困難であつたが、人々は宛ら蝦蟇のようになって僅に這い抜けた。行くに随つて水の音が漸々に近く聞えた。水の音ばかりで無い、日の光も薄く洩れて来た。

路は漸次に明るくなつた。暗い湿っぽい岩穴は全く尽きて、人々は大いなる谷川の畔に出た。岩を噛む乱流は大小の滝布を作して、滔々と漲り落ちている。川に沿うて熊笹の藪が生い茂つていた。左右は峻しい岩山である。此の間道から山深く逃げ入つたのであろう。

(四十四)

「到頭逃して了った。」
とうとうにがしま

塚田巡査は齒齧はがみをした。微傷かすりきずではあるが、其その手首からは

血が流れていた。他たの二三人も顔や手の傷を眺めながら、失望と疲労との為に霎時しばらくは茫然ぼんやりと立っていた。

この時、頭の上で人声がわやわや聞えた。仰げば高き絶壁の上に、大勢の人の行き違う姿が見えた。初めて知る、ここは恰あたも虎ヶ窟よこたの前に横よこたわれる谷底で、頭の上に立騒たちさわいでいる人々は、彼かの七兵衛や権次の群であつた。

斯かくと知るや、下からはおういおういと呼んだ。上からも答え

た。中にも権次は岩の出鼻ではなすがに縋りつつ、谷に向つて大きな声で叫んだ。

「わろは何うした、つかま捕つたか。」

「駄目だ、駄目だ。ぬけみち間道から逃げて了しまつた。」と、下でも叫んだ。

「おし惜いことを為したな。今お医師いしやが来て、角川の小旦那は蘇生いきかえつたぞ。」

「いきかえ蘇生いつたか。」

「大丈夫だとお医師いしやが受合うけあつた。何しろ、早く上あがつて来い。」

「おお。」

上と下とて遥かに呼び合っていたが、何を云うにも屏風びょうぶのよ

うな峭立きつたての懸崖けんがい幾丈いくじょう、下では徒爾いたずらに瞰み上げるばかりで、
 攀登よじのぼるべき足代あししろも無いには困こつた。其中そのうちに、上では気が注つい
 たらしい。

「待て、待て。畚ふごを持つて来るぞ。」

斯こう云つて権次は立去たちきつた。下の人々は唯とある大岩に腰おろを卸し
 て、先まずほつと一息吐ついた。其その間あいだも巡査は油断が無い、川に
 沿ゆうて往ゆきつ戻りつ、ここらの地形を案じていた。

この川は人跡絶えたる山奥から湧いて来るのであろう、凄じい
 勢せいいで滔とう々と流れ落ちている。其その支流は虎ヶ窟ひびきの下を潜くぐつて
 いるらしい。窟ひびきの底で絶えず轟々たる響ひびきを聞くのは之これが為ためであろ
 う。近く聞けば水の響ひびきは、実に耳みみを聳ろうするばかりであつた。

其の水音に消されて、今までは誰も聞付けなかつたが、何処やらで微かな唸声^{かすか うなりごえ}が聞えるようである。巡査は忽ちに耳を欻^{そぼだ}てた。そこか此処かと声する方を辿^{かた}つて行くと、彌^{いや}が上にも生い茂れる熊笹や齒朶^{しだ}の奥に於て、確に人の呻^{うめ}くを聞いた。そこらの枝や葉は散々に踏躪^{さんざん ふみにじ}られて、紅い山椿^{つばき}の蕾^{つぼみ}が二三輪落ちていた。

巡査は進んで熊笹を搔^{かきわ}分けると、年の頃は五十ばかりの坑夫^{ていふ}体の男が、喉を突かれて倒れていた。巡査も驚いた。他の人々も駈^かけあつた。集^{あつ}つた。昨日^{きのう}から今日^{きょう}にかけて、種々^{いろいろ}の出来事が何うして斯^こう続発するのであろう。一同も聊^{いささ}か呆れた形であつた。

「一体、これは何者だろう。」

「これも に殺されたのか知ら。」

兎に角も引起して介抱すると、男には未だ息が通っていた。

巡査は谷川の水を掬つて飲ませると、彼は僅に眼を睜いたが、警官の姿を視るや俄に恐怖と狼狽の色を現わして、頻に手足を悶いていたが、何分身動きも自由ならぬ重傷である、彼は呻りながら又倒れた。

崖の上ではおういおういと呼んだ。畚は今や卸されたのである。人々は順々に乗つて、瀕死の男も同じく乗せられた。塚田巡査は最後に上つた。

市郎は医師の手当に因て、幸いに蘇生したので、既に麓へ昇き去られていたが、安行とお杉とと四個の屍体は、まだ其儘に枕を駢べていた。そこへ又、此の怪しい男が朱に染みたる身を

横よこえたのである。昔から魔所と伝えられた虎ヶ窟の前に、斯かる浅ましい姿の者が四よつ個までも列ならんだのを見た人々は、抑そもい如何に感じたであろう。白昼まひるではあるが山風は寒かった。人々は顔を見合わして物を云わなかった。

この驚くべき報告が麓へ拡まると、町からも村からも大勢の加勢かけつが駆着かけつけた。安行の屍体は自宅へ、お杉と④骸なきがらは役場へ、其それ其ぞれに引渡ひきわたしの手続てつづきを了おえた。まだ息の通かよっている怪しの男は一先ひとまず駐在所へ運び入れて、医師の手当を受けさせた。

塚田巡査は疲労をも厭きらわず、直ただちに事件の取調べに着手した。

お杉と山 ④もうしたとの死は市郎④立よてに因よつて事情判明したが、安行は如何いかにして殺されたか能よく判らぬ。次に此この瀕死の男は何者

の手に掛^かつたのか、それも判らぬ。彼はお杉やに關係があるか、
 或^{ある}は別種の出来事か、それも判らぬ。猶其他にも昨夜の慘殺屍体
 と云うものが有る。それと之^{これ}と因縁の糸が連絡しているか何^どうか、
 それも亦^{また}疑問である。巡查も此^この解釈に就^つては大いに頭を悩^{なや}ました。

(四十五)

「どうも判らぬ。」と、塚田巡查も頻^{しきり}に考えた。市郎に就^つては此^{この}
 上に取調べようも無い。は逃^{わろ}げて了^{しま}った、重太郎は行方不明で
 あつた。唯^{ただ}ここに残^{のこ}っているのは、重傷に苦^{くる}める彼^かの坑夫^{てい}体の男
 一人である。これに就^つて嚴重に詮議するより他はないが、何分

にも生命危篤せいめいきとくという重体であるから、手の着様つけようが無い。

昨夜村境さくやむらざかいで発見した惨殺死体は、面の皮を剥はがれているの

で何者か判らぬ。この男も言語不通であるから何者か未だ判らぬ。

仮たとい被害者は誰にもあれ、其その加害者は何れもいずであると断定し

て了しまえば、無造作に解釈は着くのであるが、以外にも何等かの

因縁があるらしく感じられた。而しかして又、彼の惨殺死体と此この負

傷者との間には、何か眼に見えぬ糸が繋がっている様ようにも感じら

れた。が、それは単に「感じられる」と云うに過ぎないので、巡

査そのにも其理屈は到底説明し得られなかった。

負傷者は容易に死なず、医師の説に依れば幾分か持直もちなおした気

味だと云う。巡査は抛よんどころなく手を束ねつかて、其その快癒に向うのを待

つ中^{うち}に、四五日は徒爾^{いたずら}に過ぎた。

虎ヶ窟を中心として起れる此^この奇怪なる殺傷事件は、忽ち飛驒^{たちま}

一国に噂が拡まって、更に隣^{となりぐに}国をも驚かした。明治の世の中

に、が出現したと云うすらも既に新疆^{だね}であるに、況て其^{まし}れが人

を殺したと云い、巡査と格闘したと云う。の牝^ふが大石で頭を碎

かれたと云う。これと同時に幾多の殺人事件が降^ふつて湧いたと云

う。鬼^{おに}婆^{ばあ}が殺されたと云う。聞く事毎に人を騒がす事ばかり

なので、或者^{ある}は嘘だろうと云い消した。けれども、事実は争われ

ぬ。地方の各新聞は筆を揃えて、其^その顛末を記載した。の屍体

の写真まで掲げられた。市郎の遭難実話が載せられた。塚田巡査

の探偵談が記された。噂は更に尾鰭^{おひれ}を生じて、殆ど前代未聞の大^だ

椿事^{いちんじ}とまで伝えられた。

無論、斯^こうなつては塚田巡查一人の手に負える問題ではない。
 高^{たか}山^{やま}からも警官が大勢出張した、岐阜の警察からも昼^{ちゅう}夜^や兼^{けん}
 行^うで応援に來た。狭い駅中は沸返^{しゆくじゆうわきかえ}るような混雑である。

「どうも大変な事が起^{おこ}つたね。」

大学の制帽^{かぶ}を被^{かぶ}つて、旅行用の大革包^{おおかばん}を提^ひげた若い男が、四^あ
 辺^{あたり}の光景^{ありさま}を幾^{いく}度^{たび}か見返^{みかへ}りながら、急ぎ足で角川家の門を潜^{くぐ}
 た。門^{かどぐち}口^{ぐち}には七兵衛老爺^{しじい}が突^つ立^たつていた。

「やあ、吉岡の小旦^{こだんな}那^な……。どうも苛^ええ騒^{さわ}動^ぎが出来ましてね。」

「そうだツてね。驚いたよ。」と、若い大学生は首肯^{うなず}いて、「併^{しか}
 し市朗君は大した事もないのか。」

「はあ、お庇様かげさまで大分快だいぶんい方ほうで……。何、大丈夫だとお医者も云つて居ますが……。何しろ、一時は胆きもを潰つぶしましたよ。」

「そうだろう。まあ、早く行つて逢おうよ。に殺され損なうなんて、馬鹿な話だ。言語同断だよ。」

大学生は七兵衛に誘われつつ、威勢よく奥へ駈かけこ込んだ。彼は吉岡家の長男忠一である。妹いもとの冬子が市郎と結婚するに就つて、十一月初旬には帰郷する心構えをしていた所が、更に市郎から年末休暇まで延期しろと云つて来た。と思うと、やがて又冬子から電報が来て、大變が出来たから直すくに帰れと云う。何が何だか少しく煙けむに巻かれたが、兎とも角かくも大變とあつては聞捨ききずてにならぬ。忠一は早々に旅装を整えて帰郷の途に就いた。

富山へ来ると、例の噂が既^もう一面に拡^{ひろ}がっていて、各新聞にも精細の記事が掲げられていた。読んで見ると成^{なる}ほど大変である。が、彼は其^その大変に驚くと同時に、此^{この}事件に就^ついて一種の興味を湧^{わか}した。彼は此^この機会に乗じて、所^い謂^わ山なるものを十分に研究したいと思つた。冬の夜の明けぬ中^{うち}に富山を発^たつて、午後四時過^する頃^{ぐん}にここへ着いたのである。

安行の葬儀は市郎全快の上で営む事に決したので、一旦は火葬に附^そし、其遺骨は広い座敷の正面に祭られてあつた。親戚や近所の人々も大勢控えていた。忠一の母お政も来ていた。それ等に対する挨拶は後にして、忠一は先^まず市郎の病室に入つた。

市郎は書斎の八畳に寝ていた。其^{その}傍^{そば}には冬子が看護していた。

「あら、兄さん。」

「どうしたい。飛とんだ騒動が持上もちあがつたもんだね。」と、忠一は其その枕元に坐り込んだ。室内には既もう洋燈らんぷが点とぼつていた。

(四十六)

「冬子さんから電報を打つたと言う談はなしは聞いたが、よく早く帰つて来られたね。」

市郎は痛む手を抱えながら起きようとするのを、忠一は慌しく制した。

「まあ、無理をしずに寝て居たまえ。阿父おとつさんは何どうも飛んだ事

だったね。そこで、君の痛所^{いたみしょ}は何うだ。もう快いのか。」

「いや、まだ悉^{すつかり}皆快いという訳には行かないよ。何でも三週間ぐらゐは懸^かるだろうと思うが……。併^{しか}しまあ、生命^{いのち}に別条の無いのが幸^{しあわせ}福さ。」

市郎は苦笑いした。顔の色はまだ蒼ざめていたが、元氣は左^さのみ衰えたようにも見えないので、忠一も先^まず安心した。

「生命に別条があつて堪^{たま}るものか。対^{あいて}手は多寡^{たか}がじやアないか。はははは。」

「でも、一時は真^{ほん}実^{とう}に喫^{びつ}驚^{くり}しましたわ。」と、冬子は眼^{まろ}を丸くして云った。

「そりやア誰でも喫^{びつ}驚^{くり}するさ。僕だつて、一旦は驚いたよ。吉

岡忠一の友人が、そんな馬鹿馬鹿しい目に逢ったかと思うと、実に啞然とせざるを得なかったよ。全体、なんて云う者くるしめられると云うのが、文明人の恥辱だからね。と云うと、君ばかりでなく、死んだ阿父さんおとつまで侮辱するようだが、實際詰つまらない災難に逢ったものだよ。」

「恥辱でも仕方が無いわ。先方むこうから不意に襲つて来るんですもの。」と、冬子は少しく不平そうに兄を顧みかえつた。

「いや、不意に襲われると云うことが已すでに不覚だよ。」と、忠一は笑つて、「の如き者は一挙して全滅しましてうか、左もさなくばこれこれを教化きようかして真人間まにんげんにするか、二つに一つの方法をえらぶより他ほかはないよ。唯漫然ただと打捨うつちやつて置くから、往々にして種々いろいろの

禍害^{わざわい}を醸^{かも}すのだ。勿論^{もちろん}、打捨^{うつちや}つて置いても、自然^{ほろ}に亡びつ
つあるには相違ないが、それには未だ^ま尠^{すくな}からぬ年月を要するだろ
う。」

「真人間にするツて……。」

餓張^{やっぱり}人間でしようか。」と、冬子

は眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めた。

「人間だよ、確^{たしか}に人間だよ。ねえ、市郎君、この夏も君と
種々^{いろいろ}と研究した事があつたじゃないか。」

「むむ。僕も委^{くわ}しく研究したいと思つて、参考の為に親父にも種
々^{いろいろ}訊^{うち}いてる中に、今度の騒動^{さわぎ}さ。親父はあんな氣象にも似合

わず、因襲^{しま}的に　を恐れていたらしかつたが、到頭^{とうとう}こんな事になつて了つた。そこで、君はいよいよ　を人間と見極めたのか。」

「や山男のたぐいは皆人間だよ。僕も従来^{これ}に就^つて多くの注意を払^はつていなかったが、此^{この}夏君と話し合^あつてから、俄^{にわか}に研究を思い立^{すぐ}つて、東京へ帰ると直^{すぐ}に人類学の書物を種^{いろいろあき}々獵^{あさ}つて見た。諸先輩の説も聴いた。何分研究の日が猶^{なほ}浅^あいのだから、僕も余り詳細の説明は能^{でき}ないが、兎^とにかく我々と同一の人類であると云うことだけは明白に云えるよ。尠^{すくな}くも僕は然^そう信じているよ。」

「我々と同じ人間が何^どうして　なんぞになつたのでしょうか。」と、冬子の疑^{うたがい}惑^{ごつ}は解^とけそうも無かつた。

「委^{くわ}しく云えば長いことだが、まあ簡^{かん}短^{たん}に説明すると、こんな理屈になるんだ。」

冬子が注^ついで出す茶を一杯飲^のんで、忠一は鉄^{てつ}縁^{ぶち}の眼鏡を掛^かけ

直しながら、今や本論に入ろうとする時、彼の七兵衛が襖から顔を出した。

「あの、駐在所から塚田さんが見えましたが……。」

「むむ、此方へ通して呉れ。」と、市郎が首肯うなずいて見せると、七兵衛は心得て去った。

「塚田巡査、相変わらず勤勉だね。」と、忠一は微笑した。

「實際、勤勉だよ。殊に今度の事件に関しては、殆ど寢食を忘れて奔走しているんだ。今日来たのも、何か犯人搜索上に就つて僕に聞き合せにでも来たんだろう。」

「あの巡査は　と格闘したと云うじゃアないか。職務とは云え、流石に偉いよ。」

こんなことを云っている中に、噂うちの主は帶ぬし剣たいけんを憂からめかしながら入つて来た。近所の人であるから、忠一とも予かねて相識あいしつているのである。双方の挨拶は式かたの如くに終つた。

「何かお急ぎの御用ですか。」と、市郎が問うた。

「いや、急ぎと云うでも無いですが、今日は虎ヶ窟を検査に行くと、不思議なものを発見したのです。」

「ははあ、何どんなものを……。」

「岩穴の壁に沢山の字が書いてあるのです。恐おそく字だろうと思うのですが、我々には到底読とめないのです……。」

「字が書いてありましたか。」と、忠一は思わず乗出のりだした。

(四十七)

虎ヶ窟の壁に文字の跡が有るというのは、頗る興味を惹く問題であつた。一座悉く耳を傾けると、塚田巡査は首を拵りながら、

「今も申す通り、我々には字だか絵だか符号だか實際判然しないのですけれども、何うも文字らしく思われるのです。勿論、刃物の尖で彫付けたもので、何十行という長いものです。あれが悉皆判れば余ほど面白からうと思うのですが、何うでしょう、あなたには……。読んで下さることは能ますまいか。」

「さあ、読めるか何うか判らんですが、兎にかく何んなものだから、是非一度見たいもんですな。」と、忠一も非常の乗氣であつた。

「今日は既^もう遅いですから。明日御案内を為^しましょう。」

「どうか願います。若^もし果^{はた}して其^それが文字^{もんじ}であるとすれば、
に
対する僕の意見^いが愈^いよ確^た実になる訳ですから……。」

「何か 就^つて御意見があるですか。」

「忠一君には大いに意見があるんだそうで、今これから大演説を
始めようと云う処へ、あなたが見えたんです。」と、市郎は笑
いながら喙^{くち}を挟んだ。

「それは好^いい所へ来ました。わたくしも参考の為に是非伺いたい
ものです。」と、巡查も熱心に膝を進めた。

「兄さん、お話しなさいよ。」と、冬子も強^せ請^がむように迫り問う
た。

聴^き者が熱心であるだけに、弁^{べん}者にも大いに挑^は発^{はつ}が付いて、忠

一も更に形を改めた。

「いや、大いに意見があると云う程でも無いんですが、近頃僕が取調べた所では、概^ま略^{りゃく}先^まずこんな訳なんです。日本ばかりでなく、支那にも昔から山鬼^{さんき}又は野婆^{やば}などと云う怪物の名が伝えられています。山鬼は日本で云う山男或は山 のたぐいで、野婆は即^や幽^{ゆう}姥^{ばう}でしょう。尤^もも地方に因^よて其^{その}名を異^{こと}にするようで、日本でも奥羽地方では山^{やま}人^{びと}と云い、関東地方では山男と云い、九州地方では山^{やま}と云い、^{やまわろ}ここらでも主に と呼^よ様^うです。そこで其^{その}なるものは元来何であるかと云うと、大和民族の我々よりも早く既に此^この本土に棲^すんでいた人種で、其^{その}中^{うち}にはアイヌもありましよ

う、所謂^{いわゆる}土蜘蛛という穴^{けつきよ}居人種もありましよう、又は九州の
 熊襲^{くまそ}の徒^{やから}もありましよう。斯^こういう野蛮人種が我々大和民族と闘
 つて、或者^{ある}は亡^{ほろ}された、或者^{ある}は山奥へ逃げ込んだ。其^その逃げ込ん
 だ奴等^{しんざんゆうこく}が深山^{あいだ}幽谷の間に隠れて、世間普通の人間とは一切の
 交通^たを断つて、何千年か何百年かの長い間、親から子、子から孫
 と其^{その}血統を伝えて来たもので、兎^とに角^{かく}人間には相違ないんです。
 現に誰も知っている一例を挙げれば、肥後^{ひご}の山奥にある五個^{ごかしよう}の庄
 です。壇の浦で亡^{ほろ}びた平家の残党は彼^かの山奥に身を隠して、其後^{そのご}
 何百年の間、世間には知られずに別天地を作っていました。」「
 「成程^{なるほど}……。一と、巡査は酷く感心して聴いていたが、市郎は
 少^{かしら}しく頭を傾けた。

「君の説も一応は道理もつともの様に聞えるが、五個の庄の住民は矢はやり普通の人間で、決して　や山男たぐい類では無いと云うじやアないか。」

「無論さ。」と、忠一は首肯うなずいて、「五個の庄の住民は何れも平家いずに由縁ゆかりの者で、彼等は久しく都の空気を呼吸していた。平家の公達きんだちや殿原とのぼらは其当時そのに於る最高等の文明人種であつたのだ。随したがつて彼等が如何いかなる山村僻地に流落りゆうらくしても、或程度あるまでは自己の有する文明を維持して行く力を有もつていたから、子孫相伝えて兎とも角かくも今日こんにちに至つたのだ。之これに反して、彼のアイヌや土蜘蛛の種族は元来の野蛮人種で、最初はじめから自己の文明というものを所有してないから、彼等が山に隠れ、谷ひそに潜んで何十代を送

る間には、野蠻の程度が愈よ加わるのみで、寧ろ漸々に退化して、人間か獣か区別が付かぬ様になつて了つたのだ。昔から山や山男と云うのは即ち是だ。彼の頼光が足柄山から山姥の児を連れて来たと云うのが実説ならば、其の金太郎と云うのは即ち山の人で、文明の教育を受けた結果、後に坂田金時という立派な勇士になつたのだろう。」

「成程……。」と、巡査は又首肯いたが、市郎と冬子は未だ腑に落ちぬらしく、霎時は黙つて考えていた。広間の方には坊さんでも来たのか、鉦を叩く音が低く聞えた。

(四十八)

「先^まず然^そう云う理屈であるから、我々の先祖は勝利者で、^{わろ}の先

祖は敗北者で、我々が^を恐るる筈は無いのだ。けれども、先祖

の歴史を委^{くわ}しく知らぬ我々が、何百年の後^{のち}、不意に山奥で異形^{いぎよう}

の者に出逢うと、何か一種の魔者^{まもの}であるかの様^{よう}に考えられて、跡

をも見^みずして逃^{にげ}歸^{かえ}るといふ事になる。又、彼等は先祖代々深^{しんざ}

山^ん幽^{ゆう}谷^{こく}に棲^{すま}んでいるから、山坂を駆^{かけ}歩^{ある}くことは普通の人間

よりも素捷^{すばや}いであらうし、腕力も亦強^{また}いかも知れない。随^{したが}つて種

々^{ろいろ}の臆説^{おくせつ}が甲^{それ}から乙^{それ}へと附会^{ふかい}されて、何だか神秘的の色彩を帯

びた怪談が伝えられる様^{よう}になつて了^{しま}つたのだ、要するに^は、人

間^いが漸次^{しだい}に退化して所謂^{いわゆる}猿人^{えんじん}に近くなつたものだと思えば可^い

い。」

忠一が息も吐かずに弁じるのを、市郎は徐に遮った。

「まあ、待ち給え。君の議論も一通りは解ったよ。けれども、長い年月の中には、何うか云う機会で 生捕る事もありそうなものだ。若し生捕って調べたらば、総ての疑問は疾うに解決されている筈だ。日本にも昔から種々の冒険者もあれば、勇士もある。誰か其の を生捕るとか退治するとか云う人もありそうなものだ。つたが……。」

「そんなことも無いでは無かったが、惜むらくは之を研究するほどの熱心家も無し、学者も無かったらしい。現に今から百余年前、天明年間に日向国の山中で、獵人が獸を捕る為に

張つて置いた菟道弓うじゆみというものに、人か獣か判らぬような怪物が懸かつた。全身が女の形で色が白く、まっばだか赤裸で黒い髪を長く垂れていた。獵人等は驚いて、之は恐これく山の神であろうと、後の崇のちたたりを恐れて捨てて置いたら、自然に腐つて骨に化なつて了しまつたと、橘たちばななんけいの西遊記せいゆうきに書いてある。これなども山の女性であつたに相違ないが、徒爾いたずらに腐らして了しまつたのは惜おしい事であつた。同じく西遊記に山の事も記してあつたと記憶している。昔から諸国に其そんな例も沢山あつたのだろうが、唯其ただその一地方の夜話よばなしに残るだけで、識者しきしやが研究の材料には上らなかつたのだ。いや、然そういう例に就つて、もつと面白い話がある。これは日本の出来事じゃアないが、現に英国で其その敵押とりおさえた人の実話だ。まあ、

聞き給え。」

忠一の研究談は尽る所を知らなかつた。人々も耳を澄すましていた。

「何でも西暦千七百二十年頃の事だ。プットバリーの講師にレヴェ
エレンド・シメオン・ピジョンと云う人があつた。この人の邸やしきで
屢しばしば々家禽かきんを何者にか盗まれる。土地の者は之これをピキシと云う
怪物の仕業だと昔から唱えていたが、講師は之これを信じなかつた。
で、暗い晩に鶏とり小舎こやの蔭に隠れて待つていると、例の如く午前一
時頃に何者か忍んで来た。何でも小児こどものような奴であつた。講師
は不意に飛び出して取押とりおさえようすると、賊は刃物を振廻ふりまわし
て激しく抵抗した。何しろ、其奴そいつの正体を見届けようと思つて、
講師は先ず燐寸ま まつちを擦付すりつけると、対手あいては俄に刃物を投ほうり出して、両

手で顔を隠して了^{しま}った。」

「むむ。」と、市郎も思わず蒲団から乗出^{のりだ}した。彼も に対して、
ピジョン氏と同じような経験を有^もっているからであつた。

「そこで難なく取^{とり}押^{おさ}えて、貴様は何者だと問うたが、賊は何とも返事を為^しない。兎^とも角^{かく}も家の中まで引擦^{ひきず}って行こうとしたが、
燐寸の火が消えると共に、対手^{あいて}は再び強くなつて、講師を突き退^の
けて何処^{どこ}へか逃げて行つて了^{しま}つた。が、其^その一刹那^{せつな}に講師が認め
た彼の姿は、極めて背^{せい}の低い、殆ど赤裸^{あかはだか}で、皮膚の色は赭土色^{あかつちいろ}
で……。」

云^{ことごと}う事 毎に符合しているの、市郎も巡査も同時に叫んだ。
「むむ、それから……。」

「それから講師が現^{げんじょう}場を調べて見ると、そこには賊の刃物が落ちていた。能^よく能^よく研究すると、これは古代の羅馬人^{ローマじん}が持っていた短い劍^{けん}の類^{たぐい}であつた。而^{のみ}已ならず、其^{その}附近にはローマンケ―ヴと昔から呼ばれている岩穴^{いわく}が有る。それや是^{これ}やを綜合して考えると、賊はピキシーと云う怪物^{ばけもの}でも何でも無い、恐^{おそ}らく古代の羅馬人であろうと鑑定した。が、土地の者は容易^{これ}に之を信じないで、矢^やはりピキシーの仕業だと云つていたので、講師は更に斯^こう云う説明を加えた。」

(四十九)

わろ

の正体も漸々^{だんだん}に判りかかつて来た。忠一^{しわぶき}は咳して又語り続

けた。

「ピジョン講師の説明に拠^よると、其昔羅馬人^{そのローマじん}が英国へ侵入して

来た時に、其一部^{その}が戦闘^{たたかい}に敗^まけて此^この地方へ逃げ込んで来た。

が、固^{もと}より敵地であるから、到る処で追詰め追巻^{おいまく}られた結果、

山の奥深く逃げ籠^{こも}つて了^{しま}つた。其子孫^{その}が相伝えて今日^{こんにち}に至つた

のである。と云つたら、男ばかり集^{あつま}つていて、何^どうして子孫が絶

えぬかと云う疑問^{おこ}が起るに相違ないが、彼等は夜に乗じて麓^{ふもと}の里

へ降^{くだ}つて、見当り次第^{こども}に小児^{こども}を攫^{さら}つて行く。で、女の児^こは生長す

るのを待つて結婚する、男の児^こは自分達の眷族^{けんぞく}にして^{しま}う。勿^も

論^{ろん}、同族結婚などを頓着^{とんちやく}しているのでは無い。然^そういう風

であるから、肉体も精神も漸次^{しだい}に退化して、殆ど猿のような野蛮
 人になつて了^{しま}つたが、兎^とにかくに今日まで其^{その}血統を維^{つな}いでいられ
 たのである。併^{しか}し彼等が漸^{だんだん}々に亡^{ほろ}びて行くことは争われぬ道理
 で、昔に比べると其^{そのにんず}人数も非常に減つて来たに相違ない。聽^{やが}て
 は自然と亡^{ほろ}び尽^{つく}すであらう。で、彼等は平生^{へいぜい}日光を見ない穴の中
 に隠れ棲んでいて、暗い夜になると窃^{ひそ}かに出て歩く。その習慣が
 幾代も続いて来たので、眼の働きが甚だ弱いものになつて了^{しま}つて、
 火のような強い光線に出逢うと、眼を明^あいては居られない様^{よう}にな
 ったのである。又、彼等の皮膚が赭^{あかつちいろ}土色に化^なつて了^{しま}つたのは、
 生れてから死ぬまで岩石や赭土の中に棲んでゐる為である。其^その
 体軀^{からだ}が小児^{こども}のように小さいのは、同族結婚や野蛮生活^{ようぶ}に因^{よつ}て身体

の發育が衰えた為である。と、先^まず斯^こう云うのだ。」

「いや、解りました。よく解りました。」と、塚田巡査が先^ま第一に降伏した。

「成^{なるほど}程、然^そうかも知れませんか。」と、冬子も再び兄に反抗する勇氣は無かった。

「實際、そうだろう。君も些^{ちつ}との間^まに大分研究したね。」と、市郎も笑った。

三人を目前に説破^{せつぱ}した忠一は、自^{おのず}から得意の肩^{そびや}を聳^{よう}かす様になつた。

「であるから、この虎ヶ窟に棲む山　なる者の正体は、大抵想像するに難^{かた}からずで、矢^やはり前に云つたような種類に相違ないんで

す。それにしても、文字が彫つてあると云うのは頗る面白い問題で、若し其の文字の解釈が能たら、の正体愈よ確実に判りましょう。」

「然うです、然うです。明日は是非御案内を為しましょう。今日は丁度好い処へ来合せまして、種々有益なお話を伺いました。

岐阜や高山から出張している同僚の者にも、参考の為に能く云い聞かせましょう。」

塚田巡査が喜んで歸つた後は又寂寞になった。

「馬鹿馬鹿しいの、詰らないのと云うものの、君の阿父さんが斯んなことになろうとは、実に夢にも思わなかつたよ。」と、忠一は今更のように嘆息して、「一体其のなる奴が、何餘う執念

深く君の一家に崇るのだろう。新聞に拠ると、お杉婆が種々の原因を作している様だが實際然うなのか。」

「さあ、それは僕にも判然とは解らないが、何うも然う解釈するより他は無いのさ、僕の祖父もに殺されたそうだが、親父も今度のような事になった。究竟一種の因縁とでも云うのだろうよ。」と、市郎も嘆息した。

「むむ、それから……。」と、忠一は思い出したように、「あの柳屋の女ね、確かお葉と云った女だ。新聞の記事に拠ると、彼奴も何か今度の一件に就て、関係があるらしいじゃないか。妙な事があるもんだね。」

「いや、関係があると云う訳でも無いらしいが……。」と、市郎

は冬子を顧みかえつて、「兎にかく親父が攫さらわれた日に、お杉婆ばばあに誘さそわれて山へ行つたことは真実ほんとうさ。何故行つたか判らないが、少し狂気染きちがいじみた女だから、何だか夢のようにふらふら出掛けたりしいよ。で、明る日あく茫然ぼんやり歸つて来たんだ。警察の方でも無論これ之に目を注つけて、再三取調べたけれども更に要領を得ない。實際、親父の死に就つては何にも知らないらしいんだ。」

「それで何どうした。」

「何どうも仕方が無いさ。相変らず柳屋へ歸つて、唄うたなんぞ謳うたつているそうだ。」

「暢気のんきな奴だな。併しかし彼の女あの事だから、然そうだろうよ。」と、忠一も笑い出した。

(五十)

忠一は其夜、安行の靈前に通夜した。明る日は陰くもつて寒かった。が、そんなことに余り頓とんちやく着する男では無いので、草鞋穿わらじばきの扮装いでたち甲斐甲斐かいがいしく、早朝から登山の準備に取とりかかっていると、約束を違たがえずに塚田巡査が来た。活発なる若い学生と勤勉なる若い巡査とは、相携あいたずさえて角川家を出発した。

「兄さん、氣を注つけてお出いでなさいよ。」と、冬子は門かどまで送つて出た。

「心配するなよ。わろを五六匹お土産みやげに持つて来るから、わろじる汁で

こしらも拵える支度をして置くが可いさ。」と、冗談を云いながら兄は去った。

巡査は彼の事件以来、日々にちに通い馴れているので、険阻の山路も踏み迷わずに、森を過ぎ、岩を越えて、難なく虎ヶ窟の前に辿り着いた。足の達者な忠一は巡査に些とも後れなかった。

窟の入口には落葉を焚いて、一人の警部と二人の巡査が張番していた。重太郎や荷時旧巢へ帰つて来るかも知れぬので、過日來昼夜交代で網を張っているのである。塚田巡査は挨拶した。

「どうです、奴等は姿を見せませんか。」

「影も形も見せないよ。多分山奥へ逃籠つて了つたのかも知れ

ないが、これだけの所を山狩やまがりするのも大変だからなあ。」と、
警部も少しく倦うんだ形であつた。

塚田巡査の紹介に因よつて、忠一は直ただちに穴へ入ることを許された。
巡査の案内に従つて、松明たいまつを片手に奥深く進み入ると、此頃このは
昇降の便利を計る為に、横木よこぎを架した縄梯子なわばしごが卸おろしてあるので、
幾十尺の穴を降くだるに格別の困難を感じなかつた。二人は中途に突と
っしゅつ
出出したる岩に立つて、霎時しばらくあたり四辺てらを照し視みた。

「この岩の上です。角川の阿父おとつさんの屍体が横よこたわつていたのは……
。」と、巡査が指さして教えた。忠一は肅然として首肯うなずいた。

「まあ、順々に御案内しますが、
の棲んでいたの此この下の穴で
す。」

巡査が松明を振翳^{ふりかざ}す途端に、遠い足下の岩蔭に何かは知らず、
 金色^{こんじき}の光を放つ物が晃^{きら}乎と見えた。が、松明の火の揺^{うご}くに随^{したが}つ
 て、又忽^{たちま}ちに消えた。

「おやッ。」と、忠一も共に火を翳^{かざ}したが、岩に遮^{さへぎ}られて何にも
 見えなかった。

「何でしょう、今光つたのは……。」

「さあ。」と、巡査は考えて、「何だか知らんが時々^{このあいだ}に光るので
 す。けれども、光線の工合で見える時もあり、見えない時もある
 のです。私も過^{この}日^{あいだ}から不思議に思っているのですが……。」

斯^こう云いながら、巡査は無闇に松明を振廻^{ふりまわ}すと、火の光は偶^ま
 中^{くれあ}りに岩蔭へ落ちて、燦^{さん}たる金色^{こんじき}の星の如きものが暗^{やみ}に浮^{うか}

んだ。が、あれと云う間に又朦朧と消えて了った。

「何だろう。」

「兎も角も行つて見ましようか。」

好奇心に駆られた二人は、松明を振廻しながら更に降つた。

「ここらでしたね。」と、巡査は的も無しに又もや松明を振廻すと、忠一も四方を照して視た。が、ここぞと思う辺には何物をも見出さなかつたので、二人は失望の顔を見合せて立つた。

「不思議ですね。」

「何うも不思議ですね。」

鸚鵡返しの声が終らぬ中に、忠一の持った松明の火先が左へ揺れると、一間許り下の大岩の間に又もや金色が閃いた。

「あ、彼処あそこだ。」と、二人は跳おどつて飛び降りた。岩さなは宛あたら獅子が口を明いたような形で、其その喉のどとも云うべき奥の処から、怪しき金色こんじきの光を発するのであつた。二人は松明を差さ付けて窺さしつうと、これは意外、幾百年を経たりとも見ゆる金の兜かぶとであつた。

山　の棲家に金の兜なんぴとを発見するとは、豚小屋から真珠ほりだ掘出し
たようなもので、何人なんぴとも想像の及ばぬ所であろう。歴史の智識
に富んでゐる大学生は、早くも之これを鎌倉時代の物と見た。五枚じごころ鍔
の大兜おおかぶと、これが火の光に映じて輝いたのであつた。それにし
ても、こんな貴重な物が何どうして此処ここに隠してあつたのか。　　が
何処どこからか盗み出して来たのか、但ただしは　　以前に此処ここに棲んだ
者があるのか。忠一も即座に判断は付かなかつた。

兜は岩の上に据えられた。げにも由緒ありげな宝物ほうもつである。忠一も霎時しばしは飽かず眺めていたが、やがて手に取つて打返うちかえして見ると、兜の吹返ふきがえしの裏には、「飛驒判官藤原朝高」と彫つてあつた。

(五十一)

「飛驒判官というのは何者でしような。」と塚田巡査は首を傾かしげた。

「飛驒判官朝高という人は、曾かつて此この飛驒国ひだのくにの地頭職じとうしよくを勤めたことが有ようる様に記憶きおくしています。左様さよう、何でも鎌倉時代の中葉、

ほうじょうときむね
北條時宗頃の人でしたろう。蒙古退治の注進状の中に、
確か此人の連名もあつたかと思いますが……。いや、それ
は調べれば直に判ります。何しろ、面白いものを掘出しましたよ
。」

忠一は此の歴史的遺物発見に就て、慙からぬ興味を覚えたらしく、
大事そうに金の兜を捧げて起つた。

「それから例の不思議な文字というのは、何処にあるんですか。」
「あの岩穴の中です。」

巡査は先に立って少しく登つた。ここは曩の日に、巡査等が
と戦闘を開いた古蹟である。低い穴を横に潜つて奥深く進んで行
くと、天井は漸くに高くなつた。ここを行き過ぎると、更に広い

場所へ出た。行止りのように見えて、実は狭い間道のある所であつた。

「彼の穴から逃げたのです。」と、巡査は残念そうに云つた。「ああ、そうですか。」と云いながら、忠一は何心なく四辺を見廻したが、忽ちあつと叫んだ。

ここにも彼を驚かすものが有つた。それは累累たる人間の骸骨で、規則正しく順々に積み上げてあつた。年を経て全く枯れたる骨は、松明の火に映じて白く光っていた。更に仔細に検査すると、下の方に敷かれた骨は普通の人よりも稍大きい位であるが、上の方へ行くに従つて骨格が漸々に縮まつて、終局には殆ど小児のように小さくなつた。之を見ても彼等が漸次に退化したこと

が證明しやうめいされる。忠一は自己の想像の謬あやまらざりしことを心竊ひそかに誇った。

「これです。御覧下さい。」

巡査の翳かげす松明は傍かたえの石壁を鮮明あざやかに照てらした。壁は元來が比較的ひらたに平い所を、更に人間の手に因よつて滑かに磨かれたらしい。其その面には何さま数十行の文字もんじらしいものが彫ほり付けてあつた。忠一は眼鏡を拭つて熱心に見詰めていた。

「どうも文字もじのようですな。」と、巡査みかえが顧みると、忠一は黙つて首肯うなずいたが、聽やがて衣兜かくしから手帳を把出とりだして、一々これを写し始めた。石の面おもてには所々缺けた所があるので、全く写し了おわるまでには尠すくなからぬ困難と時間とを要した。巡査も根好こんよく待つていた。

「これは確に蒙古の字です。僕には全部は判りませんが、所々はおぼろに其意味が推察されます。」と、忠一は手帳を収しまいながら、
「これに因よつて考えると、彼のなるもの謎げんの蒙古の子孫らしい。
彼等が隠していた飛驒判官の兜と対照して研究したら、頗る面白すこぶ
い歴史上の事実を発見するかも知れません。唯ただ、蒙古の人間が何
うして斯こんな山中に隠れ棲んでいたかと云うことが甚だ疑問です
が、東京へ帰つて蒙古語専攻の学者に此この文章を読んで貰い、又
一方に飛驒判官の伝記を調べて見たら、秘密は自然に解決される
でしょう。何しろ、お庇かげ様で種いろ々の興味ある発見を為しました
。」

二人は再び縄梯子を伝つて、穴の入口へ登つた。窟たむろの前に屯し

ていた警部等も、金の兜には驚いた。

「何処どこに有ったのです、そんなものが……。」と、皆口々に問い寄るので、忠一は先ず其概略まそのを説明した上で、これは何人なんびあたくしも私すべきもので無い、事件が落着するまでは何分宜しく保管よろを頼むと云えば、警部等も快く承諾した。で、兜は警官の手に渡して、二人は早々そうそう下山の途に就いた。

やがて麓ふもとに近い頃、忠一は唯ある樹根きのねに腰をかけて草鞋わらじの緒おを結び直した。巡査は之これを待つ間に不図何を見出したか、忽ち疾たちましつふう風の如くに駆け出して、あなたの岩蔭へ飛び込んだ。忠一は呆あっけつげ気に取りられて見送っていると、霎時しばらくして巡査は悄悄すこすこ引返して来た。

「何^どうしたんですか。」

「今あの岩の蔭に重太郎の隠れているのを見付けましたから、直^{すぐ}に追掛^{おっか}けて行つたのですが、彼奴^{あいつ}中々足が捷^{はや}いので、忽^{たちま}ち見えなくなつて了^{しま}いました。残念なことを為^したです。」

巡査は酷^くく口惜^{くやし}そうであつた。

(五十二)

それから又二三日過ぎた。忠一は実家と角川家との間^{あいだ}を往来しながら、熱心に飛驒の古い歴史を研究して、飛驒判官の伝記及び彼と蒙古との関係を明^{あきら}白^{らか}にすべく努めていた。

一時は口も利かれぬ程の重態であつた坑夫てい体の負傷者も、医師
てあての手当に因よつて昨今少しく快方に向つたので、警官は直ただちに取
べ調を始めた。彼は中々の横おうちやくもの着者で、最初はじめは兎角とかくに自分の素
 性来歴を包もうと企てたが、要するに其それは彼の不利益に終おわつた。
 彼が不得ふとく要領ようりようの申立もうしたてをすれば為するほど、疑うたがい惑の眼はいよい
 よ彼の上に注そそがれて、係官は嚴重に取とり調しらべを続行した。
 で、或時ある係官がお杉と重太郎との身みの上うえに就ついて彼に語り聞かせ
 て、お前きまづを傷けた当の相手は恐おそろく行方不明の重太郎であろうと告
 げるや、彼は俄にわかに色を変えて、「然そう云このえば過あ日、虎ヶ窟で見付
ばばあけた婆の死骸は何どうもお杉に肖にていてと思ひましたよ。悪いこと
できは能でねえもんだ。私は実の倅せがれに斬られたんです。」と、此こゝに初め

て自分の暗い秘密を打明けた。うちあ

彼は重太郎の父の重蔵であつた。今から殆ど三十年以前に、彼

は角川家を出奔して、お杉と共に諸国を流浪るろうして歩いた。が、頼

むべき親戚みよりもなく、手に覚えた職もないので、彼は到る処で種しゆし

々ゆの労働に従事した。其そのあいだ間にも酒や博奕ばくちや女狂いや、悪い

道楽は何でも為尽しつくした。斯こうなると、二人が仲にも温かい春の続

こう筈はない。年上で嫉妬深いお杉は、明暮あけくれに夫の不実を責め

て、或時あるはお前を殺して自分も死ぬとまで狂い哮たけつた。重蔵は愈いよいよ

よお杉に飽いた。が、蛇の申子もうしごと噂された程のお杉の執念は、

飽あくまでも夫に附纏つきまとうて離れなかつた。彼は幾度いくたびもお杉を置去おきざ

りにして逃げようと企てたが、何日いつも不思議に其その隠れ家を見付みつけ

出された。

「妾あたしを捨てて逃げるような料見だから、お前さんは一生涯碌ろくなことは無い。終局しまいには必然きつとむご酷い死し様にようをするよ。」と、お杉は鬼のような顔をして、常に夫を呪った。重蔵は愈いよお杉に飽いた。飽いたと云うよりも寧ろ恐れたのであつた。そんな状態ありさまで幾年かを無意味に送る間あいだに、お杉は懐胎して重太郎を生んだが、産後の肥立ひだちが不良よくないので久しく床に就いた。其隙そのすきを窺つて重蔵は逃げて了しまつた。

今度は既もう諦めたのか、但ただしは病中の為か、流石さすがのお杉も執念深く追つては来なかつたので、これを幸いに重蔵は又もや漂泊さすらいの旅路に上のぼつた。或時あるときは土方どかたとなり、或時あるときは坑夫となつて、

甲^{それ}から乙^{それ}へと際限^{はてし}もなく迷い歩く中^{うち}に、二十年の月日は夢と過ぎた。彼の頭には白髪^{しらが}が殖^ふえた。先頃までは加賀のあたりに徘徊していたが、近来飛驒に銀山^{ひら}が拓かれて、坑夫を募集しているという噂^{きさこ}を聞込んだので、彼は同じ仲間の熊吉^{くまきち}と云う老坑夫^{さそ}を誘つて、殆ど三十年振で故郷^{ふるさと}の土を踏んだのである。

変遷^{いぢじ}の著^しるしからざる山間^{さんかん}の古い駅^{しゆく}ではあるが、昔に比ぶれば家も変つた、人も変つた、自分も老いた。誰に逢つても昔の身^みのうえ上^{きづかい}を知られる気配もあるまいと多寡^{たかく}を括つて、彼は平気で町^{まち}中^かを歩いた。旧主人^{きゆうしゆじん}の角川家の前も通つた。駅^{しゆく}を抜けて村^{むら}境^{ざかい}まで出ると、日が暮れかかつて来て、加之^{おまけ}に寒い雨が降つて来た。目ざす銀山まではまだ三里もあるので、二人は其処^{そこ}らで

野宿をすることに決めた。

ここらの案内は重蔵が善く心得ているので、彼は熊吉を導いて
もみばやし 櫛 林の奥へ入った。木立の深い処には、人を容るるに足るほ

つちあなところどころ

どの天然の土穴が所々に明いているので、二人はここへ潜り込
 んで、雨を避けながら落葉を焚いた。此のままに眠つて了えば、

かかやから

彼等は平和に夢を結ばれたのであろうが、斯る徒の癖として重蔵
 は懷中から小さな賽を取出した。二人は焚火の傍で賽の目の勝

ふところ
さいとりだ

そば

負を争った。

かか

斯る賭博に喧嘩の伴うのは珍しくない。二人は勝負の争いから

たちま

忽ちに喧嘩を始めて、熊吉は燃未了の枝を把るより早く、重蔵の

よこつら

なぐ

横面を一つ撲った。熱いのと痛いので眼が眩んだ重蔵は、衣

か

兜くしから把出とりだした洋刃ないふを閃かして、矢庭やにわに敵の咽喉のどを一抉ひとえぐりにした。が、腹立はらたちまぎ紛れに人を殺したものの、わが眼前めのまえに横よこたれる熊

吉の屍体を見ては、彼も俄にわかに怖しくなった。

「どうしたら可よからう。」と、彼は犯跡はんせき湮滅いんめつに就ついて考えた。

(五十三)

重蔵ふとかは不図わろ彼のを思い出した。この殺人事件をして 所為しよゐ

であるかのように粧よそおって、他の目ひとを晦くらまそうと考えた。彼は熊吉

の屍体を抱き上げて、咬かみころ殺した如そくに其の疵きずぐち口を咬かんだ。が、

猶なお不安に思われるので、更に洋刃ないふを以もつて其の顔の皮を剥はぎ取った。

きもの
衣服も剥いで赤裸あかはだかにしてしましまった。斯こうして置けば手懸てがかりも付くまいと、今度は其死骸そのを引抱ひっかかえて行つて、一町ちやうばかり先の小川ほとりの畔へ捨てて来た。

この時、村の方から松明たいまつの火が近いちかづいて、大勢の人声や跫音あしおとが乱れて聞えたので、脛すねに疵持きずつ彼は狼狽うろたえて逃げた。而しかも人里の方へ逃げるのは危険だと悟つたので、彼は案内知つたる山の方へ逃げ込んだ。雨はますます降つて来たので、彼は唯とある大きな岩蔭に隠れて、眠るとも無しに一夜を明かした。夜が明けると、雨は止んだ。けれども、麓ふもとでは昨夜さくやの殺人事件の詮議が厳しかろうと推察されるので、彼は直ただちに山を降くだるほどの勇氣は無かつた。今日きよう一日は山中に潜伏して、日の暮るるを待つて里へ出る方が安

全であろうと、飢い腹を抱えて当途も無しに彷徨う中に、彼は大きな谷川の畔に出た。

瞰上れば我が頭の上には、高さ幾丈の絶壁が峭立っていて、そこは彼の虎ヶ窟なることを思い当った。若い男と女とが社会の煩さい圧迫を脱れて、自由なる恋を楽しんだ故蹟である。

「俺もあの時は若かつたな。」

重蔵も漫ろに三十年前の夢を辿って、谷川の流に映る自己の白髪頭を撫でた。それに付けてもお杉は何うしたろう。生きては俺を恨んでいるだろう、死んでは俺を呪っているだろう。

「俺も悪いことを為した。」と、彼は今更の様に悔恨の情に打たれた。が、其のお杉は二十年前から此の旧巢へ戻って、加之も今や

其その老おいたる屍かばねを窟くつの底そこに横よこえていようとは夢にも思い及およばなかつた。何はあれ、ここは屈くつき竟ようの隠れ家である。万一、
 ままに棲すんでゐるならば、之これに乞ねがうて何等なんらかの食物を得て、一時の空腹くふぷを凌しのごうとも思つた。其昔その、
 の人のように　　を恐おそしい者とも思わなかつた寧むしろ旧ふるい友達を尋ねて、
 当分の隠れ場所を借りようか位ぐらいに思つていたのである。

彼は窟くつに暫く棲すんでいたので、岩穴いわから此この川辺へ抜け出る間か通とを心得こころえていた。彼は直ただちに其穴そのを見出して、蛇へびのように潜もぐり込こむと、暗くらい中で恰あたか彼かの市郎いちろうに出逢であつたのであつた。市郎は彼が家出のちの後に生なれた児こであるから、相互たがいに顔を見識みしろう筈はずはなかつたが、其その詞ことばの端はしに因よつて、重蔵は早くも彼が角川家の倅せがれであ

ることを悟った。で、一旦は其奇遇そのきぐうに驚いたが、今は其そんなことを詮議する場合でない。彼は頼まるるままに角川家へ使つかする意つもりで、兎とも角かくも窟の外へ走り出た。

外へ出ると、又もや重太郎に逢った。が、これも相互たがいに顔を見み識しらなかつたので、二十年振ふりで初めて邂逅めぐりあつた現在の父と子が、此ここに忽ち敵となつた。二人は引組ひつくんだまま崖から転げ落ちると、下には幸いに熊笹が茂つていたので、身体には別けに怪我がもなかつた。けれども、格闘たたかいは此ここのままに止やまなかつた。二人は此ここで又もや組くみうち討うちを始めたが、若い重太郎は遂ついに老たる父を捻伏ねじふせた。彼は母の仇かたきと叫びつつ、持つたる洋刃やないふを重蔵の喉のどへ差付けたのである。

急所を刺された父は殆ど氣を失つて倒れた。重太郎は恐く何処へか立去つたのであろう。それから塚田巡査に発見されるまでは、重蔵も夢心地で何にも知らなかった。

おい
老たる浮浪者の懺悔は之で了つた。

「私も女房や子を捨てて逃げました。友達を殺して逃げました。

それだけの罪でも碌なことろくの無いのは当然あたりまえです。二十年振ふりで

現在の子に邂逅めぐりあしながら、其手そのに掛かつて殺されると云うのも自

然の因縁でしょう。斯う何も彼も白状かして了しまえば、私は人殺しの

犯人ですから何うせ無事には済みますまい。寧いっそ此このまま死んで

了しまつて、地獄にいるお杉に謝つた方が可ようございます。」

彼の眼には悔恨の涙が見えた。警官も医師も其その自殺を懼おそれて

昼夜警戒していたが、彼は一旦快方に赴いたにも拘らず、爾来再び模様が悪くなつて、囁言のように斯んなことを叫び続けた。「お杉……堪忍して呉れ。俺が悪かった。お杉……お杉……重太郎……。熊吉、赦して呉れ。熱い、熱い、地獄の火が……。」「斯くして、三日の後に重蔵は死んだ。人間の運命は不思議なもので、彼は故郷の土と化るべく、偶然にここへ歸つて来たのであった。

(五十四)

十一月も中旬になつた。

飛驒の冬は愈いよいよ迫つて来て、霜は臙やがて雪となるらしい、鯨の群
 のような黒い雲が山から里へ掩おおつて来た。この三日ばかりは日も
 見えなかった、風も吹かなかった。唯ただ天地あんとん暗澹うちの中に、寒い日
 が静しずかに暮れて、寒い夜が静しずかに明けた。この沈黙は恐るべき大雪を
 齎もたらす前兆である。里の人家では何れも冬ふゆ籠こもりの準備に掛かつた。
 午後三時、一人の青年わかものが村境むらぎかいの小高い丘に立つて、薄暗
 い町の方かたを遠く瞰みおろ下していた。彼は重太郎である。大方の冬木立
 は赤裸あかはだかになった今日此頃このごろでも、樅もみの林のみは常磐ときわの緑を誇つて、
 一丈に余る高い梢は灰色の空を凌しのいで矗すくすく々と聳そびえていた。この
 深林しんりんを背景に、重太郎は無言の俳優やくしやとして舞台に立っていた。
 彼は恋しいお葉と泣いて別れた。更に父と知らずして父を傷きずつ

た。お葉が形見の山椿の枝を抱えて、一旦は其場から姿を隠したが、流石に遠くは立去らなかつた。彼は木間や岩蔭に潜んで、絶えず其後の模様を窺っていると、安行も死んだ、お杉も死んだ、そのころの一人も死んだ。其屍体は何れも里へ運び去られたのである。安行や　　の死就ては、彼は何にも考えなかつたが、お杉の死は彼の胸を深く抉つた。えぐ二十年来この窟に隠れ棲んで、殆ど人間との交際を断つていた此の母子二人は、さながら車の両輪の如き関係であつた。今や其母を亡つて、彼は殆ど片輪になつて了つた。しま曩の夜、母から十日の内には死ぬと云い聞かされた時には、彼は心竊かにお葉というものを頼みにしていた。が、それも希望の綱が切れた。彼は枝を離れた木葉のように、風のまにまに飛んで行

くより他は無かった。

ここばかりが自分の天地でないことは、重太郎も流石さすがに知らぬでは無かった。母に別れ、お葉に離れて、必ずしも此この山奥に棲んでゐる必要は無いと思つた。けれども、窟の底には母に教えられた大切な宝が有る。之これを持出もちだして他ひとに売れば、自分はお金満家になれるのである。乞食を為しないでも済むのである。ここを立去たちさる前に、先まず彼かの宝を持出もちださねばならぬと、彼は昼夜この辺あたりを徘徊ひそして、窃ひそかに好いい機会を窺うかがつていたが、彼かの事件以来、窟には多数の警官が絶えず見張つてゐるので、彼も迂濶うかつに踏込ふみこむ隙を見出し得なかつた。

と云つて、此このままに立去たちさるほどの断念あきらめは付かぬ。断念の付

かぬのも無理はない。重太郎は宝に心を惹ひかれて、徒爾いたずらに幾日かを煩悶うちの中に送った。勿論もちろん、普通の人とは違つて、山に馴れたる彼は寢床や食物には困らなかつた。岩を枕にして眠つた、木こ実のみを拾つて食つた。斯くして日を暮くらす間に、塚田巡査に一度見付けられたが、幸いに逃れた。

「あの宝は俺おれの物だ。俺が持つて行くのに不思議があるものか。」
重太郎は斯こうも考えた。けれども、自分の姿を見れば直ただちに追跡する警官等が、其理屈そのを肯きいて呉くれるや否やを危あやんだ。警官等は自分の敵であると彼は一図いちずに信じていた。寧いそ腕力うでづ付で奪い取るうかとも考えたが、剣を佩おびたる多数の警官と闘うことは、彼も流石さすがにはばかはつた。この場合、味方と頼むのは多年同棲したるで

あるが、彼等も其^{その}以来何処^{どこ}へ隠れたか姿を見せぬ。母と友とに離れたる孤独の重太郎は、ここらあたりを出没して空しく夜と昼とを送っているのであつた。

其^{そのあいだ}間も彼は山椿の枝を放さなかつた。紅い蕾^{つぼみ}は疾^とくに碎けて了^{しま}つたが、恋しき女の魂魄^{たましい}が宿れるもののように、彼は其^その枯枝を大事に抱えていた。

今日も漸^{ようや}く暮れかかつて来た。灰色の低い雲は町の空一杯に拡がっていた。

「雪が来るな。」と、重太郎も思った。

更に山の方を振返^{ふりかえ}つて見ると、三方崩^{さんぼうくず}れの彼方^{あなた}から不思議な形の黒雲が勃^{むく}々^{むく}と湧き出して来た。例えば大入道のような

怪物が黒い衣服きものの裳すそを長くひいて、太い片腕を長く突き出したような形で、徐しずかに北の空から歩んで来た。重太郎は眼も放さずに怪物の近くちかづのを仰みぎ視た。

普通の人これは之を不思議の雲と見るであらうが、重太郎は更に之を不思議の物と見た。彼は之これを一種の悪魔であると思つた。あの雲が出る時には必ず人間わがわいに禍があると、小児こどもの時から母に教えられたのであつた。

現在の重太郎に取つては、里の人間は総て我が敵であると云つても可よい。其その里に向つて、悪魔は天を翔かけ行くのである。彼は云い知れぬ一種の愉快を感じて、猶なほも雲の行方を睨にらんでいると、黒い悪魔の手は漸次しだいに拡がつて、今や重太郎の頭の上を過ぎた。

彼は思わず跪ひざまずいて、天を拝した。

(五十五)

日は全く暮れた。悪魔のような黒雲くろくもは町から村へと大きな手を拡げて了しまった。ここに有るほどの家も人も、総て悪魔の黒い袖の下に包まれたのであった。

今までは凍り着いたように静寂しずかであつた町も村も、俄にわかに何となく闇さわがしくなつた。鴉や雀は何物にか驚いたように啼き出した。犬しきりも頻に吠え出した。山の方では猿が悲しそうに叫び出した。重太郎も一種の不安を感じて、何の意きも無しに丘を駆け降りた。

鳥の声は又止んだ、犬や猿も啼き止んだ。天地は再び旧の寂もとせきば

寞くに復かえったかと思うと、灰のような細こまかい雪が音もせず而降ふつて

来た。斯こういう前まえ触ふれの氣配を以て降ふつて来た雪は、一丈に達せ

ざれば止まぬのである。重太郎も骨に沁しみむような寒氣さむさを覺えた。

「山へ歸かへつて焚火でも為しようか。」

懷ふところ中を探ると、燐寸まつちの箱は既もう空虛からであつた。彼は舌打したうちし

て明箱あきばこを投ほうり出した。此このうえ上は何とかして燐寸を求め得ねばな

らぬ。重太郎は思案して町の方かたへ歩み去つた。燐寸の尽きたる時、

これを人家より盗み去るのは彼が年来の習ならいであつた。

今も此目的こので彼は町の方かたへ忍び出た。細こまかい雪は益々烈しく降つ

て来た。

駅へ入ると、大方の家は既に戸を閉じていた。雨風を恐れぬ重
 太郎も、此雪には流石に面を向けられぬので、成べく人家の軒下
 を伝つて歩くと、暗い町の中で唯一軒、燈火の外へ洩れる家を見
 た。門には枯柳が骸骨のように立っていた。

「ああ、柳屋か。」

重太郎の血は俄に沸いた。眼に見えぬ糸に曳かる様に、彼は
 ふらふらと其の門口に窺い寄ると、奥には春めいた空氣が漲つ
 て、男や女の笑い声が聞えた。やがて三味線の音が冴えて聞えた。

美濃の柳と、近江の柳。

風のまにまに纏れて解けて、

国は違えど、恋はする。

唄の声は正しくお葉であつた。重太郎は枯柳に犇と取付いて、酔えるように耳を澄していた。雪はいよいよ降頻つて、重太郎も柳も真白になつた。

糸の音が止むと、又もや話声や笑い声が聞えた。其中にお葉の声も聞えるかと、重太郎は猶も耳を傾けていた。

客は矢はり鉾山に關係の人らしい、酔を帯びた調子は高かつた。「何うだい、到頭降つて来たらしいぜ。過日から催していたんだから、滅多に止むまいよ。困つたもんだ。」

「可いじゃありませんか。何うせ寒い中は休みでしようから、当

分はここの家うち ふゆごもに冬籠りを為なさいよ。」と、若い女の声。これはお葉ではなかった。

「だが、雪が降つて食物くいものが無くなると、わろが山から里へ出て来ると云うじゃアないか。うつかりよいたお迂濶醉倒れている処を、さら攫つて行かれちやア大変だからね。ははははは。」

「大丈夫、も既もう何処どこかへ行つて了しまつてよ。」と、今度はお葉の声であつた。

「ほんとうに過日このあいだ さわぎの騒動は大変だったわねえ。」と、若い女が相あ槌いづちを打つた。

「あやし妾さわぎあの騒動じゃア酷ひどい目に逢つて了しまつた。」と、お葉が口惜くやしそうに云つた。

「お前も 攫さらわれたんだと云うじゃアないか。」と、客は笑つた。

「嘘よ。あたし妾はお杉婆ばばあの魔法遣まほうつかいに電氣を掛けられて、夢中でふらふら行つたんですわ。だから、何にも知りやアし為しないのに、警察では種々いろいろな詮議をして……。ほんとうに忌いやになつて了しまつた。

角川の大旦那が殺されたと云うことも、家うちへ歸つてから初めて聞いた位ですもの……。」「

「でも、若旦那は運が好よかつたのね。」と、若い女の声が聞えた。

「そうさ。あやう危あやうくお杉婆ばばあに殺される所を、若旦那が早く氣が注ついたんで、お杉の方が反あべこべ対あべこべに穴の底へ墜落おっこちて死んだんですとさ。

何でも人の話で聞くと、お杉婆の身体は粉微塵こなみじんになつて居まし

たとき。」

この説明はお葉の口から出た。これと聞くや重太郎は俄に顔色を変えた。彼は懷中から秘蔵の洋刃を把出して、例の「千客万来」の行燈の火で屹と視た。

雪には少しく風が交つて来た。

(五十六)

燐寸を盗む為に里に出た重太郎は、今や柳屋の門に立つて、思ひも寄らぬ秘密を聴き出したのであつた。彼は理由を能くも糺さずに、彼の怪しき坑夫体の男を母の仇と一図に思い定めて、其場

を去らずに彼を刺止めた。^{さしと}これで復讐の役目は果したものと信じていた処が、今この人々の話を聞くと、それは自分の思い違いで、当の仇は角川市郎であつた。自分に取つては恋の仇とも云うべき角川市郎であつた。重太郎は驚き且怒つて、^{かつか}思わず拳を握つた。

母の仇は必ず討つと、彼は曩の^{さき}日お杉に誓つたのである。其仇の名は今やお葉の口から洩れた。^も気の短い重太郎は既う一刻も猶豫はならぬ、仇の血を^ぬ舐めるべき洋刃を^{ないふ}把出して、彼は俄に^{にわか}身繕^{みづくろ}いした。奥では又もやお葉の笑い声が聞えた。が、恋しい人の媚^{なまめ}かしい声も、熱したる彼の耳には既う^も入らなかつた。復讐の一念に前後を^{かえり}顧みぬ重太郎は雪を蹴立てて手負猪の^{ておいじし}ように駈け出した。

角川の家では未だ眠らなかつた。市郎の傷も漸く癒えて、此頃ころは床の上に起き直られる様ようになつたので、看病の冬子は一旦わが家へ歸つた。今日は忠一が昼から遊びに来ていたが、此雪このの為に今夜は泊る事となつて、市郎の枕まくらもと辺で相變らずわろの研究談に耽つていた。

「雪が降ると世間が静しずかだね。」

「殊にここらは山奥だもの。」と、市郎は笑つて、「まあ、これから来年の春までは、蛇や熊のように穴籠あなごもりをして居るんだよ。」

「穴籠りと云えば、の奴等此雪このに何どうしているだろう。」と、忠一は自ら問い、自ら答えて、「あんな奴等だから、雪の融とける

まで何処かの穴にでも潜っているだろうね。」

「そうだろう。併しあの以来、の噂も消え様だよ。まあ、好

塩梅だ。何しろ、金の兜は掘出物だったよ。」

「あれが真実の掘出物と云うのだろう。僕も県史や飛驒誌などを調査した結果、飛驒判官朝高という人物の伝記も大抵判った。

愈よ元の蒙古に疑い無しだ。」

「そうかねえ。」

この時、庭の竹藪でがさりと云う音が聞えた。忠一は話を止めて耳を立てた。

「何、竹が折れたんだろう。」

「いや。」と、忠一は考えて、「竹の折れる程は未だ積るまい。」

じやアないか。」と、笑いなが猶も耳を澄^{すま}していた。

音もせぬ雪は一時間の中に余^{うち}ほど積^{つも}つたらしい。庭には雪を踏^{あしおと}む蹺^{けはい}音ががさがさと聞えて、雨戸の外へ何者か窺い寄るような氣息を感じた。二人は顔を見合わした。

「いよいよ かな。」

「真逆^{まさか}……。」と、市郎は笑った。

何者か雨戸に触れた。南^{なんてん}天に積^{つも}つてゐる雪がばらばらと落ちた。忠一は衝^つと起^たつて縁側の障子を明けると、外の物音は止んだ。忠一は続いて雨戸を明けた。一面に降^{ふりしき}頻る粉雪は、戸を明けるのを待つて居た様^{よう}に、庭の方から忽ち颯と吹き込んで来た。

「や、酷^{ひど}く降るな。」と、忠一は袖で顔を払った。それから更に

庭を見渡したが、白い木立、白い竹藪、その他には何にも見えなかつた。

「じやア、風か知ら。」

云う中に、彼は雪に印せる人の足跡を見付けた。確に人の足である。加之も入口の方から庭伝いに縁先へ来て消えている。何者か忍び込んだに相違ない。忠一は愈よ眼を輝かして四辺を見渡し、雪明では何うも判然と解らぬ。

「鳥渡、燈火を貸し給え。」

彼は洋燈を持出して庭を照すと、足跡は確に残っているが、人の形は見えぬ。猶も燈火を彼地此地へ向けている中に、雪は渦巻いて降込んで来た。袖で掩う間も無しに、洋燈の火は雪風に吹

き消されて、室へやの内は俄にわかに闇となった。

忠一は引返ひっかえして燐寸まっちを擦ろうとする時、一個ひとりの小さい人間が

闇に紛れてひらりと飛び込んで来た。重太郎は縁の下に潜んで内
の様子を窺うかがっていたのである。暗い中でも眼の鋭い彼は、洋刃ないふを
逆手さかてに振翳ふりかざして直驀まっしぐら地に市郎の寢床へ跳おどり菟かかつた。

(五十七)

何者か知らぬが、不意に庭から飛び込んで来たので、忠一は早
くも其その背後うしろから組付くみついた。重太郎は焦いらって振放ふりはなそうと試みた
が、此方こなたも多少は柔道の心得があつた。

「こん畜生、温順おとなしく降参しろ。一体、貴様は何だ、何者だ。」

重太郎は物をも云わなかつた。羽翹はがいじ締めの身を悶もがきながら、洋な刃いふを逆にして背後うしろを払うと、切先きつさきは忠一が右の臂ひじを擦かすつた。これいふで思わず手を弛ゆるめる隙を見て、彼は一足踏ふみこ込んで当の仇かたきの市郎に突かかいて蒐あいてると、対手あいては早くも跳ね起きて、有合ありあう衾よぎを投げ掛けたので、小さい重太郎は頭から大きい衾かぶを被かぶつて倒れた。

「占めたッ。」

忠一は衾のりの上から乗のりかかつて押えた。が、何しろ暗いので始末が悪い。

「早く燈火あかりを持って来い。燈火を……燈火を……。」と、市郎が呼んだ。

雪は降つても未だ宵である。入口の爐を囲んでいた人々は、この声を聞いてばらばらと起つて来た。或者は手に洋燈を持った。

「何です、何うしたんです。」と、皆口々に問うた。

「賊だ、賊だ。賊を取押えたんだ。」と、忠一は叫んだ。

「何、賊だ。」と、人々は眼を皿にして袈の周圍にどやどやと集

つた。重太郎は土龍のように袈の下で蠢くのであつた。が、

彼も流石に考えた。斯る始末となつて多勢に取巻れては、到底

本意を遂げることは覚束ない。一旦はここを逃げ去つて、二度

の復讐を計る方が無事である。と、斯う考えたので、彼は故意

に小さくなつて、宛がら死せるように鎮っていた。對手が温順

いので、忠一も少しく油断した。

「燈火あかりを此方こつちへ出し給え。兎とにかく何んな奴どだか面つらを見て与やるか
ら……。」

云いいつつ徐しずかに衾めくを剥むくと、待まち構かまえたる重太郎は全身の力を籠こ
めて曳えいやと跳はね返したので、不意くわを食くらった忠一は衾めくを掴つかんだまま
仰向おほむかけに倒れた。重太郎は洋刃やないふを閃ひらかして轟然すつくと起たった。と思う
と、忽たちまちに人の袖くぐを潜くぐつて、縁先から庭へひらりと飛び降りた。
「あ、逃げた。」

人々は続いて追った。忠一も齒齧はがみをして追った。重太郎は狐の
ように雪を飛んで、早くも門外まで逃げ去った。

けれども、飽あきまで不運なる彼こは此こで又もや強敵に逢あった。巡回
中の塚田巡査あが恰あたかもここへ来合きあわせて、角燈かくとうの火そを其の鼻の先へ

突付けたのである。重太郎も之には少しく怯んだ。

背後からは忠一を先に、角川家の人々が追つて来た。前には巡查が立っている。敵に前後を挟まれた重太郎は、先ず当面の邪魔を攘うに如ずと思つたのであろう、刃物を揮つて巡查に突いて蒐つた。巡查は体を替して其利腕を掴んだが、降積む雪に靴を滑らせて、二人は折重つて倒れた。

忠一は駈け寄つて其襟髪を取ろうとしたが、此の場合、身体の小さいと云うことが重太郎に取つては非常の利益であつた。彼は早くも忠一の足の下を潜つて這い抜けた。加之も二間ばかりは四つ這いになつて走つて、又ひらりと起ち上つた。犬だか人だか判らぬ。

「賊だ、賊だ。」と、人々は口々に叫びながら追った。

この騒ぎを聞付けて、町の家々でも雨戸を明けた。「賊だ、賊

だ。」と叫ぶ声が甲から乙へと伝えられた。重太郎は哀れや逃場

を失った。それでも彼は猶一方の血路を求めて、唯ある人家の屋

根へ攀登った。茅葺、板葺、瓦葺の嫌いなく、隣から隣

へと屋根を伝つて、彼は駅尽頭の方へ逃げて行つた。

追手は漸次に人数を増して、前から後から雪を丸めて投げた。

この雪礫を防ぐ手段として、重太郎も屋根から石を投げた。

雪国の習として、板屋根には沢山の石が載せてあるので、彼は手

当次第に取つて投げた。石の礫と雪の礫とが上下から乱れて

飛んだ。

而も敵は益々殖えるばかりである。何処も同じ彌次馬が四方から集つて来て、警官や忠一等に声援を与えた。其中に長い梯子を持ちだして来る者もあつた。塚田巡査は靴を脱いで屋根に登つた。二三人の消防夫も続いて登つた。斯う肉薄して来られては堪らぬ。重太郎も流石に根負がして、遂に屋根から飛び降りた。但し往来の方へ出るのを避けて、彼は裏手の方へ飛んだ。

(五十八)

重太郎の飛び降りたのは、美濃屋という雑穀屋の裏口であつた。追手の一組は早くも駅尽頭の出口を扼して、他の一組は

直ただちに美濃屋に向つた。ここらの町家まちやは裏手に庭や空地あきちを有もつて
 いるのが習ならいであるから、巡査等は同家どうけに踏ふみこ込んで先まず裏庭せんざを穿
 索くした。が、縁の下にも庭の隅にも重太郎の姿は見えなかつた。
 見えないのも道理で、重太郎はここへ飛び降りると、直すぐに垣根
 を乗越のりこえて、隣から隣へと四五軒も逃げた。折から烈しく降る雪
 は、彼の小さい足跡ただを直うずちに埋め消して、人には鳥渡判ちよつとらぬの
 であつた。

「この雪の降るのに何を騒いでいるんだろうねえ。」

お葉は独ひとりごと語ことを云いながら裏庭の雨戸を明けた。柳屋の客も

女も、この騒きざつぎを聞附ききつけて、何いずれも表へ見物に出たが、お葉は

「何つまの、詰つまらない。」と云う風で、先刻さつきから一人残つていたので

ある。彼女は大分酔っていた。

雪風ゆきかぜに熱い頬を吹かせながら、お葉は快心いこころもち地に庭前にわさきを眺めていると、松の樹の下に何だか白い物の蹲踞しゃがんでいるのを不図と見付けた。どうやら人のようである。

「誰だい。そこにいるのは……。」と、お葉は試みに声をかけた。声の主を早くも其れと知ったのであろう、白い物は勃々むくむくと起き上あがつて、縁の前さきへ忍んで来た。障子を洩もる燈火の光に透すかして視みると、それは雪だらけの重太郎であつた。先刻さつきからの格闘たたかいで疲れたと見えて、流石さすがの彼も切なそうに肩で息をしていた。

「まあ、重さん。」

お葉も少しく意外に驚いて、霎時しばらくその其顔を眺めていた。雪は小

歇やみなく降くだっていた。

「燐ま寸つちを呉くれないか。」と、重太郎は低い声で云った。

「燐寸ほしが欲ほいの。そんなものは幾いく許くでも上げるけれども、一体どうして今頃こんな所へ来たのさ。」

「仇かたきを討うちに行いったんだ。」

「何どこ処こへ……。」

「角川うの家うちへ……。」

お葉いはよい驚おどいて、縁はから半はん身しん乗の出りした。

「それで何どうしたの。仇うを討うったの。」

重太郎は口く惜やしそうに頭かしらを掉ふった。

「角川の息子を殺ころして与やろうと思おもって行いったんだけれども、見付

かつたんで無効^{だめ}だった。それから大勢に追掛^{おつか}けられて、やツと此^こ処まで逃げて来たんだ。」

「じゃア、今の騒^{さわぎ}はお前さんだね。だが、角川の若旦那を何故殺そうとしたの。」

「阿母^{おつか}さんの仇だ。」

「どうして……。」

「先刻^{さつき}、お前^そが然う云つたのを聞いていた。俺^{おら}が表に立っている、とお前^そが人に話していたんだ。」

お葉は又驚いた。自分の口から斯^こんな騒^{さわぎ}が出^{しゅったい}来したとは、今の今まで些^{ちつ}とも知らなかつたのである。

「そりやア間違いだよ。お前さんの鑑^{かんちが}違^{ちが}いだよ。成^{なる}ほど、妾^{あかし}は

然^そう云ったけれども、若旦那が手を下^{おろ}してお前の阿母^{おつか}さんを殺したんじやアない。お前の阿母さんが背後^{うしろ}から不意に突こうとするのを、若旦那が気が注^ついて急に避^よけたもんだから、阿母さんは自分で踉蹌^{よろ}けて墜落^{おっこ}ちたんだよ。究竟^{つまり}、お前の阿母さんの方が悪いんだよ。ね、考えて御覽^{ごらん}。」

考えて見ろと云われて、重太郎は素直に考えていた。

「一体を云えば、お前さん達の方が仇なんだよ。角川の大旦那を殺したのは誰だえ。お前の阿母^{おつか}さんや^{わろ} だろう。それだから、若旦那の方こそお前さん達を怨^{うら}んでも可^いいのに、お前さんの方で反^あ対^{べこべ}に若旦那を怨むなんて、早く云えば外道^{げどう}の逆恨^{さかうらみ}で、理屈^{まるで}が全然間違っているんだよ。ね、然^そうだろう。能^よく考えて御覽。」

再び考えろと云われて、重太郎は又考えた。いかに野育ちのそだの彼でも多少の理屈は呑込のみこめるのである。加之しかも是これはお葉の説教である。復讐に凝こりかたま固こった彼の頭脳あたまの氷も、愛の温あたたかみ味で少しく融とけ初そめて来たらしい。

「そうかなあ。」と、彼は嘆息ためいきを吐ついた。

「そうさ。解とつたろう。」

重太郎は黙もくつて又考かんえていた。表でも裏でも大勢のわやわや云う声が聞えた。

(五十九)

曩さきの日、椿の枝を折つて別れてから、お葉は重太郎を憎んで居なかつた。怨うらむまじき人を怨んだのは、彼の料見りようけん違いには相違ないが、人並ならぬ彼に對むかつて深く之これを責むるのは無理である。兎とにかく市郎の身に恙つつがなかつたのは何よりの幸福さいわいであつたと、お葉は安堵の胸を撫下すと同時に、我が眼前めのまえに雪を浴びて、狗いぬ児ろのように跼うずくまつている重太郎を哀れに思つた。

「何しろ、此方こつちへお出いでよ。」

お葉は重太郎の手を取つて、縁えんに腰を掛けさせた。

「可いいよ。追手おつての人が来たら隠して上げるから、安心してお在いで。」

お前さん、寒かアないかい。」

お葉は座敷へ復かえつて、徳利と洋盃とくり こつぷとを持つて来た。

「お燗が熱過ぎているかも知れないが、一杯お飲みよ。温暖になるから……。」

「こりやア何だ。」

「お酒だよ。飲んで御覧。妾のお酌ですよ。」

重太郎はお葉の酌で、満々と注がれたる洋盃を取った。が生れてから今日まで酒と云うものの味を知らぬ彼は、熱い酒を飲むに堪えなかった。彼は一口飲んで忽ち噎せ返った。

「熱いの。」と、お葉は微笑んだ。重太郎は顔を皺めて首肯いた。

お葉は更に起つて縁先に出た。左の手には懐紙を拡げて、

右の腕も露出に松の下枝を払うと、枝も撓に積つた雪の塊は、

綿を丸めたようにほろほろと落ちて碎けた。其の白い一片を紙

に受けて、「さあ、これで温めて上げるよ。」

冷い雪はお葉の白い手から洋盃に移された。重太郎は無言で雪と酒とを一所に飲んだ。が、口に馴れぬ酒は矢はり苦いと見え、彼は二口ばかり飲んで洋盃を置いた。

「旨くないの。これを飲むと温暖になるんだけど……。」
と、お葉は笑った、「じゃア、妾が助けて上げますよ。」

お葉は其の洋盃を取って、一息にと飲み干した。重太郎は眼を丸くして眺めていたが、やがて懷中から椿の折枝を取出し、見せた。いかに大切にしている、過日から水も与らずに我肌に着けていたのであるから、蕾は已に落ち尽した、葉も已に枯れ尽して、枝も已に折れていた。恋しい人の形見と思えばこそ、

花も葉もない斯こんな枯枝を、彼は幾多の不便を忍んで今まで身に添えていたのであろう。

「お前さんも可愛い人ねえ。」

お葉の眼には涙が見えたが、衝つと起たつて再び座敷へ復かえつた。床とこの花はな瓶びんには彼の椿かが生けてあつて、手入ていれの好いい所せ為いでもあろう、紅い花は已に二輪ほど大きく綻ほころびていた。彼女かれは其その枝を持つて出た。

「これ、御覧ごらん。お前さんに貰もらつた花は、妾あたしの方でも大事にして、此この通りに花を咲かしてあるよ。」

重太郎は手に取つて、紅い花をつくづく眺めた。彼は自分の魂たま魄ましろが此花このに宿まつて、お葉の温なかき情なさけを受けているようにも思つ

た。

「どうだい、よく咲いたろう。」

「むむ。」と、重太郎も笑ましげに答えて、猶も飽かずに其花を眺めていたが、「ねえ、此花を一つ呉れないか。」

「ああ、欲ければ上げますよ。丁度二輪咲いてるから、お前さんと妾とで一個ずつ分けようじゃアないか。」

二輪の花を折って縁側に列べると、重太郎は其の一個を取った。紙に包んで上げよう。」

お葉は白い紙に紅い花を軽く包んで渡すと、重太郎は菓子を買った小児のように、莞爾しながら懷中に収めた。

「お前さん、これから何うするの。」

「宝物もちだを持出して何処どこかへ行くんだ。」

「宝物ツて、金の兜かぶとじゃア無いの。」

「むむ、何でも其そんなものだ。」

「そりやア既もう駄目。警察の方で引揚ひきあげて了しまつたと云うことよ。」

「そうかい。」

重太郎も驚いて声を揚げた。其声そのが度外どはずれに高いので、お葉は

慌あたりみかえてて四辺を顧みかえつた。

(六十)

母に別れ、棲家すみかを失つた今の重太郎に取つて、唯一たのみの依頼とい

うのは彼の尊き宝であつた。それを手に入れたいばかりで、彼は嚴重なる警官の眼を潜りつつ、今日まで此の辺を漂泊つていたのである。而も其の希望の光は今や消えた。

「俺ア矢ツ張り乞食をするより他は無いんだなあ。」と、彼は泣かぬばかりに嘆息した。實際、彼は泣くにも泣かれぬ絶望の淵に沈んだのである。

「ほんとうに可哀そうだねえ。」と、お葉も共に嘆息した。親戚も無し、職業も無し、金も無い此の人が、これから他国を彷徨いて、末は何うなることであろう。何時までも乞食をしているより他はあるまい。いや、其の乞食すらも満足に能るか何うだか解つたものでは無い。斯うなると、人間よりも犬の方が寧ろ優で

ある。お葉は犬にも劣った重太郎の不幸に泣いた。

が、二人は何時^{いつ}までも泣いている場合でなかった。追手^{おつて}は美濃屋の庭を探し^{つく}尽して、更に両隣を獵^{あさ}り始めた。人の声が漸次^{しだい}に近^{ちかづ}いた。警官の角燈^{かくとう}が雪に映じて閃いた。

「あ、此方^{こつち}へ来たよ。」

お葉が眼を拭^ふいて起^たち上^{あが}ると、重太郎も無言で起^たつた。雪を踏む大勢の登^{あしおと}音が隣に近^{ちかづ}いて来た。

危険^{きけん}が漸^{ようや}く迫ると知つて、重太郎の眼は俄^{にわか}に鋭^{けわ}しくなつた。彼は例の野性を再び發揮したのであろう、洋刃^{やうふ}を逆手^{さかて}に持つて庭の真^{まんなか}中^{なかつち}に進み出た。

「其方^{そつち}へ行つちやア危ない。此方^{こつち}から窃^{そつ}と出る方が可い。」

お葉は素足で雪を踏んで、庭口の裏木戸を音せぬように明けると、重太郎は何にも云わずに走つて出た。何を思い出したか、お葉は急に「あ、鳥渡……。」と呼び止めたが、重太郎は見返りもせずにはなけり行つた。

たとい乞食をするにしても、土方をするにしても、之から他土地へ行こうと云うには、多少の路銀が無くてはならぬ。咄嗟の間にお葉は之を思い出したのであつた。

彼女は慌てて又もや座敷へ引返して、先ず有合う燐寸を我袂に入れた。更に見廻すと、床の間の傍には客の紙入が遺し

てあつて、人はまだ誰も歸つて来なかつた。お葉は其紙入から札と銀貨を好加減に掴み出して、数えもせずに紙に包んだ。之を

懷中ふところに押込おしこんで、彼女かれも裏木戸から駈け出した。

この時、塚田巡查を先に四五人の追手おってが裏口へ廻つて来た。素足で雪の中を駈けて行くお葉の姿を不思議と見たのであろう、巡查は角燈かくとうを翳かざして呼び止めたが、お葉は聞かぬ振ふりをして駈抜かけぬけて了しまつた。

「変な奴ですな。」と、忠一が云つた。

「あれは此この家うちのお葉という女ですが……。 」と、云いながら巡查も考えた。不徳ふとく要領ようりょうの為に一旦は釈放したものの、お葉はわろ

一件に就ついて何等かの関係ありげにも見ゆる女である。それが今この場合に雪中を跣足はだしで駈歩かけあるくのは、何か仔細すくそがあるらしくも思われるので、巡查も職掌柄、直に其跡を追つて行つた。

夜の雪はますます烈しくなつて来た。風も亦^{また}吹き募^つつて来た。

天から降る雪と地に敷く雪とが一つになつて、真^ま白^{しろ}な大^お浪^お小^な波^{なみ}が到る処に渦を卷いて狂つた。其^その凄^ふじい吹雪^ぶの中^きを、お葉は傘も挿^ささずに夢中で駈^かけた。

「重^{じゅう}さん……。重太郎さん……。」

声は吹雪に隔^{へだ}てられて聞えないので、重太郎の小さい姿は十間^{けん}ばかりの先に見えつ隠れつしながらも、お葉は容易に追いつめることが能^{でき}なかつた。加^{しか}之^かも風の吹き廻しで、声は却^あつて後^{あと}の方^{かた}へ響くので、巡査は彼女^{かれ}が重太郎を呼ぶ声を聞いた。忠一の耳にもお葉の声が聞えた。重太郎の名を聞いては愈^いよ捨^{すて}置^おかれぬ、巡査も人々も続いて其^{その}跡を追つた。が、何分にも眼^め口^{くち}を撲^うつ雪が烈し

いので、人々は火事場の烟けむりに噎むせたように、殆ど東西の方角が付かなくなつて来た。

この中でも、お葉は例の本性を發揮して、飽あくまでも強情に吹雪を衝ついて進んだ。駅しゆくを出ると風も雪も愈いよいよよ強くなつて来た。山国の冬に馴かれたる彼女かれは、泳ぐように雪を搔かいて歩んだ。が、心は矢竹やたけに遡はつても彼女かれは矢やはり女である。村境むらざかいまで来る中うちに、遂に重太郎の姿を見失つたのみか、我も大浪おおなみのような雪風ゆきかぜに吹き遣やられて、唯とある茅葺屋根かやぶきの軒下つまずに蹉つまずき倒れた。雪は彼女かれのような体ていになつた。

この茅葺かやぶきは隣に遠い一軒家であつた。加之しかも空屋あきやと見えて、

内は真の闇、鎮しずまり返かへつて物の音おとも聞えなかつた。

(六十一)

お葉は雪を払いつつ又起き上あがつた。酒の酔よも全く醒めて了しまつた。
 彼女かれも流石さすがに狂人きちがいではない。此この吹雪ふぶきの中を的途あてども無しに駈かけ歩いたとて、重太郎の行方は知れそうも無いのに、何時いつまで彷徨うろついているのも馬鹿馬鹿しいと思つた。

「もう諦めて帰ろうか。」

それにしても生憎あやにくに雪が酷い。兎とも角かくも一時を凌しのぐ為に、彼女かれは此この空屋あきやの戸を明けようとすると、半朽なかばくちたる雨戸は折柄おりからの

風に煽られて碯はたと倒れた。お葉は転げるように内へ入った。

「おお、寒い。」と、彼女かれは肩を縮すくめつつ四辺あたりを見廻すと、暗い家いえの中には何物も無かった。更に雪明ゆきあかりで透すかして視みると、土間の隅には二三枚の荒あらむしろ蕨すいが積み重ねてあつたので、お葉は之これを持も出して先まず框かまちの上に敷いた。腰おろを卸して扱さてほつと息を吐くと、彼女かれは今更のように骨に沁しむ寒氣さむさを感じた。

何か焚火でもする材料は無いかと、お葉は急いたとに我が袂たもとを探ると、重太郎ちゅうたろうに与やろうと思つて折角せつかく持つて来た燐寸まっちは、何時いつの間にかふりおと振落しして了しまつた。仕方がないと舌打したうちしながら、倒れた戸の間あいだから表を覗いて見ると、風も雪もますます暴あれて来た。こんな所に何時いつまでも躊躇ぐずぐずしていたら、凍こごえて死しまんで了しまうかも知れぬ。

夜の更けぬ間に些ちつとも早く帰った方が伶俐りこうだと、お葉は鬢びんの雪を
払いつつ、弛ゆるんだ帯を締しめ直なおして起たった。

この時、がさがさと雪を踏む登あしおと音が聞えて、何者か此この門かどぐ
口ちへ走り寄よつたらしい。若もしや重太郎か、但ただしは追手おつての者かと、

お葉は眼を据すかえて透みし視る間に、人か猿か判らぬような者が雪を
蹴けつてちよこちよこと飛び込んで来た。加しか之そも其ふたりれは二人であつ
た。と思うと、後あとから又一人入いつて来た。後の一人は色の白い女
を抱かかえているらしい。

「おや、何だろう。」

お葉も不思議に思った。暗い隅の方へ身を退ひいて、霎しばらく時其その
様子を窺のぞっていると、新しく入いつて来た三人は一種奇怪な声を出

してキキと笑った。其声は確に記憶がある。曩の日彼の虎ヶ窟で聞いた山やまわろの叫び声であつた。

此の雪の夜に、何処からか若い女を攫つて来たのであらう。お葉は愈よ驚き怪んで、猶も竊かに其の成行を窺つていた。

家の中は何分にも暗いので、お葉は女の顔を能く見ることができなかつたが、若し其顔を知つたらば彼女は更に驚いたに相違ない。今や攫われて来た若い女は、彼の吉岡の冬子であつた。

故に冬子を奪い出して来たのであらう。彼等の料見は到底普通の人間の想像し得べき限でないが、兎にかく或罪惡を犯すべき犠牲として、若い処女を担ぎ出して来たものと察せられた。冬子は口に桃色の手巾を捻込まれているので、泣くにも叫ぶ

にも声を立てられなかった。

我が恋の仇かたきとも云うべき冬子が斯かかる危難に陥っていると知った

ら、お葉は此際このさいど何んな処置を取ったであらう。が、表より洩もる

朧おぼろの雪明ゆきあかりでは、お葉に其れそと判然解はつきりらなかった。彼女かれは単

に、飢食えじきとなるべき若い女の不幸を憫あわれんで、何とかして之これを

拯すくつて与やりたいたと思つたのである。而しかも対あいて手は 三人で此方こつちは

女一人、迂濶うっかり加勢に飛び出したら自分も何んな酷い目に遭どうかも

知れぬ。お葉は息を殺して猶なおも窺のぞつていると、彼等は頻しきりにキキと

笑いながら冬子を彼かの荒あらむしろ蕨もすその上に投げ出した。

冬子も一生懸命である。裳もすそを乱して一旦は倒れたが又忽たちまち跳はね

起きて、脱兎だつとの如くに表へ逃げ出そうとするのを、 は飛か薙かつ

て又引据ひきすえた。お葉も既もう見ては居いられぬ。さりとして何等の武器をも持たぬ彼女かれは、咄嗟とつさの間に思案を定めて、頭に挿さしている銀かんざしの簪を抜き取った。

目前の獲物に気を奪われていた 共は、暗い中から突蹴おどり出たお葉の姿に驚く間ひまもなく、彼女が逆手さかてに持ったる簪の尖端とがりは、冬子に最も近き一人いちにんの左の眼に突き立った。不意と云い、急所と云い、彼は猿のような悲鳴を揚げて倒れた。

「ちきしやう留生め。何を為しやアがるんだ。早く何処どこへ行いつて了しまえ。」と、お葉は勝誇かちほこつて叫んだ。思いも寄らぬ救済すくいの手を得た冬子まりは、鞠のように転がってお葉の背後うしろに隠れた。

けれども、敵はまだ二人ににんを剩あましている。加之しかも一人いちにんの味方を

傷けられた彼等は、瞋つて哮つてお葉に突進して来た。洋刃と小刀は彼女の眼前に閃いた。冬子も恩人の危険を見ては居られぬ、這いながら一人の足に絡み付くと、は鉄のような爪先で強く蹴放したので、彼女は脾腹を傷めたのであろう、一旦は氣を失つて倒れた。は左右からお葉に迫った。

「畜生……畜生……。」と、お葉は罵りながら逃げ廻った。

(六十二)

追手の人々も同く村境まで走つて来たが、折柄の烈しい吹雪に隔てられて、互に離れ離れになつて了つた。其中でも忠

一は勇氣を鼓こして直まつ驀しぐら地に駈かけた。が、咫尺しせきも弁わぜざる冥めい濛もうの雪には彼も少しく辟へき易えきして、逃にぐるとも無しに彼の空屋あきやの軒のきさ前きへ転まげ込んだ。

雪ゆき明あかりと一口に云うものの、白い雪も斯こう一面に烈しく降つ

て来ては雨と変らぬまでに天地は暗いのである。況まして鎖とぎされたる

家いえの内は殆ど真の闇であつたが、彼は危あやうくも吹き倒されんとする

雪風ゆきかぜを凌しのぐ為ために、兎とも角かくも一步踏み込もうとする途端に、内に

は怪しい唸うなり声こえが断き続れに聞えた。

彼は俄にわかに立止たちどまつて声こゑする方かたを透すかし視みたが、生憎あやにくに暗いので正

体は判らぬ。更に耳を澄すまして窺うかがうと、声は一人ひとりでない、尠すくなくも二

人たり以上の人が倒れて苦くるんでいるらしい。扱さてはここにも何か椿事ちんじが

起おこっているに相違ないと、忠一も驚いて身構まっえしたが、燐寸まっを持
 たぬ彼は暗やみを照てらすべき便宜やすがもないので、拔ぬ足きあししながら徐々そろそろと
 探り寄ると、彼は忽たちまち或あるもの物に蹠つまずいた。跪ひざまずいて探つて見ると、之これ
 は女らしい、長い髪を乱して土に曳ひいて、其その頬から喉のどの辺には生な
 まあたた温ぬかい血が流れていた。

忠一も一旦は悸然ぎよつとしたが、猶なお其の様子を見届ける為に、倒れ
 たる女を抱おこえ起して、比較的薄明かどぐちるい門口へ連れ出して見ると、
 正まさしく女には相違ないが、もう息は絶えていた。

「これは一体何者だろう。」

彼は猶なお能く其その顔を見届みとけようと、朧おぼろの雪ゆき明あかりを便宜たよりに凝じつと見
 詰しめてゐる時、忽たちまち我が背後うしろに方あたつて物の氣息けはいを聴いたので、忠

一は驚いて屹きつと顧みると、物の音おとは又止やんだ。雪風ゆきかぜはいよいよ吹き募つつて、此この一軒家は大地震おおじしんのようにめりめりと揺ゆいだ。

内には此女このの他ほかにも未まだ何者か倒れて居る筈であるから、忠一は再び探りながら入った。が、不意に何どんな敵が襲つて来ぬとも限らぬので、彼は大いに用心して、土間に身を伏して這いながら進んだ。微かすかな唸うなり声こえが左の隅に聞えたので、彼は其方そのほうへ探つて行くと、一枚の荒あら蕨むしろが手に触れた。蕨そのを跳退はねのけて進もうとすると、何者か其蕨そのの端を固く掴んでゐるらしい。更に探つて見ると、果はたして此処ここにも人らしい者が拳を握つて倒れていた。

と思う途端に、又もや背後うしろに物音が聞えた。暗い中から猿のような者が刃物を閃かして来て、忠一の頸くびを刺そうとするのであつ

た。はツと驚くと同時に、彼は幸いに這つていたので、矢庭やにわに敵の片足を取つて引いて、倒れる所を乗掛のりかかつて先ず其まその胸の上に片膝突いた。

「貴様は何者だツ。」

敵は何とも答えずに、力の限り跳返はねかえそうと悶もがいたが、柔道を心得たる忠一は急所を押えて放さぬので、敵は倒れながらに刃物を打振うちふつて、下から忠一の喉のどを突こうと企てた。が、右の腕も緊しかと掴まれたので自由が利きかぬ。敵は獣のような奇怪な声を絞つて、頻しきりうなに唸うなった。

「さあ、どうだ、降参しろ。」

忠一は左に敵の腕を押えて、右の手で敵の喉輪のどわを責めた。敵は

苦しうに唸つて悶もがいていたが、もう叶かなわぬと覚悟したのである

う、一生懸命に跳返はねかえすと同時に、右の手に握つたる刃物を左に

持換えて、我と我が胸を力任せに抉えぐると、鮮血は颯と迸なまち さつほとばしつて、上

なる忠一の半面はんめん あけを朱に染めた。腥なまぐさい血汐に眼鼻を撲たれて、

思わず押えた手を弛ゆるめると、敵の亡骸はがつくりと倒れた。

目前の敵を殪たおし得た忠一は、先ずほつと一息吐くと共に、俄にわかに

渴かわきを覚えたので、顔に浴びたる血の飛沫しぶきを拭ぬぐいもあえず、軒の外

へひらりと駈け出して、吹溜ふきだまりの雪を手一杯に掬すくつて飲んだ。

風は相変らず轟ごうごう々と吼ほえて、灰とも烟とも譬たとえようの無い粉雪こゆき

が、あなたの山の方から縦横じゅうおうじようげ上下に乱れて吹き寄せた。

その雪ゆきけむり烟の中に迷うが如き火の光が一点、見えつ隠れつ近

寄つて来たので、忠一は思わず声をあげて呼んだ。

「おうい、おうい。」

火の光は漸次しだいに近ちかづいた。それは全身に雪を浴びたる塚田巡査の角燈かくとうであつた。

「やあ。」

「やあ。」

双方が顔を見合みあせて叫あんだ。

「あなたはお早い。既もうここへ来ていたのですか。」と、巡査は雪を払いながら軒下に立つた。

「まあ、早く燈火あかりを見せて下さい。ここに大勢の人間が倒れてい
るらしいんです。」

巡査は角燈を翳^{かぎ}して内へ入った。

(六十三)

今や角燈^{かくとう}の火に照^{てら}し出^{いだ}されたる、此^この暗い空屋^{あきや}の内の光景は
 慘憺^{さんたん}、実に眼も当てられぬものであつた。先^まず入口に黒髪を振^ふ
 り^みだ^りみだ^り乱^{よこた}して横^{よこた}わっているのは彼^かのお葉^はで、彼女^{かれ}は胸や肩や喉^{のど}に数^すヶ
 所の重傷を負^おつていた。續いて眼に触れたのは醜怪^{わろ}なる三人の
 屍^い体^{ちん}で、一人^{いちにん}は眼を貫^{つらぬ}かれた上に更に胸を貫^{つらぬ}かれ、一人は脳天
 を深^{ささ}く刺^されて、荒^{あらむしろ}蕨^わの片端^{つか}を握^{つか}んだまま仰^{のけぞ}反^そつていた。最後
 の一人は左の手に小刀^{こがたな}を持^もつて、我^{われ}と我^{われ}が胸に突き立てていた。

以上四人の浅ましき屍体の他に、朱に染みたる重太郎も亦倒れていたのは意外であつた。其傍らには、彼の運命を象徴するような紅い椿の花が、地に落ちて碎けていた。

「もう是これだけかな。」

巡査は更に四辺を見廻すと、鮮血の臭の漲る家の隅に、猶一

人の若い女が倒れていた。これが最も忠一を驚かしたのであつ

たが、冬子は単に氣を失つた丈のことで、身には別に負傷の痕も無かつたので、手当てあてののち後に息を吹返した。

飛驒の山国の風雪の夕、この一軒家に於て稀有の悲劇を演じたる俳優やくしやの中で、僅に生残うち わずか いきのこっているのは幸運の冬子一人に過ぎぬ。随したがつて委くわしい事情は何人も知るに由よしない。単に冬子の

こうきよう
口 供を基礎^{どだい}として、其余^{そのよ}は好加減^{いかげん}の想像を附加^{つけくわ}えるだけの事である。

で、諸人^{しよにん}の説は先ず斯^まういうことに一致した。虎ヶ窟に棲める
魯族^{けんぞく}は、其数果^{そのかずはた}して幾人であるか判らぬが、曩^{さき}の日彼
の市郎の為に其^その女性の一^{いちにん}人を亡^{うしな}つたのは事実である。其後^{そのご}彼
等は警官に逐^おわれて山深く逃げ籠^{こも}つたが、食物は兎^ともあれ、女性
の缺乏^{けつぼう}ということが彼等の間に一種^{あいだ}の不足を感じたらしい。そ
こで彼等三人は此^この大雪に乗じて里に降り、何処^{どこ}からか女を攫^{さら}つ
て行こうと試みた。之^{これ}に魅^{みこ}まれたのが彼の冬子で、彼等は吉岡家
へ忍び寄つて窺^{うち}う中に、便所へ通^{かよ}つた冬子は手を洗うべく雨戸を
明けたので、彼等は矢庭^{やにわ}に飛び蒐^{かか}つて彼女^{かれ}を捉えた。猶^{なお}其^{その}たもと
袂^{たもと}

から手巾はんかちふを取りだして、声立てさせじと口に喰はませた。斯かくして冬子は、彼の空屋あきやまで手取り足取りに担あしどぎ去られたのであつた。空屋には偶然にも彼のお葉かが居い合あわせて、彼女かれは冬子を拯すくわんとしてと闘たたかつた。そこまでの事は冬子も知しっているが、氣を失つて倒れた後の出来事は些ちつとも判らぬ。又何どうして此処ここへ重太郎が引返ひつかえして来たか判らぬ。恐おそろは烈おそろしい吹雪に途みちを失つて、再びここまで迷つて来ると、恰あたもお葉かがに殺ころされんとする所に會つたので、彼は又お葉を拯すくわんとして闘たたかつた。其結果その、お葉も討たれ、重太郎も討たれた。二人も枕にんを駢ならべて死んだ。究竟つまり双方が相撃あいうちとなつた処へ、忠一あが後あとから又来合きあせて、残る一人いちにんのも自殺を遂げるような事になつたのであろう。

ただこれ
但し是は一種の想像に過ぎぬ。この以外にも彼等の間に何んな

秘密の糸が繋がれているかも知れぬ。普通の世間の出来事にも、

人間の浅い智慧では想像や判断の付かぬことは幾許も有る。況て

やお杉や重太郎等の關係に至つては尋常一様の理屈を以

て推断することは能まい。

これで何百年来この山国を闊した
● 睿族も、果して全滅し

たであろうか。或は猶其余類が山奥に潜んでいるであろうか。

それは何人も返答に苦む所であるが、兎にかく此の物語はお葉

と重太郎の最期を一段落として、読者と別離を告げねばならぬ。

大雪は其後幾日も降続いて、町も村も皆埋められた。悲劇の

舞台たりし彼の軒家は、三日目の夕暮に遂に潰されて了つた。

*

*

*

*

*

*

市郎と冬子の結婚は、安行死去の為に来年まで延期されたので、

忠一は^{ひとま}一先ず東京へ歸つた。それから半月ほど経つて後、^{のち}彼は市

郎の^{もと}許へ長い手紙を^{よこ}遣した。

に對する調査の報告書である。地

方の各新聞は市郎に懇願して、何れも^{いず}其^{その}記事を紙上に連載した。

原文は頗る^{すこぶ}長いものであるが、大略^ま先ず斯^こういう事であつた。

*

*

*

*

*

*

今から六百余年ぜん前の弘安こうあん年中ねんじゅうに、元げんの蒙古もうこの大軍だいぐんが我が九州に襲つて来た。北條時宗むか邀え撃つて大いに之これを敗つたことは、およ凡そ歴史を知るほどの人は所謂いわゆる「元寇げんこうの役えき」として、誰たれも諳そらんじている所である。

この大戦たいせんに参加したのは九州の諸大名ばかりでない。鎌倉ひだのくからも出征した、東海とうさん東山とうさん中国からも出征した。其その当時、飛驒ひだのくにに国くにの地頭職じとうしよくは藤原姓を冒すおか飛驒判官ひだのほうがん朝高ともたかという武將で、彼も蒙古退治の注進ちゅうしんじよう状に署名したる一人いちにんであつた。

(六十四)

朝高は異国の敵を撃破^{うちやぶ}つて歸つた。彼は凱陣^{がいじん}の家土産^{いえづと}として百人の捕虜を牽^ひいて來た。飛驒の國人^{くにびと}は驚異の眼を以て、風俗言語の全く異^{ことな}れる蒙古の兵者^{つわもの}を迎えた。

彼が捕虜を牽^ひいて來たのは、單に其功名^{そのこうみょう}を誇るが為では無かつた。九州の戦鬪^{たたかい}に於て、最後の大勝利は幸いに我に歸^きしたけれども、初度^{しよど}の戦鬪^{たたかい}は屢々^{しばしば}我に不利益であつた。敵^{いしびや}の
我の弓矢とは、其威力^{その}に於て著^{いちじ}るしい相違があつた。朝高は早くも之^{これ}を看取^{かんしゅ}して、我も彼と等しき巨砲を作ろうと思ひ立つたのである。が、其製法^{その}を知る者は日本に無いので、彼は居城高山^{たかやま}を距^さる一里^{いちり}の処^{あた}へ新に捕虜收容所を設けて、ここに百人の蒙古兵

を養い、彼等に命じて異国の　を作らせようと企てた。

この
斯時代に於て斯着眼は頗る聡明であると云わねばならぬ。が、

くわだて

彼の企画は不幸にも失敗に終った。主将の意思は必ずしも然う

では無かつたのであろうが、敵を愛することを知らぬ部下の者共

こ

は、此の異国の捕虜に対して甚だしき侮辱と虐待を加えたので、

はなは

彼等は甘じて仕事に着かなかつた。監督の武士と捕虜との間に日

ちにち

々衝突が絶えなかつた。朝高も終局には疳癰を起して、彼

しまい

かんしゃく

おこ

等を悉く斬れと命じた。

ことごと

これが捕虜の間にも洩れたと見えて、百人の蒙古兵は風雨の夜

あいだ

も

に乗じて逃走を企てた。番兵が追掛けて其幾人を捕え、其幾人を

おつか

その

その

殺したが、余の七八十人は山を越えて何処へか姿を隠して了った。

よ

いずこ

しま

飛驒は名に負う山国であるから、山又山の奥深く逃げ籠こもつた以上は、容易に狩出かりだすことも能できないので、余儀なく其儘そのままに捨置すておいた。斯かくて一年ばかりも過ぎると、或夜何者か城内へ忍び入つて、朝高が家重代いえじゅうだいの宝物たる金の兜かぶとを盗み去つたのである。無論、其詮議は極めて嚴重なものであつたが、其犯人は遂に見当らなかつた。或は曩あるいに逃走したる蒙古兵が、一種の復讐手段として斯かる悪事を働いたのではあるまいかと云う噂もあつたが、確たしかな証拠も無くて終つた。兜の行方は遂に不明であつた。

朝高の家は三代で亡ほろびた。其後幾多の変遷を経て、豊臣氏時代から徳川氏初年までは金森氏かなもりここを領していたが、金森氏が罪を獲えてから更に徳川幕府の直轄ちよっかつとなつて、所謂代官支配地いわゆる

として明治まで引続ひきつづいて来たのである。で、此土地このの人がわろの名を唱え初めたのは、何時いつの頃からか判然せぬが、古い昔には其そんな噂も聞かず、そんな記録も残っていないのを見ると、恐おそく前に記した蒙古一件以後の事ではあるまいか。他たに新しい発見がない限りは、先まず彼かのを以て蒙古人の子孫と見るのが正当の解釈であろう。

彼等は收容所を逃れ出いでて深山の奥に隠れた。で、彼かのピジョン講師の説明した如く、人の目を避けて穴の中に世を送っていたのであろう。最初はじめは遠い山奥に棲んでいたもので、他たの人間社会と接触する機会も尠すくなかったが、生活上の都合で漸次しだいに山奥から降くだつて来て、比較的に里へ近い虎ヶ窟に移り棲むようになったのでは

あるまいか。里人が此の窟こに対して、日本に無い虎という獣の名を冠かぶせたのも、何やら蒙古に關係があるらしくも思われる。里へちかづいたが近くに随したがつて、彼等は折々に人間に出逢うことが有る。又必要に迫られて、人家の食物を奪い、婦女小児しょうにを奪うことが有る。人が

の名を口にするに至ったのは多たねん此この以後の事であろう。元来野蠻の蒙古人が山奥に棲むこと多年そ、其のますます蛮化したのは怪あやしむに足らぬ。

彼等の種族が漸次しだいに減つて行くのも亦当然またの結果である。而もしか猶連綿なおとして六百余年の生活しやうにを繼續きたしたものは、彼等が折々に里を荒して、婦女を奪い小児しょうにを攫さらつて行くが為に、辛くも子孫断絶まぬかを免れ得たものと察せられる。唯ただ、いかに彼等が蛮化したと

は云え、^{わず}僅に五六百年の深山生活に^{よつ}因て、猿か人か判らぬまでに甚しく^{はなはだ}退化するや否やと云うことは、少しく疑問に属するのであるが、先ず^ま右の如くに解釈するより他^{ほか}はあるまい。

窟の内に彫つてあつた文字は正しく蒙古の字で、自分等は^{げん}元の民であるが捕われて此^{この}国に^{きた}來つた。日本の大將が残酷に^{とりあつか}取扱うので、同盟して此^{この}の山中に隠れたと云う意味を記し、最後に數十人の姓名が連署してあつた。金の^{はた}兜も果して彼等が盗み出したのであつた。

之に^{これ}因れば、蒙古人が此^{この}の窟に棲んでいたと云うことは已^{すで}に疑いもなき事実である。が、蒙古人即ち^{わろ}であるか。蒙古人は疾^とくに死絶えて、更に他^たのなる者^{かわ}残つて棲むようになったのか。

そこには未だ幾分の疑いが無いでもない。併し岩穴の中で発見された多数の骨が、最初は普通人以上の骨格を有し、其れが漸次に退化して小児のようになってゐるのを見ると、蒙古人が五六百年の間に著るしく退化して、遂にとなつたとも云得べき相当の根拠が有る。

是等の理由に因て、吉岡忠一はを以て蒙古人の子孫と認めた。
 この此以上の考證は、他の識者を待つのである。

青空文庫情報

底本：「飛騨の怪談 新編 綺堂怪奇名作選」メデアファクトリー

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

初出：「やまと新聞」

1912（大正元）年11月13日～1913（大正2）年1月21日

※「市郎君」と「市朗君」の混在は、底本通りです。

入力：川山隆

校正：江村秀之

2013年8月11日作成

2013年9月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

飛騨の怪談

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>